

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料
による言語地図とその解釈
第 1 集
(PDF 版)

2017 年 3 月 28 日

福 井 玲 編

東京大学人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈
第1集 (PDF 版)

2017 年 3 月 28 日

編者 福井 玲 (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

(連絡先)

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院人文社会系社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

本篇は、平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(一般)、課題番号 15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」）による成果の一部である。

Geolinguistic studies of the Korean language based on the data collected by
Ogura Shinpei. Volume 1 (PDF version).

March 28, 2017

Department of Korean Studies, Graduate School of Humanities and Sociology,

The University of Tokyo

Edited by Fukui, Rei (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

Copyright (c) 2017 Authors of respective articles.

This work was partly supported by Grant-in-aid Scientific Research (C), 15K02504, 2015–2017.

目 次

はじめに		iii
凡例		v
■天文		
星	李美姫	1
雹(ひょう)	福井玲	5
■時候		
秋	張河林	9
冬	李美姫	13
■地理・河海		
海	金玉雪	17
■身体		
臉(まぶた)	林茶英	21
頬	福井玲	25
臂	梁紅梅	29
■家屋		
柱	岡村佳奈	33
瓦	林茶英	37
台所	福井玲	41
■服飾		
木履(ぼくり)	山崎玲美奈	45
木綿	岩井亮雄	49
麻布	岩井亮雄	53
■飲食		
漬物	張河林	57
■農耕		
箕(み)	徐攸廷	61
石臼	林茶英	65
■花果		
百合(ゆり)の花	鮑潤叙	69
杏子(あんず)の実	鮑潤叙	77
■菜蔬		

甘藷と馬鈴薯	福井玲	81
■金石		
砂	李在鎬	85
鉄・金(かね)	福井玲	89
■器具		
硯	林茶英	93
柄(え)	梁紅梅	97
火爐	岩井亮雄	101
■走獸		
狐	李在鎬	105
■水族		
蛭	林静	109
鰕(えび)	徐旻廷	113
■昆虫・爬虫等		
蝸牛	福井玲	117
蚯蚓	朱林彬・福井玲	121
■雑		
煙	澁谷秋	125
炭	澁谷秋	129

執筆者一覧

はじめに

本篇は、小倉進平の『朝鮮語方言の研究』(1944 年、岩波書店)に掲載されている朝鮮語方言資料を言語地図化し、その結果と文献上のデータをつきあわせることによって各語彙項目の歴史を立体的に再構成し、その解釈を示したものである。筆者がさまざまな研究会において発表してきた研究と、東京大学韓国朝鮮文化研究室において行なってきた大学院の授業「韓国朝鮮語語彙史」における大学院生諸氏の発表がもとになっている。

小倉進平(1882–1944)は、朝鮮語の諸方言の研究に力を入れ、1910 年代から 1930 年代にかけて朝鮮半島全土について調査を行ない、多くの論文やモノグラフにその成果を発表したが、亡くなる直前の 1944 年には上記の著書においてその集大成を行なった。その後、彼の方言研究は河野六郎に引き継がれ、また戦後は韓国において、多くの学者による方言研究が行なわれたが、残念なことに、彼が集めた方言調査資料はいまだに十分に活用されてきたとはいえない状態にある。本編は、そのような状態にあって、それをできるだけ活用することを目指したものである。

彼の残した方言資料については、次のような長所と短所が存在する。まず、長所は、朝鮮半島全域にわたる調査である点があげられる。戦後韓国において行なわれた大規模な方言調査としては精神文化研究院によるものがあるが、朝鮮半島の南半分しか調査されていない。しかし、言うまでもなく個々の項目の解釈においては朝鮮半島全体が対象となる必要がある。そしてもう 1 つ重要な点は、本格的な方言調査としては最も古いものである点があげられる。ただし、小倉進平の被調査者は当時の普通学校の上級生が中心であったとされ、韓国で戦後に行なわれた調査で高齢者を対象にしたものは、年齢だけからすれば小倉進平の資料とあまり変わらない場合もある。しかし、今日よりはるかに標準語の影響が少なかった時代に調査されたという、調査の絶対年代の古さも重要である。

次に、短所はしばしば指摘されることであるが、項目によって調査地点が異なることである。実際、全項目数は文法項目も入れれば 1300 余りに達するが、そのうち、朝鮮半島の全域(八道)にわたっている項目は 150 余り、それより一道少ない七道にわたるものが 50 余りで、これらを合計した約 200 項目が言語地図化に適した項目である。本編は「第 1 集」としてそのうちの 33 項目を扱う。その他、語形の音声表記において、しばしば母音の長短が正確に表記されていない場合があることも短所としてあげることができる。

言語地図化の作業には、現在開発を行なっている言語地図作成用ソフトウェア Seal 8.0 を用いた。これは科学研究費(平成 27~29 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)、課題番号 15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」)を得て、開発を続けているものである。このソフトウェアはもともと福嶋秩子・福嶋祐介夫妻が開発されたもので、今回、それを Windows の最新の環境(Visual Studio)に合わせて移植し、さまざまな機能の追加を行なったもので

ある。なおこの Seal 8.0 およびマニュアルも本篇と同じウェブページで公開される予定である。

なお、『朝鮮語方言の研究』所載資料の言語地図化は本研究が初めてではなく、すでに中井精一氏による『朝鮮半島言語地図』(平成 19 年 3 月)があるが、調査地点や音声記号の表示等に難点があり、また各項目の解説が付けられていないので、畏友遠藤光暁氏の勧めもあって、今回、新たに地図化を行なうとともに、各項目の解説を執筆することにしたものである。

最後に、オリジナルの Seal のソースコードを提供してくださった福嶋秩子先生、さまざまな研究会において研究発表の機会を作ってくださっている遠藤光暁先生、また、これまで筆者の授業に参加して有益なコメントをくださったり、本書の編集作業を手助けしてくださった学生の皆さんに感謝したい。

2017 年 3 月 28 日

福 井 玲

凡 例

▶本書では『朝鮮語方言の研究』上巻に記載された資料のうちから 33 項目を選んで、解説および言語地図を提示する。33 項目のうち「甘藷」と「馬鈴薯」は関連する部分が多いので、解説はまとめて執筆してある。

▶各項目の名称は原則として小倉進平による日本語による表記に従う。ただし読みにくい場合には括弧内に読み仮名を付した。

▶語形の転写は原則として『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」13–14 頁に示されている小倉進平の音声表記に従っているが、便宜上、次の 3 つの記号は本書では別の記号に変更して示す。

小倉の記号	本書の記号
ü (上点つきの u)	i
o (o の斜体字)	ʌ
ö (o ウムラウトの斜体字)	œ

これらのうち、「o の斜体字」と「ö ウムラウトの斜体字」は済州島の独自の母音を表わすのに用いられているが、斜体字は誤読されやすいので、上で示した記号で代替させることにする。また、「上点つきの u」はハングルの ‘으’ の母音の転写に用いられているが、Times New Roman など現行のユニコード準拠のフォントでは単独の文字としては定義されておらず、特定のソフトウェアの上で補助記号の重ね合わせによって表現することは可能であるが、可搬性が低いので、やむを得ずこの母音によりふさわしいと考えられる ‘i’ で代替させることにしたものである。なお、小倉進平が用いた音声記号についての詳細な検討は編者による次の論文を参照されたい。

福井玲 (2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—『東京大学言語学論集』 37: 41–70. 東京大学言語学研究室.

なお、激音に現れる有気性を表わす記号として、小倉進平は ‘*h*’ を用いているが、本編では項目によって、それをそのまま用いている場合と、現行の IPA の標準である *h* (上付きの *h*) を用いる場合の両方がある。また、濃音の表記に用いられる声門閉鎖音の記号も項目によって通常の大きさのもの(?)と、『朝鮮語方言の研究』で用いられている上付きのもの(?)の両

方の場合があることをお断りしておく。

▶小倉進平による調査地点は『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」15–20 頁によれば 259 地点とされているが、実際に資料編に登場する調査地点はそれより 5 地点多い 264 地点である。これについても詳細は編者による上掲論文を参照されたい。なお、調査地点一覧とその位置を示す地図を凡例の末尾に掲載する。

▶過去の文献資料に見られる語形については主に中世語、近代語、開化期について提示した。その際、刊行年、書名、用例の張数などの情報を次のように略記する。なお、書名の漢字表記には日本の現行の漢字の字体を用いた。

例 문위為電 <1446 訓民正音解例本 56a>

この例では 1446 が刊行年、次いで書名、最後に張数と表裏（表が a, 裏が b）である。なお、正確な刊行年が不明の場合は次のように表示した。

例 16-- 1600 年代で下 2 桁が不明の場合

160- 1600 年代で下 1 桁が不明の場合

▶各項目にはそれぞれ参考文献を付けたが、次の 2 つはほぼすべての項目に共通するので、個別の項目で掲げるのは省略する。それ以外のものは各項目において個別に掲げることにした。

小倉進平 (1944) 『朝鮮語方言の研究』上下 2 巻. 東京：岩波書店.

李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓国言語地図』ソウル：太学社.

なお、上記以外のもののうち、多くの項目を通じて本編でしばしば言及されるものを参考までに次に掲げておく。なお、日本の読者のために、著者名、書名、出版社名で漢字表記が可能なものは漢字に直して表記した。

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987–1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南：韓國精神文化研究院.

姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』ソウル：韓国文化社.

金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.

金武林 (2012) 『韓国語語源辞典』ソウル：知識と教養.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.

金履洙編著 (1981)『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院.
 玄平孝 (1962, 修正版 1985)『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社.
 国立国語研究院 (1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.
 崔鶴根 (1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.
 崔鶴根 (1990)『増補 韓国方言辞典』ソウル：明文堂.
 志部昭平 (1990)『諺解三綱行実図研究』東京：汲古書院.
 李基文 (1991)『国語語彙史研究』ソウル：東亜出版社.
 李基文 (1998, 修正版 2002)『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社.
 劉昌惇 (1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
 한글학회 (1991)『우리말큰사전』ソウル：語文閣.

▶調査地点一覧

番号は『朝鮮語方言の研究』下巻 15-20 頁に基づくが、そこで漏れている地点については、* を表示した。各地点の行政上の所属が現在とは異なる場合があるが、これもすべて『朝鮮語方言の研究』に基づく。

全羅南道 (済州島を含む)

1 済州	2 城山	3 旌義	4 西歸	5 大靜	6 突山	7 麗水
8 光陽	9 順天	10 筏橋	11 高興	12 寶城	13 長興	14 康津
15 莞島	* 智島	16 海南	17 珍島	18 靈岩	19 木浦	20 咸平
21 靈光	22 羅州	23 和順	24 光州	25 長城	26 潭陽	27 玉果
28 谷城	29 求禮					

全羅北道

30 雲峰	31 南原	32 淳昌	33 井邑	34 高敞	35 扶安	36 金堤
37 裡里	38 群山	39 全州	40 任實	41 長水	42 鎭安	43 茂朱
44 錦山						

慶尚南道

45 蔚山	46 梁山	47 東萊	48 釜山	49 金海	50 馬山	51 巨濟
52 統營	53 固城	54 咸安	55 宜寧	56 晋州	57 泗川	58 南海
59 河東	60 山淸	61 咸陽	62 居昌	63 陝川	64 昌寧	65 密陽

慶尚北道

66 淸道	67 慶山	68 永川	69 慶州	70 浦項	71 興海	72 盈徳
73 大邱	74 高靈	75 星州	76 倭館	77 知禮	78 金泉	79 善山
80 軍威	81 義城	82 尚州	83 咸昌	84 聞慶	85 醴泉	86 安東
87 榮州	88 乃城	89 英陽	90 青松	91 道洞		

忠清南道

92 大田	93 公州	94 論山	95 江景	96 扶餘	97 鴻山	98 青陽
99 舒川	100 藍浦	101 大川	102 保寧	103 炭浦	104 廣川	105 洪城
106 海美	* 葛山	107 瑞山	108 唐津	109 沔川	110 禮山	111 温陽

112 天安	113 鳥致院					
忠清北道						
114 清州	115 報恩	116 沃川	117 永同	118 鎭川	119 陰城	120 槐山
121 忠州	122 丹陽	123 堤川				
京畿道						
124 平澤	125 安城	126 水原	127 龍仁	128 利川	129 驪州	130 楊平
131 廣州	132 京城	133 永登浦	134 仁川	135 金浦	136 江華	137 開城
138 長湍	139 汶山	140 議政府	141 漣川	142 抱川	143 加平	
江原道						
144 歙谷	145 通川	146 長箭	147 高城	148 杆城	149 襄陽	150 注文津
151 江陵	152 三陟	153 蔚珍	154 平海	155 旌善	156 寧越	157 平昌
158 原州	159 橫城	160 洪川	161 春川	162 華川	163 楊口	164 麟蹄
165 淮陽	166 金化	167 鐵原	168 平康	169 伊川		
黃海道						
170 金川	171 延安	172 海州	173 甕津	174 苔灘	175 長湍	176 松禾
177 殷栗	178 安岳	179 信川	180 載寧	181 沙里院	182 黃州	183 瑞興
184 南川	185 新溪	186 遂安	187 谷山			
咸鏡南道						
188 新高山	* 高山	189 安邊	190 元山	191 德源	192 文川	193 高原
194 永興	195 定平	196 咸興	197 五老里	198 新興	199 洪原	200 北青
201 利原	202 端川	203 豐山	204 甲山	205 惠山	206 三水	207 長津
咸鏡北道						
208 城津	209 吉州	210 明川	211 鏡城	212 羅南	213 清津	214 富居
215 富寧	* 烟台洞	216 茂山	* 明臣	217 會寧	218 鍾城	219 穩城
220 慶源	221 慶興	222 雄基				
平安南道						
223 中和	224 平壤	225 鎭南浦	226 龍岡	227 江西	228 江東	229 成川
230 陽德	231 孟山	232 寧遠	233 德川	234 价川	235 順川	236 順安
237 永柔	238 肅川	239 安州				
平安北道						
240 博川	241 寧邊	242 熙川	243 雲山	244 泰川	245 龜城	246 定州
247 宣川	248 鐵山	249 龍岩浦	250 新義州	251 義州	252 朔州	253 昌城
254 碧潼	255 楚山	256 渭原	257 江界	258 慈城	259 厚昌	

次頁に上記の地点番号を示す地図を掲載する。1-259 までの番号は小倉進平によるものと同じであり、上で述べたように、* で表示した筆者が追加した 5 地点はそれに続く 260-264 の番号を次のように割り当てて表示してある。

咸北：260 烟台洞，261 明臣，咸南：262 高山，全南：263 智島，忠南：264 葛山

星

李 美 姫

1 はじめに

韓国の標準語は $pjɔ:l$ (별) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「星」の項目で以下の5種が記録されている(上: 6-7)。(1c) 以外はすべて1音節で語頭子音に ‘p’ を、語末子音に ‘l’ を持っており、すべて $pio:l$ のバリエーションであるともみることができる。(1c)は後でも述べるが、(1b) pel に接尾辞 ‘-i’ がついたものと考えられるため、同じく $pio:l$ のバリエーションとみる。

(1) $pio:l$ 系

(1a) $pio:l$

(1b) pel

(1c) $pe-ri$

(1d) $pɛ:l$

(1e) $pi:l$

ここの表記で気になるところは (1a) $pio:l$ で j ではなく i が使われている点である。『朝鮮語方言の研究』では原則、文献上などに書かれてあるハングルを転写する場合は ‘io’, 調査した項目を音声表記する場合は ‘jo’ と表記する。しかし、時々転写と音声表記を誤って表記する場合がある。これも音声表記のつもりで誤ってローマ字転写法を書いたものと思われる¹。

そして (1a) $pio:l$ は現在の標準語である「 $pjɔ:l$ (별)」と分節音は同じであるが、長母音ではないところが異なる。文献上の記録でも:별(『訓民正音解例本』)と上声となっているので、小倉進平の調査当時も長母音で現れることが期待されるが、長母音ではないのは不思議である²。

(1b) pel は母音が ‘e’ になっているもの、(1c) $pe-ri$ は (1b) に接尾辞 ‘-i’ が付いたもの、(1d) $pɛ:l$ は母音が ‘ɛ’ で長母音のもので (1e) $pi:l$ は母音が ‘i’ で長母音のものである。

¹ もし表記どおりの発音であるとする2音節になるはずだが、音節の境界を表す「-」が使われていないので、 j の誤りとみることが妥当であるだろう。

² 小倉進平は宮城県仙台市出身であるが、東北方言では長母音が弁別的ではないことから小倉進平自身、長母音の聞き取りがあまり出来なかった可能性も考えられる。しかし他の語形においては長母音表記がされているので、真相は不明である。

2 その他の語形

その他の語形としては『韓国方言資料集 (忠清南道篇) 』に忠清南道方言として「비울」が見られた。비울は小倉進平のデータにはない語形だが、他の語形と同じく piol のバリエーションと見ることができる。しかし비울の実際の発音が ‘pi-ul’ のように母音連続の2音節だったかは不明である。

3 地理的分布

(1a) piol — 咸鏡北道を除く全国

(1b) pel — 京畿道, 黄海道, 忠清道を除く全国

(1c) pe-ri — 咸鏡北道に集中。咸鏡南道の一部

(1d) pe:l — 慶尚南道を中心に慶尚道の東部に数か所

(1e) pi:l — 全羅道, 忠清道, 慶尚道, 江原道に集中。咸鏡南道の江原道に近い地域の一部

今の標準語となっている (1a) piol (=pjol) は咸鏡北道を除く全国に広く分布している。(1b) pel は京畿道と黄海道と忠清道を除く地域、つまり比較的周辺地域に現れる。(1c) pe-ri は咸鏡北道に集中的に現れ、その他にも咸鏡南道に数か所現れる。この pe-ri は (1b) pel に接尾辞 -i が付いたものと考えられるが、これは咸鏡道方言で主格助詞が付くとき、-이가になる現象と関係があると思われる。(1d) pe:l は慶尚南道を中心に慶尚道の東部に数か所現れる。(1e) pi:l は南部地域に集中的に現れる。京畿道, 黄海道, 平安道, 咸鏡北道には全く現れない。

地域ごとに見てみると、京畿道と黄海道では今の標準語である (1a) piol だけが現れる。それと対照的に咸鏡北道では (1a) piol が全く現れない代わりに、(1c) pe-ri が現れる。済州島でも piol は現れず、その代わりに (1b) pel だけが現れる。その他の地域では (1a) piol と他の語形が共に現れる。

慶尚南道の馬山では(1b) pel と(1d) pe:l が併用されているが、この地域で e と ε が区別されていたとは考えにくいので、長母音で発音されることにより、母音が広母音化したものかもしれない。

4 文献上の記録

文献上で「星」の意味を表す語形の記録は以下のようなものがある。

星利 <郷歌の彗星歌>

星 別二 <朝鮮館訳語>

:별爲星 <1446 訓民正音解例本 60>

星 :별 성, 辰 :별 신 <1527 訓蒙字會 1a>

星 倍留(べる) <1712 和漢三才図会>

最も古い記録は郷歌の「彗星歌」に現れる「星利」である。この歌は『三国遺事』の巻5によると真平王代(6-7世紀)に作られたとされる。そしてハングルでの記録は『訓民正音解例本』の:뽕が最も古い記録である。その後16世紀の『訓蒙字會』でも同じく「辰뽕」と記録されている。これらの文献上の記録と小倉進平のデータ、そして現在の標準語が뽕であることを考え合わせると、中世から現在に至るまで他の系列の語形はなく、뽕を含む뽕系のみが使い続けられてきたと考えられる。『和漢三才図会』の「倍留(べる)」は뽕系のバリエーションである pel を記録したものと考えられる。『朝鮮物語』の「びよる」も piol を記録したものであろう。

5 考察

上記で述べたように、郷歌で「星利」と記録されていることから, pjo:l の古形を *pjə-ri と2音節語であったと推定することができる。それが中世語において上声の1音節語になり³, その上声が現代語では長母音として現れていると考えられる。このように「星」の pjo:l は比較的、古い語形を現在まで保存しているものと思われる。

そして pjo:l は地域によって様々な母音の変種が存在することがわかる。慶尚南道とその周辺地域、咸鏡道では前舌化により pel になり、慶尚南道の一部では pel がさらに長母音化と広母音化により pe:l に変化したと思われる。そして南部地方に集中的に現れる pi:l は pel が狭母音化したとも考えられるが、地理的分布を考えると pjo:l からの変形とも考えられる。咸鏡北道で現れる pe-ri は、古形を *pjə-ri だと想定すればそれを維持した形とも考えられるが、他の項目でも接尾辞 -i が付いたと思われる語形⁴が咸鏡道で見られることを考えると pel に接尾辞 -i が付いたと考えるのが自然であろう。

慶尚南道の一か所で pel と pe:l が併用されていること、現在の標準語である長母音の pjo:l が一か所も現れないことなど、小倉進平のデータの長母音には疑問が残る。そして慶尚道で pel も pe:l も現れるが、母音の長短の違いはあるものの、この時期慶尚道で[e]と[ɛ]が区別されていたとは考えにくいので本当にそうだったか疑わしい。

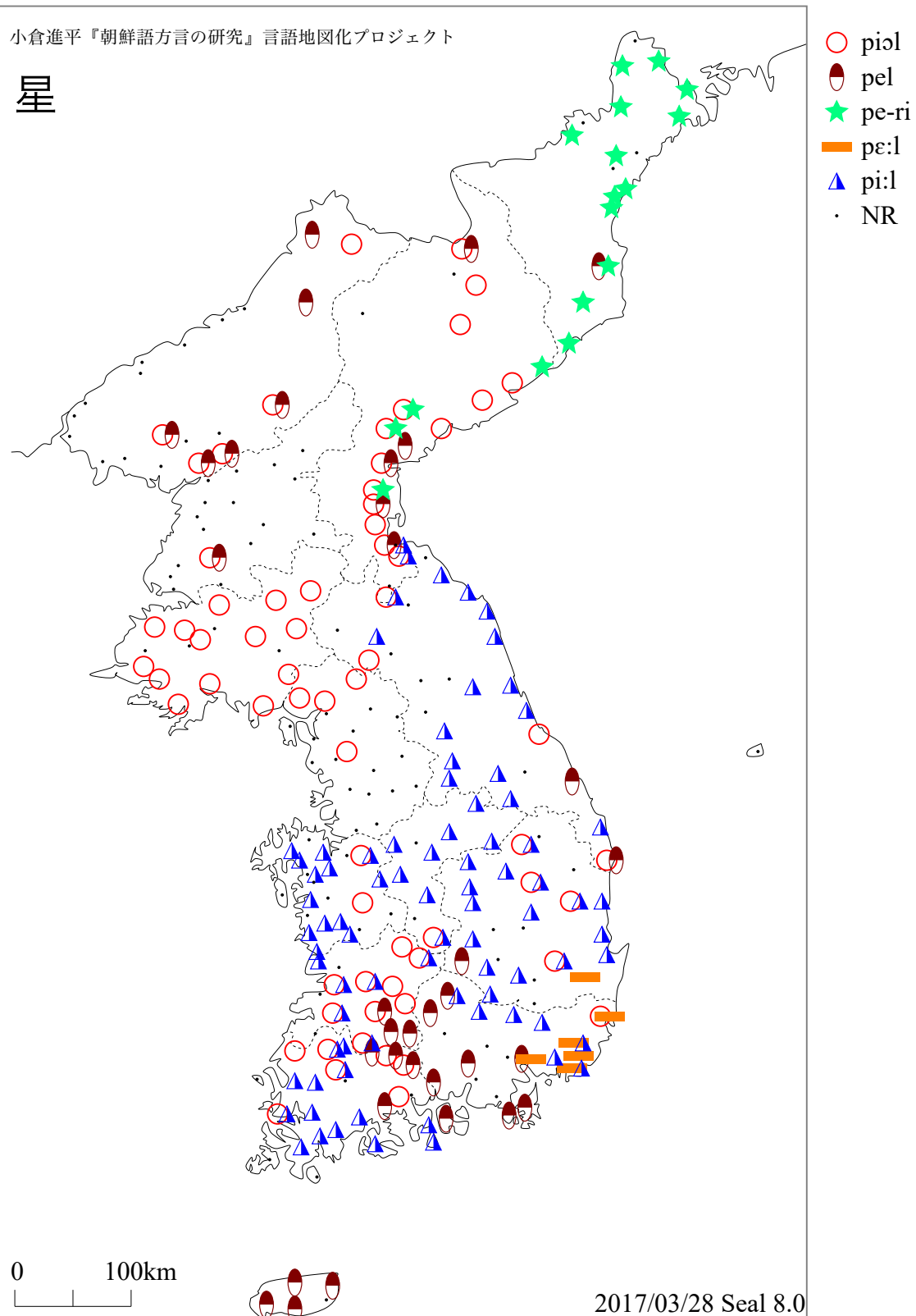
参考文献

韓国精神文化研究院 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南: 韓国精神文化研究院.

³ このように2音節語が1音節になり、上声となった語としては他に누:리>:뒤, 倭理 *여리>:예などがある。

⁴ 例えば「杏子の実」の項目で、咸鏡道で sal-gu に接尾辞-i が付いたと考えられる sal-gui が見られる。

星



雹(ひょう)

福井 玲

1 はじめに

韓国の標準語は u-bak (우박) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「天文」に「雹(へう)」という項目名で9種記録されている(上: 13-14)。

これらの語形は、まず ‘pak’ が含まれるものと、それが含まれず, Curi (C は子音 m, n, j) という形をなすものとその変種の2つのグループに大きく分けることができる。

(1) pak が含まれるもの

(1a) u-bak

(1b) pak-se / pak-tʃe

(2) Curi (C=m, n, j) およびそれに類似した語形

(2a) mu-ri / mu-re / mu-rø

(2b) nu-ri / nu-re / ni-ri

(2c) ju-ri

(1) の ‘pak’ が含まれるものは、その前に u がついたものと、そのあとに ‘se’ または ‘tʃe’ がついたものの2つに分かれる。(2) の Curi の形式のものは、語頭が鼻音 m, n または j になっている。これはおそらく鼻音が本来の形で、j で始まるものは語頭が脱鼻音化したものと考えられる。

2 その他の語形

これ以外の語形として『韓国言語地図』(2008) には오박, 우반, 우각, 누래, 우리, 누박, 박, 박자(좌) が見られる。오박, 우반, 우각は (1a) の変種, 누래は (2b) の変種, 누박は (1a) と (2b) の混交形, 우리は慶尚北道義城の1箇所のみ見られるもので、(1a) と (2) の混交形あるいは (2c) の変種と考えられる。박は小倉のデータには見られない語形で、江原道黄城郡の一箇所のみ現れる。また、小倉進平の調査で空白となっている平安道に関しては、『平北方言辞典』(金履浹編著, 1981) によると무루, 무리, 누리などの語形が見られる。

3 地理的分布

(1a) の u-bak は京畿道, 忠清道, 全羅道, 慶尚南道, 済州島にかけて幅広く分布するほか、咸鏡北道にも数地点見られる。(1b) の pak-se / pak-tʃe は咸鏡北道だけに見られる。

(2a) mu-ri / mu-re / mu-rø は、黄海道, 咸鏡南道, 咸鏡北道に分布するほか、2で見たよう

に小倉進平以外のデータによれば平安道にも分布する。(2b) の nu-ri, nu-re, ni-ri は咸鏡南道, 江原道のほか, 散発的に慶尚道, 全羅道にも見られる。(2c) の ju-ri は慶尚北道, 江原道, 忠清北道を中心に分布し, 慶尚南道にも若干見られる。これらは (2b) の n- で始まる語形に取り囲まれて分布する。また, (2) の Curi 系の語形をまとめて捉えると, 京畿道, 忠清道, 全羅道における (1) の語形を, 北および東側から取り囲むように分布しているとみることができる。咸鏡北道に2地点見られる u-bak は京畿道などから飛び火的に流入したものと考えられる。

混交形であることが確実と思われる누박は慶尚南道密陽に見られるが, これは (2) が有力な慶尚北道と (1) が有力な慶尚南道の境界において新たに発生した語形と考えられる。

4 文献上の記録

最も古い語形は 무뤼 で、『訓民正音解例本』(1446), 『釈譜詳節』(1447), 『月印千江之曲』(1447), 『月印釈譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1461,1462), 『法華經諺解』(1463), 『訓蒙字会』(1527), 『新增類合』(1576)など数多くの文献に見られ, 中世語および近代語の代表的な語形である。この他, その変種である 무뤼가 『靈藏寺版類合』(1700), 『倭語類解』(1781), 무리가 『物名考』(18--)に見られる。いくつか代表的な用例をあげると次の通り。

무뤼為雹 <1446 訓民正音解例本 56>

구루메 울에 번개 하고 무뤼 오고 한 비 붓다가도 <1447 釈譜詳節 21:5a>

nu-ri 系は、『韓国言語地図』の解説によると, 누뤼という形が『三綱行実図』(孝子 25)に見られるというが, 筆者は未確認である。同書の中でも最も古い版(ロンドン大学本)は中世語と同じ무뤼になっており, ロンドン大学本以外の古い本を校合した志部昭平(1990: 92)でも孝子図 25 において무뤼となっている。なお, 現代の玉篇の釈では, 「雹누리박」となっている。これもなんらかの歴史を反映しているものであろう。

ju-ri は, 文献上では見られない。

一方, u-bak は 19 世紀以降にのみ見られる。『広財物譜』(18--), 『医宗損益』(1868), 『韓仏字典』(1880), 『士民必知』(1889), 『国漢会語』(1895), 『独立新聞』(1896), 『韓英字典』(1897)など, 開化期の多くの文献に見られる。

5 考察

(1) に含まれる pak の部分は「雹」(Ch. báo, 広韻 蒲角切, MSK. pak(H))の字音に該当すると考えられる¹。u-bak は「雨雹」にあたるものと思われる。「雨」は朝鮮漢字音では上声にあたり, 小倉進平はそうには記録していないが, 実際に現代語でも長母音で現れる

¹ ついでに, 日本語の「雹(ひょう)」の語源は「氷」の音をあてたものとも, 「氷雨」の転ともいう(大辞林)のようにはっきりしていない。

地域が多い。中国語では「雨雹」は一語というよりは「雹をふらせる」という表現にあたる。なお、(1b) の pak-se / pak-tʃe に含まれる -se / -tʃe の由来は不明であるが、『韓国言語地図』の解説では, 막짜(𐏓𐏃)は「雹子」であろうとしている。小倉進平の pak- tʃe もこれと同じものと思われるが, -se については由来が不明である。

語形の新古関係では、文献上で早畚が最も古いことから、(2) の Curi 系がより古く、その中でも (2a) の mu-ri 系がより古いと考えられる。(1) の pak 系は 19 世紀以降に新しく登場したものと考えられる。

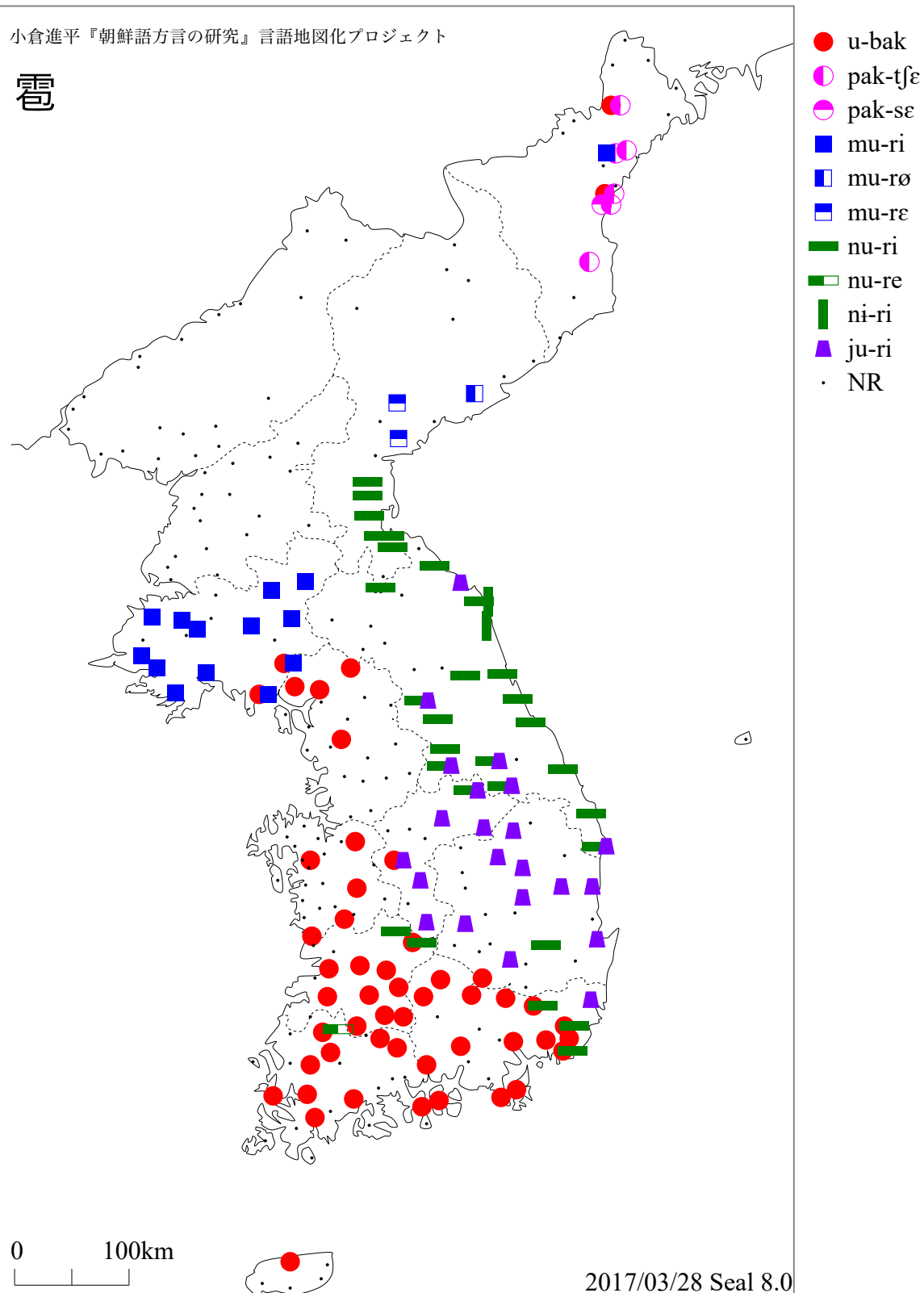
Curi 系 ($C=m, n, j$) 全体を考慮に入れると，次のような変化が想定できる。

そして、これら Curi 系が京畿道以南の u-bak を、周囲論的分布とはいえないまでも、北と東から取り囲んでいるので、これらがより古い語形で、u-bak が新しい語形であるという解釈は可能であり、文献上の出現年代とも一致する。

また、pak 系の中では、(1b) の pak-se / pak-tʃe は、小倉のデータでは咸鏡北道のみに存在するが、『韓国言語地図』では京畿道と江原道の一部にも存在する。両者の関係は不明ながらも pak 系の成立過程となんらかの関わりがあるのかもしれない。

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』 城南：韓國精神文化研究院.

電



秋

張 河 林

1 はじめに

四季の一つである秋は、現代韓国語で「가을(ka-il)」が標準語として使われており、小倉進平の『朝鮮語方言の研究』には「時候」の中で「秋」という項目名で6種の語形が記録されている(上: 18-19)。

この6つの語形を、第1音節を基準に分けると(1)のように‘ʌ’(中世語の母音‘ㆍ’に対応する母音)を含むもの、(2)のように‘ʌ’を含まないものに分けることができ、また、これらはそれぞれ第2音節の頭に‘s’を含むかどうかを基準にさらに(1a)と(1b)、(2a)と(2b)に分けることができる。

(1) ʌ を含むもの

(1a) kʌ-ul

(1b) kʌ-sil

(2) ʌ を含まないもの

(2a) ka-il / ka:l

(2b) ka-sil / ka-sil

なお、小倉進平のこの項目の資料の中には、ka:l という語形を用いる地域のうちで、江原道の鐵原について「此の地方「秋が」を [kal-gi] といふ」という注釈が、また、ka-sil という語形を用いる地域のうちで、江原道の平海について「此の地方「秋が」を [ka-sil-gi] といふ」という注釈が付けられている。

2 その他の語形

上記の語形以外に『標準国語大辞典』には「갈」と「가을」がみられる。江原道・忠清道・平安道の方言として「갈」が、江原道の方言として「가을」が現れるが、こちらは単独形では現れにくく、助詞を付けることによって現れるため、新しい語形としては扱うことは難しいだろう。上で紹介した小倉進平による注釈もこうした語形を指しているものと考えられる。しかし、「갈」「가을」の語末子音「ㄹ」は中世語にみられる「𐏲」と関連づけることができるので有意義な語形である。

3 地理的分布

ka-il の語彙項目で最も特徴的な(1)‘ʌ’を含む語形は済州地域にのみ分布する。

(2) ‘ㄹ’を含まない語形は、(2a)の ka-il が最も幅広く、全国的に分布する。ka:l は慶尚北道、忠清道、江原道、平安道を中心に分布する。ka:l は ka-il の 2 つの母音が融合してできた縮約形であるため、多くの地域で ka-il と併用されることが分かる。(2b)の ka-sil は全羅道、慶尚道、江原道を、ka-sil は全羅道、江原道、咸鏡道、平安北道を中心に分布する。

4 文献上の記録

ka-il の最も古い形は「마슬」¹と考えられる。休止の前では「ㅎ」が脱落し、「마슬」で現われる。ここでは『月印釈譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1461), 『杜詩諺解』(1481)の例を挙げる。

마슬히 霜露ㅣ 와 草木이 이울어든 슬픈 막스미 나느니 <1459 月印釈譜 序:16>
히 츀거늘 鳬鳥 신고 도라가느니 마슬히 오매 그러기 書信을 잡도다 <1481 杜詩諺解 20:31>
히마 法華논 마슬 거두우미오 涅槃은 주수미라 <1461, 1462 楞嚴經諺解 1:19>

中世語の母音 ‘ㄷ’ [ɗ] は濟州地域に痕跡が残っており¹, 他の地域では「ㅌ」若しくは「ㄷ」または「ㅌ」で現れるが、今回の ka-il の項目においては kɗ-il といった語形が見られない。

一方, 「가을」は半齒音 Δ[z] の痕跡を確認できる語である。中世韓国語の半齒音は標準語では完全に脱落し痕跡を残さなかったが, 方言によってはこれらが「ㄴ」で現れることもある。即ち, 半齒音がゼロになるのではなく, 古形を維持しているのである²。

なお, 「가을」の語源については漢字語から来たとみている説と「秋納め」の意味から来たという説があるが定かではない。

5 考察

文献上の記録を参考し, 「秋」の項目の ka-il の語形の変化について考察すると次のような変化が考えられる。

まず, 第 1 音節で中世語の母音 ‘ㄷ’ [ɗ] を保ち, また半齒音 Δ[z] の反映として s を持つ語形 kɗ-sil を仮定し, そこから一部の地域では半齒音が消失し, また, 濟州島以外では ‘ㄷ’ [ɗ] 消失して「ㅌ」[a] に変化したと考えることができる。この両方の変化が起きた形が現代の標準語の ka-il である。この ka-il がさらに縮約され一部の地域で ka:l として現れる。ま

¹ 他に ‘ㄷ’ の痕跡を持つ単語として「달」(月)「다리」(橋)「마을」(町)「흙」(土)などが挙げられる。

² 他にも半齒音の痕跡を確認できる言葉として「가위」(가새/가시개) (鋏), 「마을」(마실/마슬/모실) (村), 「여우」(예시/야시/여수) (狐)などが挙げられる。このように「ㄴ」を維持する地域は慶尚道, 全羅道, 忠清道の南部地域をはじめ, 北の咸鏡道などがある。이익섭他(1997: 324)参照。

た、このうちの1つだけの変化が起きることによって、その他の変種が生じることになる。

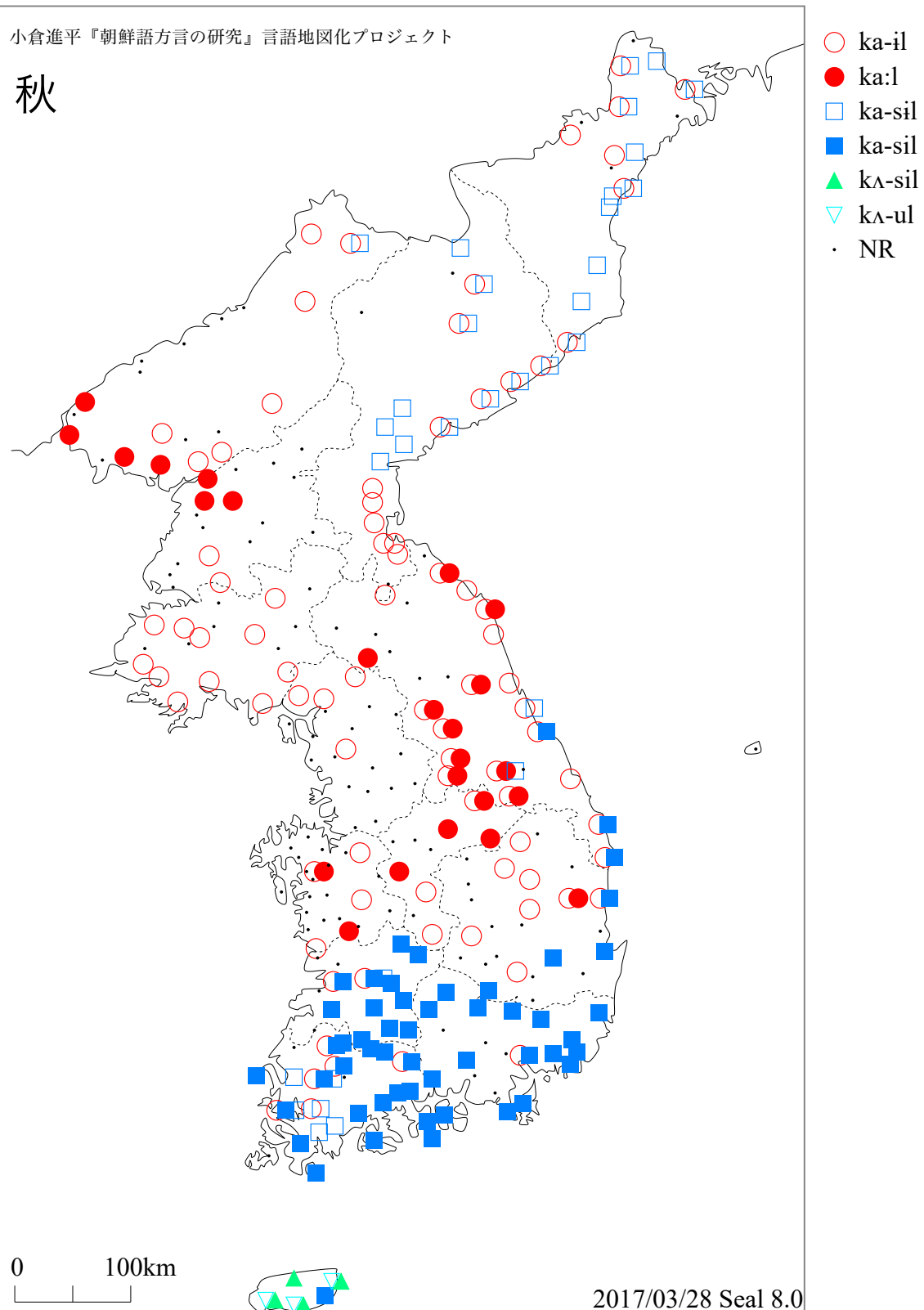
kʌ-zʌlh > (kʌ-sil) > kʌ-ul (濟州島)
> kʌ-sil (濟州島)
> ka-sil (陸地方言)
> kʌ-il > ka-il > ka:l (陸地方言)

「ka-il」はバリエーションが少ない語彙項目ではあるが、現在は消失した半歯音の痕跡が確認できる語彙項目の一つであり、また中世語の母音 ‘ㆍ’ の反映がみられる語彙項目として意義がある。

参考文献

国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.
李翊燮外(1997)『한국의 언어』城南：新丘文化社.

秋



冬

李 美 姫

1 はじめに

『朝鮮語方言の研究』の「冬」という項目名で記録されているのは以下の 19 種である (上: 19–20)。現在の標準語は *kjo-ul* (겨울) であるが、大きく語形を分けると現在の標準語に近い *kjo-ul* 系と、この *kjo-ul* の語頭子音が口蓋音化したと思われる *tʃo-ul* 系、そしてこれらとは語形が大きく異なる *toŋ-sam* 系と *si-an* 系の四つに分けることができる。

(1) *kjo-ul* 系

kjo-il / *kjo-ul* / *kjo:l*

(2) *tʃo-ul* 系

(2a) *tʃo-ul* 系

tʃo-ul / *tʃo-il* / *tʃol* / *tʃi:l* / *tʃu:k*

(2b) *tʃol-gi* 系

tʃol-gi / *tʃu:l-gi*

(2c) *tʃo-sul* 系

tʃo-sul / *tʃo-sil-gi* / *tʃo-sik* / *tʃo-sil* / *tʃo-sil-ge* / *tʃo-sil-gi*

(3) *toŋ-sam* 系

toŋ-sam / *sam-don*

(4) *si-an* 系

si-an

(2) の *tʃo-ul* 系はさらに三つに分けられ、(1) *kjo-ul* から口蓋音化が起こった (2a) *tʃo-ul* 系、そして口蓋音化したものに *-gi* が付いた (2b) *tʃol-gi* 系、*-s-* が入る (2c) *tʃo-sul* 系になる。(2a) の *tʃo-ul* の場合、『朝鮮語方言の研究』で慶尚北道の地点を記した後、括弧内に「此等の多くの地方で「冬が」を〔*tʃo-ul-gi*〕の如くいふ」と記されている。(2c) の *tʃo-sil* も慶尚北道の慶州の後、括弧内に「「冬が¹」を〔*tʃo-sil-gi*〕といふ」と記されている。つまり単独形では *-gi* が現れず、格助詞をつけて発話する場合は *-gi* が現れることになる。(3) *toŋ-sam* 系は *toŋ-sam* とこの 2 音節の順番が逆になったような *sam-don* の二つがあり、(4) *si-an* 系は *si-an* 一つである。

¹ 『朝鮮語方言の研究』では、「秋が」になっているが、これは「冬が」の単なる誤りであると考えられる。

2 その他の語形

小倉進平の『朝鮮語方言の研究』では平安道のデータがなかったが、『平北方言辞典』の「겨울」の項目を見ると 겨울, 겨을, 동삼の三つの語形がある。同じく『朝鮮語方言の研究』ではなかった咸鏡北道に関しては『咸北方言辞典』を見ると, 겨울, 겨을, 겨을, 겨을, 겔, 동삼, 저을, 저을が見られた。

3 地理的分布

各方言系別の地理的分布は比較的是っきり分かれている。(1) kjo-ul 系は比較的全国的に幅広く分布する。具体的に見てみると現在の標準語である kjo-ul は黄海道の多くの地点と京畿道, 江原道, 慶尚北道, 全羅南道の一部で現れる。kjo-il は忠清道を中心に多く見られ, 江原道や全羅道にも数か所現れる。kjo:l は慶尚道に数か所現れる。

(2a) tjo-ul 系と (2b) tjo:gi 系は慶尚北道と江原道に集中的に現れるほか, 咸鏡南道, 慶尚南道にも数か所現れ, 韓国の中央部に集中して見られる。一方, (2c) tjo-sul 系は済州島と全羅南道, 慶尚南道, そしてその周辺地域など, 韓国の南部地域に集中的に分布している。(3) ton-sam 系は ton-sam は咸鏡南道に多く見られ, sam-don は慶尚南道に数か所現れる。語形は類似しているが, 地理的に離れたところで現れるのが特徴的である。(4) si-an 系は全羅北道にだけ集中して現れる。

4 文献上の記録

「冬」に当たる最も古い語形は『月印釈譜』に現れる「겨을」である。その他には「겨을」がある。

모미 겨스렌 덩고 <1459 月印釈譜 1:26b>

非常을 알며 마을 듀물 보아 眞道애 드느니 겨을헤 업고 보미 퍼 듀물 보며 너르메
盛코 <1464 禪宗永嘉集 44b>

ton-sam 系の ton-sam は過去の文献では見当たらず, sam-don だけが現れたが, 20 世紀に入ってからのものでしか見られなかった。si-an は文献上では現れなかった。

겹겹이 장을 치고 갓옷을 두루고 삼동을 지넘며 <1904 大韓毎日申報>

5 考察

文献上で現れる最も古い語形は「겨을」であるが, 方言形で現れる語中の -s- はこの古形の「ㅅ」の残存だと考えられる。そして方言形で現れる語尾の -gi は, 文献上で「겨을」という語形が現れるのと考え合わせると, 「冬」のさらに古い語形は語末に軟口蓋破裂音 [k]

を持っており、それが方言形では -gi として現れ、文献上ではそれが弱化した摩擦音 [x] が「ㅎ」として現れていると推定できる。

そして母音の変化を見てみると、文献上で現れる語形「겨슬」と「겨슬」は両方とも第二音節の母音が非円唇の -i- である。小倉進平のデータでも kjo-ul 系と tjo-ul 系のほとんどの語形の第二音節母音が非円唇であり、円唇音化した -u- を持つものは kjo-ul と tjo-ul の二つであるが、比較的中央部に広く分布している特徴がある。

語頭子音が口蓋音化した tjo-ul 系が慶尚道と全羅道に集中して現れ、その語形のバリエーションが豊富であるのは李基文 (1991:64) で「口蓋音化が東南及び西南方言²で最初に起き、それが段々北上した」という指摘を裏付けると考えられる。そして冬の古い形が語尾に軟口蓋破裂音を持っていたとすれば、慶尚南道と全羅南道に -gi を含む語形が多く現れるので、周辺地域により古い形が残っていることになるだろう。

(3) toŋ-sam 系は漢字語の「冬三」、「三冬」であると思われる。『標準国語大辞典』には以下のような記述があった。

동삼 01 (冬三) 「명사」 = 삼동 02 (三冬)

삼동 02 (三冬) 「명사」 「1」 겨울의 석 달. ≒ 동삼 01 (冬三). 「2」 세 해의 겨울.

toŋ-sam 系は文献上の記録が 20 世紀に入ってから見られるので kjo-ul 系や tjo-ul 系より新しい語形であると思われる。そして toŋ-sam は咸鏡南道に、sam-doŋ は慶尚南道にと、離れた地域で現れるのはそれぞれが語形は類似しているが、別のルートで入ってきたからだと思われる。

(4) si-an 系は kjo-ul 系や tjo-ul 系、toŋ-sam 系と語形が大きく異なることと文献上の記録がないことから、これらとは別の、より新しい語形であると思われるが、その語源が明らかではなく、全羅北道の一部に集中的に現れるのも不思議である。

参考文献

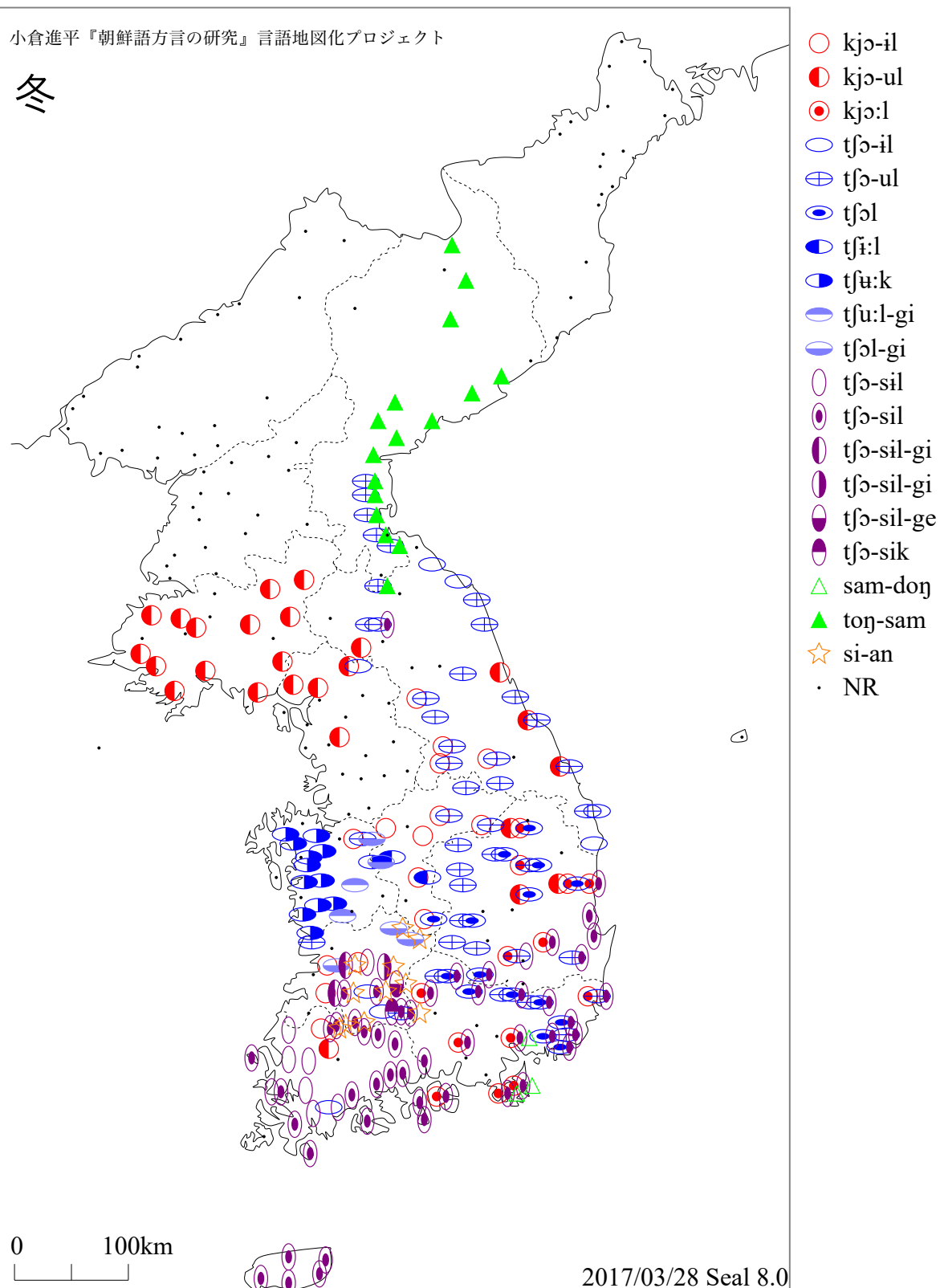
金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.

李基文 (1991) 『国語音韻史研究』ソウル：塔出版社.

² ここの東南方言は慶尚道方言のことで、西南方言は全羅道方言のことである。

冬



海

金玉雪

1 はじめに

韓国の標準語は pa-da (바다) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「海」という項目名で5種記録されている(上: 42-43)。これらの語形は大きく ‘pa-da’ 系と ‘ke’ 系の2つのグループに分けることができる。

(1) ‘pa-da’系

pa-da / pa-de / pa-dak / pa-dan

(2) ‘ke’系

keŋ-mun

2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、崔鶴根(1990), 『Naver 国語辞典(方言)』や『標準国語大辞典』には、これ以外に次のような語形が見られる。

崔鶴根(1990)には、小倉のデータ以外にも次のような23種の語形が見られる。具体的に、‘pa-ra’系には바래, 바르, 바림が, ‘ke’系には개:, 개굴빠닥¹, 개굴빠당, 개당, 개뿌닥, 갠테, 갯가, 갯그새, 갯바당, 갯문, 갯물, 갯본, 갯분, 갯빈, 갯², 갯물³, 게울 [keŋul] が, ‘kaŋ-’系には강, 강물, 큰강が, ほかに해빈が見られる。

また, 『Naver 国語辞典(方言)』と『標準国語大辞典』には済州島方言として바를, 바릇があり, 全羅南道方言として갯물, 갯부닥, 갯があり, 都合5種の語形が見られる。

3 地理的分布

(1)の pa-da は済州島を除き、全国的に幅広く分布している。pa-de は主に全羅道に分布するほか、慶尚南道に2地点、忠清南道に1地点見られる。pa-dak は、全羅南道に数地点、慶尚南道に2地点見られる。pa-dan は主に咸鏡北道と済州島両端に分布するほか、咸鏡南道の沿岸北部に1地点、全羅南道の沿岸南部に1地点と慶尚南道の沿岸南部に2地点のように両端に分布している。

(2)の keŋ-mun は慶尚南道に1地点(統営⁴)だけ見られる。

これらの語形の分布は崔鶴根(1990)の調査とほぼ一致している。(1) ‘pa-da’系の場合、

1 黄海道(兎山)の方言であるが、小倉進平の言語地図にはこの地名が見当たらない。

2 慶尚南道(昌原)の方言であるが、小倉進平の言語地図にはこの地名が見当たらない。

3 慶尚南道(昌原)の方言であるが、小倉進平の言語地図にはこの地名が見当たらない。

4 崔鶴根(1990)の調査では「忠武」として記録され、小倉の地図では見当たらないが、統営と大体同じ地域であるため、ほぼ一致すると考えられる。

pa-da は済州島も含んでもっと幅広く全国的に分布し、その他の語形⁵も多少補充されている。

- (1) 咸鏡南道—마림(1)
- (2) 黃海道—개: (6), 개굴빠닥(1), 개굴빠당(1), 개당(2); 갯바당(8); 강(1)
- (3) 全羅南道—개뿌닥(1); 갱물(3); 강(2), 강물(1)
- (4) 慶尙北道—마래(1); 큰강(1); 해빈(1)
- (5) 慶尙南道—갯태(1), 갯가(1), 갯그새(1); 갱본(3), 갱분(1), 갱빈(1);
 갱(1), 갱물(1), 께울 [ʔkɛŋul] (1)
- (6) 濟州島—마르(3)

pa-da は古い語形として바르, 바를, 바릭, 바다(ㅎ)などがある。これらのうちで、まず『龍飛御天歌』(1447), 『釈譜詳節』(1447)などで ‘바를’ が見られ、次いで『月印釈譜』(1459)に바를の他に、それらの属格形である바릿, 바룻, 바룻が次々に登場し, 바다(ㅎ)も現れ始める。若干の用例を下に示す。

15~17 世紀には마르⁹, 마를, 마린などが広く使われたが, 18 世紀以降にはもう見られなくなり, その代わりに마다(き)が圧倒的に現われる。いくつか代表的な用例をあげると次の通り。

しかし、小倉の keŋ-mun や崔鶴根 (1990) の ‘ke’ 系と ‘kaŋ-’ 系の語形は、文献上では見られない。

6 16 世紀には바라も見られた。例えば, 산과 바라 마튼 <1577 誠初心学人文 9>, 바랏되해(海嶠) <1723 百聊抄解 16>である。

5 考察

pa-da の語源について、金敏洙 (1997) では、「語源：√받[平]+ 올[接統詞]. 変化：*받올> 바다ㅎ(1459 月印積譜 1:23)/바를(1447 積譜詳節 19:13)>바다. *中世韓国語では‘바다ㅎ, 바를’があるが, ‘바를’が広く使われていた。‘바를’は‘바들’⁷から発展した。‘바다ㅎ, 바들’は‘받’を共有している」と解釈している。

姜吉云 (2010) では、pa-da の古い語形として바를, 바르, 바릭, 바다(ㅎ)などを挙げ, ‘바르’系と‘바다(ㅎ)’系は互いに異なる語源を持つとしている。即ち, ‘바다’の語源はトルコ語の*varta(바다), 或いは満州語の*bada-「넓다(広い)」であり, ‘바르/바를/바릭’系の語源もドラヴィダ語族のタミル語の*para-「넓다(広い)」であると推定している。要するに, ‘바다(海)’を表す語はすべて「넓다(広い)」という語源を持つとされている。

なお pa-da の語源は ‘바르/바를/바릭’系と ‘바다ㅎ’系の2種類であるとするならば, (1) の ‘pa-da’系は ‘바다ㅎ’系に由来し, 바닥, 바당には ‘ㅎ’の痕跡が残っていると考えられる。また, ‘바르/바를/바릭’系は古代韓国語の ‘바들’から発達し 17 世紀まで広く使われたが, 18 世紀には文献上で見られなくなった。小倉進平のデータでは ‘바르/바를/바릭’系が見られないが, 崔鶴根 (1990) のデータでは ‘바림’ (咸鏡南道 1 地点), ‘바레’ (慶尚北道 1 地点), ‘바르’ (済州島 3 地点)などからそれぞれの変化を確認できる。

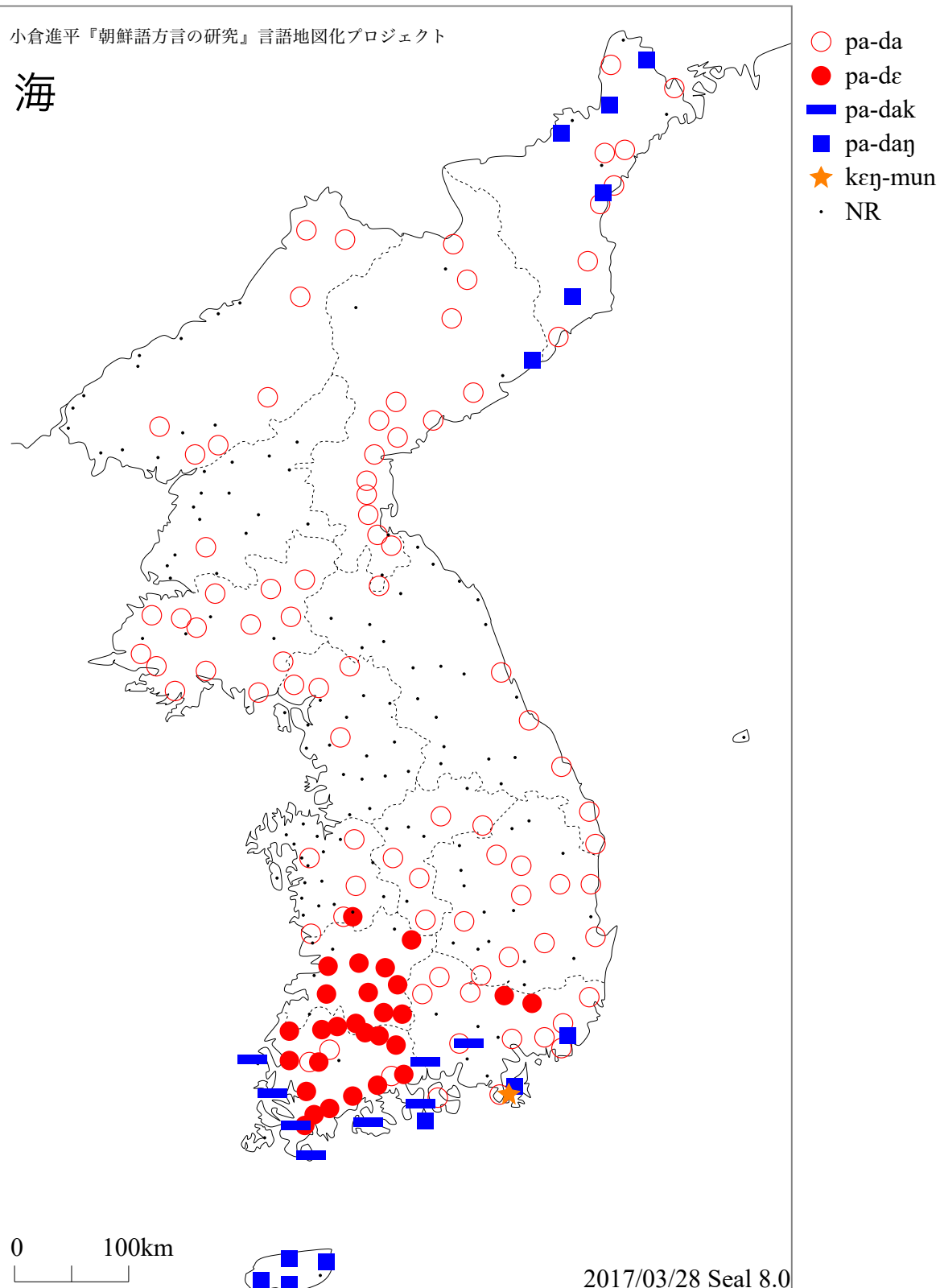
最後に, 小倉の(2)の keŋ-mun や崔鶴根 (1990) の ‘ke’系と ‘kaŋ-’系の語形は pa-da とは由来が異なり, 「浦(개)」と漢語の「江(강)」を基にしており, 場合によってはそれにさらに pa-da 系の語形が付加されて作られ, ある時期に pa-da の固有語と共存しながら特定の地域で残ってきたと考えられる。

参考文献

- 姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』 ソウル：韓国文化社。
金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社。
国立国語研究院(1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亜。
Naver 『国語辞典 (方言)』 <http://krdic.naver.com/>
李基文 (1998) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社。
劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部。
崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル：明文堂。

⁷ 新羅官名の「波珍浪 或云海干」(1573 三国史記 卷 38)を見ると, 「波珍浪」の「波珍」は, 「海干」の「海」と一致し, ‘바들(*pator)’と読まれていた。後, 古代韓国語で‘바들’のような語は母音間の*tを有していたが, 中世韓国語では r に変わって‘바를(parar)’(海)に表記されていた。即ち, ‘바들’>‘바를’ (海)のような変化を経たと考えられる(李基文 1998)。

海



瞼

林 茶 英

1 はじめに

韓国語の標準語は *nun-ʔkɔ-phul* (눈꺼풀) である。『朝鮮語方言の研究』(上: 86–87)にはこれにあたる語が 24 種記録されている。これらの語形は大きく目(*nun* 눈)にさまざまな語根がついた合成語のグループと、目(*nun* 눈)に接尾辞がついた派生語のグループに分かれるが、合成語はさらに「穀の外皮」(*ʔkɔp-ʃil* 껍질)が含まれるもの、「膨らんでいるところ」(*tu-dɔŋ* 두덩)が含まれるもの、「蓋(木製のふた)あるいは蓋(ふた)」(*ʔtu-ʔkɔŋ* 뚜껑)が含まれるものの 3 グループに分けることができる。

(1) *ʔkɔp-ʃil* 系が含まれるもの

(1a) *nun-ʔkɔp*

(1b) *nun kɔp-tak* / *nun ʔkɔp-tɔk*

(1c) *nun kɔp-ʃil* / *nun ʔkɔp-ʃul*

(1d) *nun kɔ-pʰul* / *nun ʔkɔ-pʰi-ri*

(2) *tu-dɔŋ* 系が含まれるもの

nun tu-dɔk / *nun tu-dɔn* / *nun tu-dɔŋ* / *nun-tɔk*

(3) *ʔtu-ʔkɔŋ* 系が含まれるもの

(3a) *nun tu-bɔ-ri* / *nun-tu-bɔ-i* / *nun-tu-bɔŋ* / *nun-tu-be* / *nun-tu-bu-ri*

(3b) *nun ʔtuk-ke*

(4) その他

(4a) *nun-ʔtak-ʃi*

(4b) *nun-ʔtiŋ-i* / *nun-diŋ* / *nun-tʰeŋ-i* / *nun-tʰe* / *nun-tʰeŋ-i* / *nun-tʰiŋ-i*

(1)の語形は *nun* (目)に*ʔkɔp-ʃil* の方言形である*ʔkɔp* 系(1a), *kɔp-tak* 系(1b), *kɔp-ʃil* 系(1c), *kɔ-phul* 系(1d)の語根がついた合成語である。(3a)は *nun* に「蓋(ふた)」の方言形がついた合成語であり,(3b)は *nun* に「蓋(木製ふた)」の方言形がついた合成語である。(4)は *nun* に*ʔtak-ʃi* などの接尾辞がついた派生語と思われる。

2 地理的分布

(1a), (1b), (1c)の *nun kɔp-ʃil* は全羅南北道に分布する。(1c)の *nun ʔkɔp-ʃul* は江原の麟蹄地域だけに見られ,(1d)の *nun ʔkɔ-pʰi-ri* は咸南の利元地域に見られる。(1d)の *nun kɔ-pʰul* は主に江原に分布するが、全南の 1 箇所や京畿の 1 箇所にも見られる。(2)の *nun tu-dɔk* は全南,

慶南, 江原, 黄海に1箇所ずつ見られ, *nun tu-dən* は黄海の谷山だけに見られる。*nun tu-dən* は24種の語形のうち, 最も幅広く分布する語形であり, 忠北, 京畿, 黄海, 平南, 平北にかけて分布する。*nun-tək* は咸南, 咸北に見られる。(3a)の *nun tu-bə-ri* は慶北や江原に, *nun-tu-bə-i* は慶北の榮州だけに見られ, *nun-tu-bən* は全南や咸南に分布する。*nun-tu-be* は咸北だけに, *nun-tu-bu-ri* は慶北だけに見られる。(3b)は済州に分布する。(4a)は咸南, (4b)の *nun-ʔiŋ-i* や *nun-diŋ* は慶北, *nun-tʰeŋ-i* は忠南の舒川地域, *nun-tʰe* や *nun-tʰeŋ-i* は江原に分布し, *nun-tʰiŋ-i* は慶尚道や忠清道の広い範囲にかけて分布する。

3 文献上の記録

臉に関する記録が『蒙山和尚法語略録諺解』(1467), 『四声通解』(1517), 『訓蒙字会』(1527), 『痘瘡集要』(1608), 『訳語類解』(1690), 『倭語類解』(1782), 『韓仏字典』(1880)に見られるが, 現在にまで残っている24種の語形のうち古い文献上で確認できるものは, 咸鏡北道に見られる(3a)の *nun-tu-be* に対応する語形が多い。用例を見ると次の通り。

눈두베 <1467 蒙山和尚法語略録諺解 2b>

눈두에 臉 <1517 四声通解 下 20b> <1527 訓蒙字会 13a>

눈두웨 <1608 痘瘡集要 下 34b>

눈두에 (nun-s-tu-ɔi) <1690 訳語類解 上 32b>

눈두에 臉 <1782 倭語類解 上 16b> <1880 韓仏字典 293>

4 考察

臉の語形は大きく合成語や派生語に分けることができる。(1), (2), (3)はそれぞれ目に外皮(*ʔkəp-ŋil* 꺾질), 膨らんでいるところ(*tu-dən* 두덩), 蓋(*ʔtu-ʔkən* 뚜껑)を意味する語根がついた合成語と考えられ, (4)は卑下の意を表す接尾辞がついた派生語と思われる。

(1)の第2語根には合計7種があり, これらの語形はさらに*ʔkəp-ŋil* 系(*kəp-tak/ʔkəp-tək/kəp-ŋil/ʔkəp-ŋil*)と*ʔkəp-pʰul* 系(*kəp-pʰul/ʔkəp-pʰi-ri*)に分けることができるが, *ʔkəp* の場合, *ʔkəp-ŋil* か *ʔkəp-pʰul* のうちどちらか一方の第2音節が脱落した語形と思われる。*ʔkəp-ŋil* 系の語形のうち, *kəp-ŋil* が最も古い語形と考えられ, *ʔkəp-ŋil* の *ŋil* は第1語根の母音(u)に影響された結果と思われる。*ʔkəp-pʰul* 系の語形を見ると, *kəp-pʰul* は*ʔkəp-pʰul* の古い語形である *kəp-pʰil* の第2音節の母音が前にある p に影響され円唇化したと考えられ, *ʔkəp-pʰi-ri* はまず第1音節が濃音化し, また語の末尾に接尾辞 *-i* がついた結果と考えられる。

(2)の第2語根には *tu-dək/tu-dən/tu-dən/tək* の4種があるが, *tu-dən* が最も古い語形と考えられる。*tu-dək* に関して『標準国語大辞典』は *tun-dək* (丘)の方言と述べているが, *tu-dən* と *tun-dək* の関連性についてははっきりと説明できない。*tək* は *tu-dək* の第1音節が脱落した結果だろう。

(3)の第2語根のすべてが「蓋」と関係がある語である。『朝鮮語方言の研究』(上: 232)に

は見出し語として2種類、すなわち、「蓋(木製ふた)」(?tu-ʔkɔŋ 系)と「蓋(ふた)」(tu-be 系)が挙げられているが、(3b)のʔtuk-ke は木製のふたの済州方言に当たり、(3a)の第2語根が普通の「蓋」に関連しているように思われる。今の標準語においては tu-be 系の語が完全になくなり、ʔtu-ʔkɔŋ 系の語だけが用いられているが、李基文(1991: 34-35)を参考にすると、tu-be 系の語がより古い語形と考えられる。

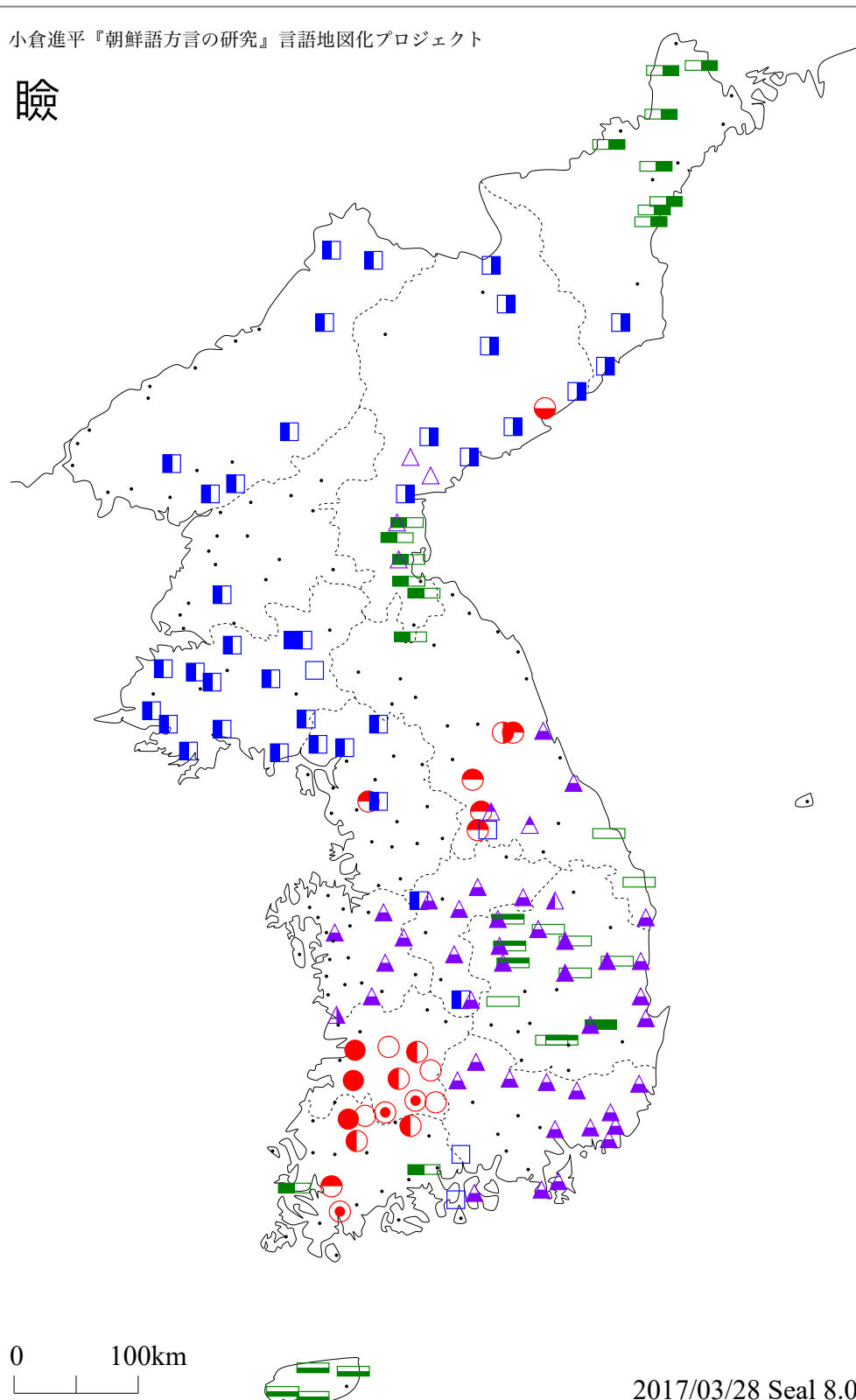
(4)は nun に卑下の意を表すʔtak-ŋi や tʰuŋ-i などの接尾辞がついた語形と思われる。

文献上の記録に基づけば、(3a)の語形が最も古い時期のものであったと考えられる。しかし、(2)の nun-tu-dɔn にも古い語形が含まれており、さらに(2)や(4b)の語形が幅広い地域にかけて分布しているため、24種の語形の新古関係に関して地理的分布から断言するのはむずかしい。

参考文献

李基文 (1991) 『国語語彙史研究』ソウル：東亜出版社。

嶺



- nun-ʔkəp
- nun kəp-tak
- ◉ nun ʔkəp-tək
- ◐ nun kəp-tʃil
- ◑ nun ʔkəp-tʃul
- ◒ nun kəp-pʰul
- ◓ nun ʔkəp-pʰi-ri
- nun tu-dək
- nun tu-dən
- ▣ nun tu-dəŋ
- ▤ nun-tək
- ▥ nun tu-bə-ri
- ▧ nun-tu-bə-i
- ▨ nun-tu-bəŋ
- ▩ nun-tu-be
- nun-tu-bu-ri
- ▬ nun ʔtuk-ke
- △ nun-ʔtak-tʃi
- ▲ nun-ʔtiŋ-i
- ▴ nun-diŋ
- ▵ nun-tʰeŋ-i
- ▾ nun-tʰe
- ▿ nun-tʰeŋ-i
- nun-tʰiŋ-i
- NR

頬

福井 玲

1 はじめに

韓国の標準語は ʔpjam (뺨) であるが、『朝鮮語方言の研究』(上: 88–89) にはこの語形は見られない。その代わりに最も多く見られるのは語頭が濃音ではなくて平音をもつ pjam (뺨) である。この pjam 系に類似したものとして、ʔpam 系があり、また語形がそれらと異なるものとして pol 系, kwi-mit-tʰɛ-gi 系があって、都合 23 個の語形が見られる。

(1) pjam 系

(1a) ʔpam / ʔpɛm / ʔpɛm-ʔtɛ-gi / ʔpɛn-dɛ-gi / ʔpam-ma-dɛ-gi / ʔpam-mal-ʔtɛ-gi / ʔpam-ʔtʃak

(1b) pjam / ʔpi-jam

(2) pol 系

pol-ta-gu (sic) / pol-ʔtɛ-gi / ʔpol-ʔtɛ-gi / pol-to-ga-dʒi (sic) / pol-tu-ga-dʒi (sic) / pol-tʰɛ-ga-dʒi /
pol-tʰɛ-gi / ʔpol-tʰɛ-gi / pol-tʰɛŋ-i / pol-tʰo-ga-dʒi / pol-tʰoŋ / pol-tʰu-ga-dʒi

(3) kwi-mit-tʰɛ-gi 系

kui-mit-tʰɛ-gi (sic) / kui-met-tʰɛ-gi (sic)

ここで pol-ta-gu, pol-to-ga-dʒi などの語形の表記は声門閉鎖音の記号が脱落した pol-ʔta-gu, pol-ʔto-ga-dʒi などの誤記の可能性が大きい。また, kui-mit-tʰɛ-gi などの最初の音節は小倉進平の表記原則によれば kwi- と表記されるべきところである。

もう一つこの項目に関して問題となるのは、現代の標準語における ‘뺨’ と ‘볼’ が区別されずに調査されている点である。『標準国語大辞典』によれば前者は「顔の両側のこめかみから顎の上までの肉が多い部分」(얼굴의 양쪽 관자놀이에서 턱 위까지의 살이 많은 부분), 後者は「頬の真ん中/頬の中央部をなす肉」(뺨의 한복판/뺨의 가운데를 이루고 있는 살집) と定義されている。なお、『韓国方言調査質問紙』第2編 (1980) は、項目 207 は ‘뺨’, 項目 208 が ‘볼’ となっており、それぞれの質問内容は次のようになっている (日本語に翻訳)。

207 뺨 [指示] ここを何といいますか。(顔の両側のこめかみの下の部分で、肉が多いところ) (注意) ‘뺨파귀’ などは卑称なのかどうかに留意。

208 볼 [指示] ここの真ん中の部分を何といいますか。(‘볼’ は ‘뺨’ の真ん中の部分で、娘が嫁入りするときに紅を付けるところ) (注意) 方言によって ‘뺨’ と ‘볼’ の区別がないこともある。‘볼파귀니’ などは卑称なのかどうかを確認すること。

実際に、この調査票を用いて調査された『韓国方言調査資料集』では、地域によって、両者を区別しないという注記がなされていることもある。小倉の資料では、この両者が区別されないで扱われているので、各地域で区別されているのかそうでないのか判別することができない。

2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、『韓国方言調査資料集』には、これ以外に次のような語形が見られる。pjam 系では, 'pjam, 'pem, 'pjəm など, pol 系では, pol, pol, 'pol, pol-ʔtɛ-gu-ni などがあり、さらにこれらの分類に入らないものとして、慶尚北道には nat-ʔpen-de-gi, ki-ʔtɛ-gi (表記はいずれも小倉の方式に直して示す)などの語形がみられる。小倉のデータに多く見られた pjam がまったく見られないのが目を引く。

また、小倉のデータでは咸鏡北道が抜けているが、『咸北方言辞典』(1986)によればソウル方言のㅍにあたる語として 컷때기, 볼대기, 볼재기, 볼타구지, 볼토오.;, ㅍㅍ という語形があげられている。おおむね、小倉のデータの咸鏡南道北部の語形と類似している。

崔鶴根(1978)には, ㅍの他に現在の標準語である ㅍㅍ もある。

3 地理的分布

これらの語形の地理的な分布は次のようになっている。

(1a) 'pam 系—全羅道, 慶尚道, 忠清北道東部, 忠清南道南部, 咸鏡南道

(1b) pjam 系—黄海道, 京畿道, 江原道, 忠清北道, 忠清南道, 済州島

この中で, 'pi-jam は済州島のみ

(2b) pol 系—平安道, 咸鏡道, 慶尚道, その他, 併用形として全国に分布する。

(3) kwi-mit-tʰɛ-gi 系—咸鏡南道

(1a) の 'pam 系は全羅道, 慶尚道, 忠清道, 咸鏡南道に分布し, その間の黄海道, 京畿道, 江原道を中心として(1b)の pjam 系が見られる。ただし, 済州島の 'pi-jam はここだけに見られる得意な形で, 他の地域とは分断されている。次に (2b)の pol 系は単独の地域として平安道, 慶尚北道を中心に見られ, その他に咸鏡道, 京畿道, 江原道, 慶尚道などで併用形として用いられている。

なお, 小倉のデータに見えない 'pjam (ㅍㅍ)について, 崔鶴根(1978)では次のようになっている。pjam 系の分布は小倉の資料の分布に近い。

pjam (ㅍㅍ)—慶尚北道, 忠清北道, 忠清南道, 江原道, 京畿道, 黄海道

'pjam (ㅍ)—慶尚北道, 慶尚南道, 忠清南道, 全羅北道, 全羅南道, 江原道

4 文献上の記録

中世語資料では一般的に ㅽㅼㅍ で現れる。若干の用例を下に示す。

腮腫 ㅽㅼㅍ 브슨 병 <1489 救急簡易方 3:8b>

顙 ㅽㅼㅍ 식 頰 보조개 협 顙 ㅽㅼㅍ 관 <1527 訓蒙字会上 13a>¹

これが近代語になると、ㅽㅼㅍ のほかに ㅽㅼㅍ が現れ、こちらのほうが優勢になっていく。

네 더 ㅽㅼㅍ에 므슴 瘡고 <1677 朴通事諺解上 13b>

腮頰 ㅽㅼㅍ <1690 譯語類解上 33b>

5 考察

(1a)のʔpam 系は、全羅道、慶尚道など南部地域と、咸鏡南道に分布し、周圏論的分布をなすと見ることが可能である。その間に、(1b)の pjam 系が入っている。よって、(1a)の方が古いと考えられる。このことは文献資料とも一致する。

また、(1a)のʔpam 系と(2)の pol 系は語形のバリエーションが大きい。これに対して(1b)の pjam 系はバリエーションが少ない。このことは(1b)の pjam 系がより新しい語形であると考えられることも可能かもしれない。

(1b)の pjam 系の中で、pjam とʔpjam の2種類が存在することをどのように説明したらいいだろうか。語形自体を見ると、pjam の方が古く見える。しかし、近代語の文献資料ではㅽㅼㅍのみが現れ、pjam は見られない。濃音化とのかかわりで言うと、もともと、濃音をもっていたものが非濃音化することはありうるだろうか？もしそれが難しいとすると、pjam が古いことになるが、文献には見られない。また、pjam という語形は現在ほとんど用いられず、『韓国方言調査資料集』の京畿道編などを見てもまったく見られない。20 世紀後半になって急速に衰退したものと考えられる。

また、これは小倉の資料およびこの項目に関する調査方法の限界であるが、pjam 系と pol 系の指示対象が同じか違うかについては明らかにすることができない。

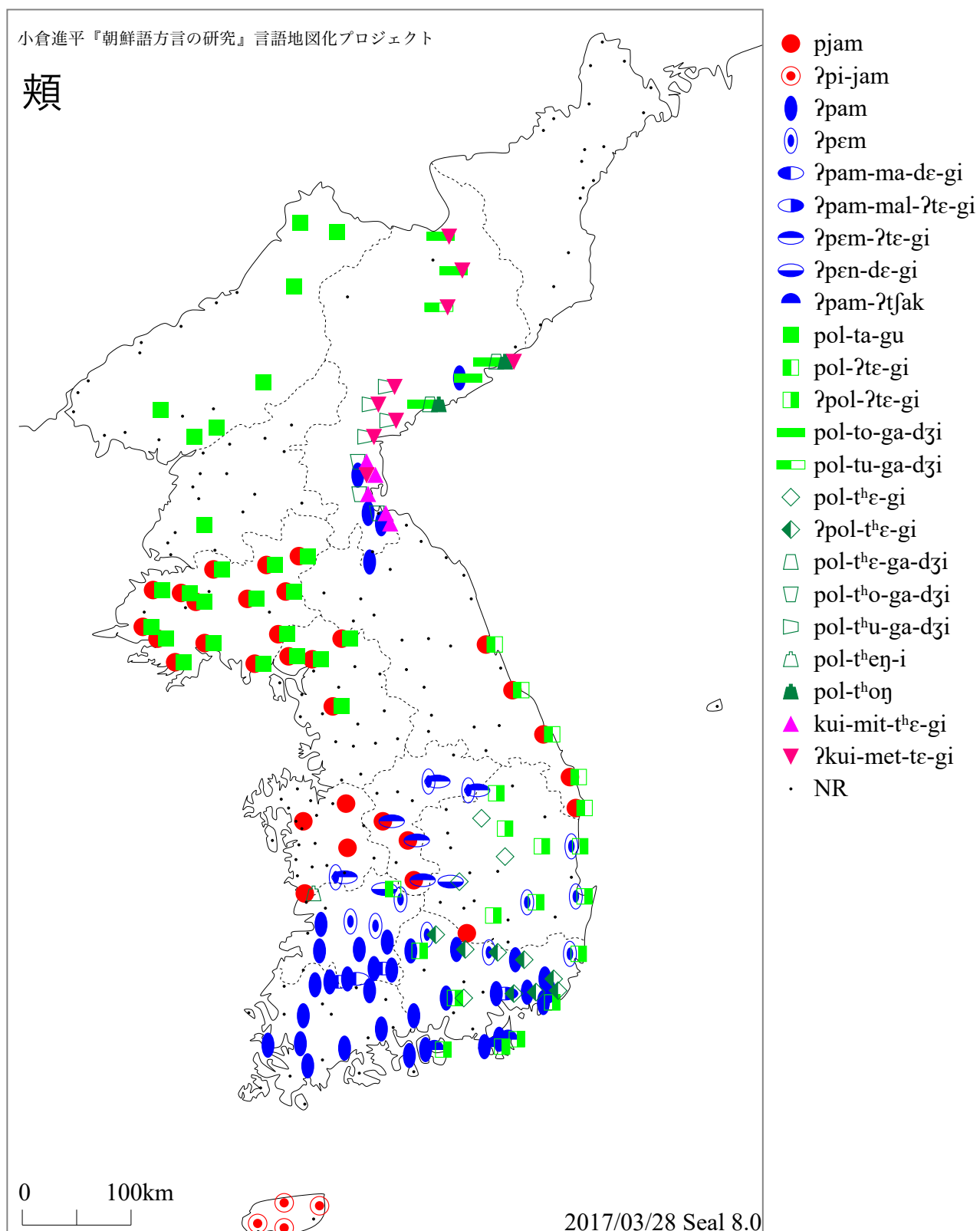
参考文献

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』京畿大学校出版局.

崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.

¹ 電子化された資料には、“顙 ㅽㅼㅍ 관”となっているものがあるが、原本影印で確認したところ“顙 ㅽㅼㅍ 관”であった。この他、救急簡易方諺解の例でも、原本が ㅽㅼㅍ であるのに電子化された資料で ㅽㅼㅍ となっている箇所があるので注意を要する。

類



臂

梁 紅 梅

1 はじめに

韓国語の標準語は pal(팔)であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「身体」に「臂」という項目名¹で 11 種記録されている(上：102-103)。

これらの語形は最初の母音が ‘a’ から始まるものと ‘o’ から始まるもの、‘ʌ’ から始まるものに大きく分けることができる。

(1) 母音が ‘a’ から始まるもの

(1a) p‘al

(1b) p‘a-ri

(1c) p‘al-kom-dʒi

(1d) p‘al-²tɛ-gi

(1e) p‘al-tuk

(2) 母音が ‘o’ から始まるもの

(2a) p‘ol

(2b) p‘o-ri

(2c) p‘ol-ge

(2d) p‘ol-²ku-ma-ri

(2e) p‘ol-tuk

(3) 母音が ‘ʌ’ から始まるもの

(3a) p‘ʌl

母音が ‘a’ から始まるものは後ろに付く接尾辞により 5 つのグループに分かれる。その中で現代の方言からみると、p‘al-kom-dʒi は肘の部分、p‘al-²tɛ-gi と p‘al-tuk は俗語のように考えられる。母音が ‘o’ から始まるものも後ろに付く接尾辞により 5 つのグループに分かれる。p‘ol-²ku-ma-ri は 팔꿈치(肘)を意味する²。p‘a-ri と p‘o-ri は主格助詞 -i が付いたものと考えられる。母音が ‘ʌ’ から始まるものは 1 例しかない。

¹ 小倉進平による項目名は「臂」であるが、これは「ひぢ（現代語ではひじ）」と訓読すべきか、あるいは「ひ」と音読すべきか判然としない。実際の語形を見ると、「腕」にあたる語が多いが、中には「肘」にあたる語も含まれている。

² p‘ol-²ku-ma-ri は全羅道方言では 팔꿈치の意味で肘を指している。

2 地理的分布

(1a) p'al は標準語であり、全国的に(済州島, 忠清北道を除く)幅広く分布する。(1b) p'a-ri は咸鏡北道だけに見られる。(1c) p'al-kom-dʒi は慶尚南道だけに見られる。(1d) p'al-ʔtɛ-gi は黄海道だけに見られる。(1e) p'al-tuk は全南, 全北に見られる。

(2a) p'ol は全羅南北道, 咸鏡南北道に分布する。(2b) p'o-ri は咸北に見られる。(2c) p'ol-ge は全南だけ見られる。(2d) p'ol-ʔku-ma-ri は全南, 慶南に見られる。(2e) p'ol-tuk は全南, 全北に見られる。分布からみると -a 系は -o 系に囲まれているが, これは歴史的に違う音変化が起こった結果であり、周囲論的分布とはいえない。

(3a) p'al は済州島に分布する。

3 文献上の記録

もっとも古い語形は 𐄀 であって、『訓民正音解例本』(1446), 『釈譜詳節』(1447), 『月印千江之曲』(1447), 『楞嚴經諺解』(1462), 『法華經諺解』(1463), 『牧牛子修心訣』(1466), 『杜詩諺解』(1481), 『救急簡易方諺解』(1489)などで確認できる。また 𐄀 の語形も『訓蒙字会』(1527), 『老乞大諺解』(1670), 『救急簡易方』(1489), 『新增類合』(1576)など数多くの文献に見られる。𐄀 は『青丘永言(六堂本)』で確認できる。いくつかの代表的な例をあげると次のとおりである。

𐄀 為臂 <1446 訓民正音解例本 用字例>

손과 𐄀 𐄀 𐄀 𐄀 𐄀 <1489 救急簡易方諺解 1:29a>

𐄀 𐄀 (肱) <1527 訓蒙字会>

また '𐄀' が含まれ「肘」あるいは「腕」を表わす複合語としては, 𐄀 구미(肘), 𐄀 구브렁(肘), 𐄀 구비(肘), 𐄀 독(膊)などの語形も確認できる。

4 考察

𐄀 の語形の変化から見ると次のようなことが考えられる。

15 世紀後半に 𐄀 > 𐄀 に有気音化が始まった。

地理的にみると, -a 系が -o 系に囲まれていて, また -a 系のバリエーションは非常に大きい, 𐄀 > a, 𐄀 > o は歴史的に違う変化を経たものであり, これは周囲論的分布ではないことがわかる。

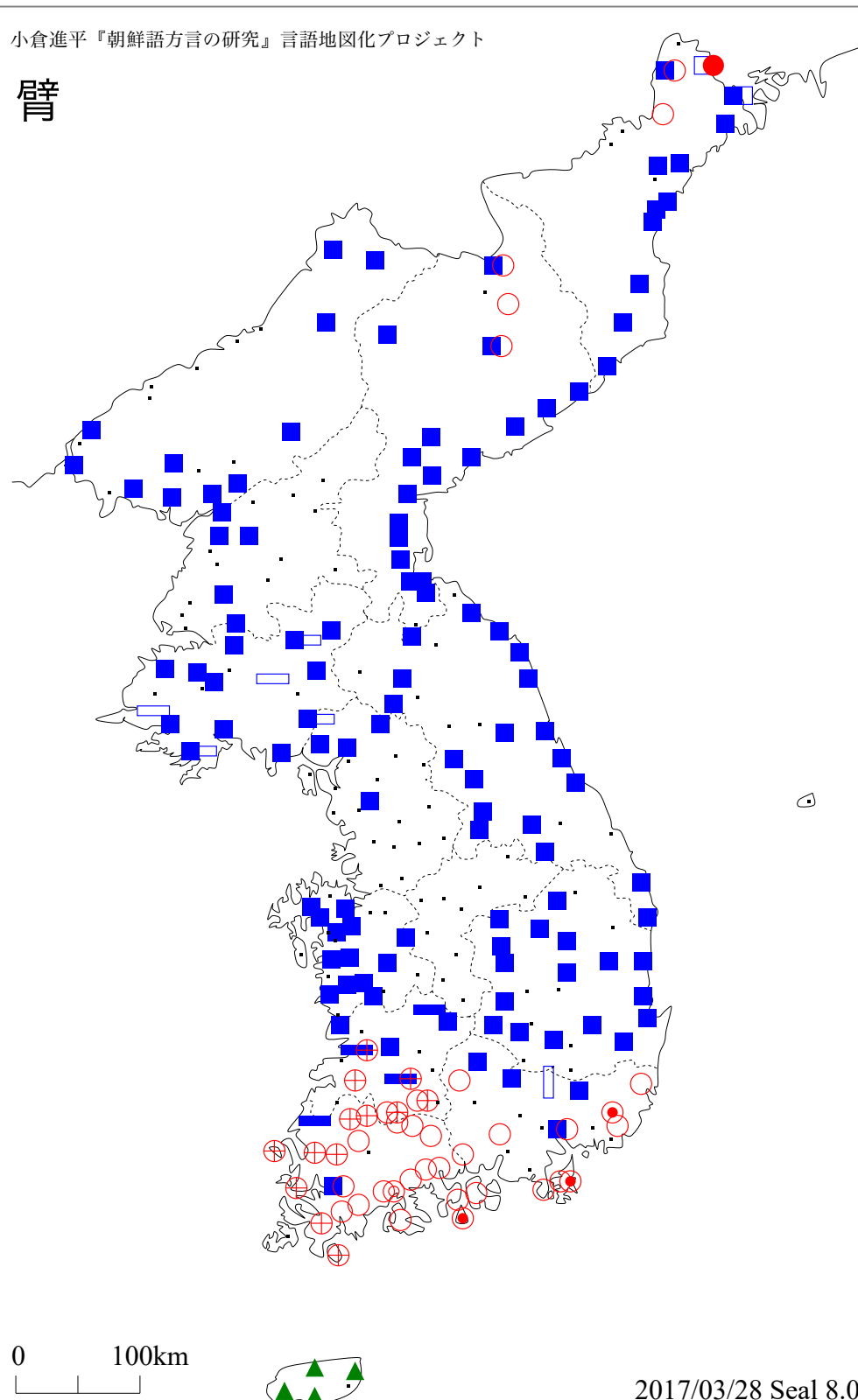
語頭の位置では 𐄀 > a の変化が普通であるが, 全羅道, 慶尚南道の一部, 咸鏡道の一部地域では 𐄀 > o になっている。特に全羅南道では歴史的に 𐄀 > a と 𐄀 > o の変化が共存するが, いくつかの例をみると次のとおりである。p'ot(팥 小豆), p'ori(파리 ハエ), p'olta(빨다 吸う), nomol(나물 ナムル)。これらの地域では先に -a が円唇化を起こして -o になり, p'ol の語形が先にできてから, p'al の語形が他の方言から流入したものと考えられる。

なお、小倉進平の資料では p'al-kom-dʒi, p'ol-ʔku-ma-ri, p'al-ʔtɛ-gi, p'al-tuk, p'ol-tuk などの語形があげてあるが、筆者の見解としては p'al-kom-dʒi は「肘」を表し、p'ol-ʔku-ma-ri, p'al-ʔtɛ-gi, p'al-tuk, p'ol-tuk は「臂（腕）」の俗語であると考えている。実際にどの部分を指しているかはさらに調査を進めて検討する必要がある。例えば、小倉進平のこの項目の語形データの(10)の欄に『訳語』拐肘子 p'ɛr-s-ku-mɔ-ri, 『訓蒙』肘 p'ɛr-ku-pi-rɔŋ』という例があるが、この場合は腕と肘を含めて調査していたとも考えられる。

参考文献

- 李基文 (1998, 2002) 『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社.
李基甲 (1986) 『全羅南道の言語地理』国語学叢書 11. ソウル：塔出版社.
李太永 (2005) 『전라북도 방언 이야기』새국어생활 15-2. 国立国語院.
劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.

臂



- ▲ pʰal
- pʰa-ri
- pʰal
- ▭ pʰal-ʔte-gi
- ▭ pʰal-kom-dʒi
- ▭ pʰal-tuk
- pʰo-ri
- pʰol
- pʰol-ʔku-ma-ri
- ⊕ pʰol-gɛ
- ⊕ pʰol-tuk
- NR

柱

岡村佳奈

1 語形の分類

韓国の標準語は ki-duŋ (기둥) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「柱」という項目で以下の4種が記されている (上: 117-118)。これらの語形は、第一音節が ki のものと tʃi のものとに分けることができる。

(1) ki 系

(1a) ki-doŋ

(1b) ki-duŋ

(2) tʃi 系

(2a) tʃi-doŋ

(2b) tʃi-duŋ

(2) の tʃi は, (1) の ki が口蓋音化したものだと考えられる。また (1a) (2a) と (1b) (2b) は, 第二音節の母音が o もしくは u であり, 前者と後者で母音の対立がみられる。

2 その他の語形

『韓国言語地図』では上記と同様, 기둥, 기둥, 지둥, 지둥の4つしか語形がないと述べられている。しかし『増補韓国語辞典』(1990)では, これ以外にも기둥:○ (kidu:ŋ) という第二音節が長母音になった語形が江原道の一部でみられるとしている。また, 小倉進平のデータが空白になっている咸鏡北道に関しては, 『咸北方言辞典』(1986)によると, 기둥 (鶴城と鍾城), 지똥 (鶴城) という語形も用いられるという。

3 地理的分布

各語形の地理的分布は以下の通りである。

(1a) ki-doŋ: 忠清南道の一地点のみ

(1b) ki-duŋ: 京畿道, 江原道, 黄海道, 平安南道, 平安北道

(2a) tʃi-doŋ: 全羅南道, 全羅北道, 慶尚南道, 慶尚北道, 忠清南道, 忠清北道, 済州島

(2b) tʃi-duŋ: 全羅南道, 全羅北道, 慶尚南道, 慶尚北道, 忠清南道, 忠清北道, 京畿道, 江原道, 咸鏡南道

韓国語の標準語である (1b) ki-dun̄ は、京畿道から北西部 (黄海道, 平安南道, 平安北道及び江原道の一地点のみ) に分布し, その母音が異なる (1a) ki-don̄ は、忠清南道の一地点のみにみられる。(2a) tʃi-don̄ は、慶尚道を中心に南部地域に集中して現れており, 済州島にも分布する。最も広範囲に分布しているのは (2b) tʃi-dun̄ で, 慶尚北道や忠清北道からの北東部と南西部に分布する。また, データが空白になっている咸鏡北道では、『咸北方言辞典』(1986) によれば, 기둥と지둥のいずれかを用いている地域が多いが, 前述したとおり기둥, 지둥も一部で用いられている。

4 文献上の記録

文献上, もっとも古い形は길であり, 以下のように『訓民正音解例本』(1446), 『月印釈譜』(1459), 『法華経諺解』(1463) などで用例がみられる¹。

길 爲柱 <1446 訓民正音解例本 50>

臺 우희 네 길 寶幢이 잇고 <1459 月印釈譜 8:19a>

15～16 世紀になると기둥, 기둥という語形がみられるようになるが, 『韓国語語源辞典』(2012) によれば, これは「길 (柱) + 옹 (接辞)」という構造になっている。そして, その後, ㄱがㅈに交替した기둥がみられるようになっている。以下, 用例を示しておく。

柱 기둥 두 <1527 訓蒙字會中6>

陳公익 글 넘던 지비여 돌기둥이 프른 잇 무더 기우렛도다<1632 重刊杜詩諺解3:63b>

그 주초돌을 정하고 기둥을 세우며 그 기와를 덮혀 <1896 獨立新聞>

一方, tʃi 系は ki 系に比べると用例数が少ないが, 19～20 世紀にかけて用いられるようになったのではないかと推定される。例は以下の通りである。

지둥 (柱) <物譜 第宅>

白玉으로 門을 하고 琉璃 지둥 琥珀 柱礎 珊瑚로 欄干 싸고 <1887 鰲兔歌>

너의집에 가나다나 지둥 = 기둥 뿌리 다판다나 <1948 조선민요집성 오동오감>

5 考察

地理的分布からみると, tʃi 系が周辺部で使用されており, あたかもそれが古形であるかのようにみえる。しかし, 文献上の記録からは明らかに ki 系が古形であり, 歴史を経るとともに길, 기둥, ki-don̄, ki-dun̄ と語形が変化したと推定される。このうち近年に至るまで

¹ 用例は, 歴史コーパス『21 世紀世宗計画』および李朝語辞典(1997)から検索したものである。できる限り原文も確認したが, 一部確認できていない用例があることをお断りしておく。

用いられているのは (1) ki 系の ki-don と ki-dun であるが、ki-don は『朝鮮語方言の研究』でも一地点でしかみられず、『韓国言語地図』および『韓国方言資料集』でも慶尚道、忠清北道の数地点でしかみられないため、徐々に消滅しつつある形だといえるかもしれない。

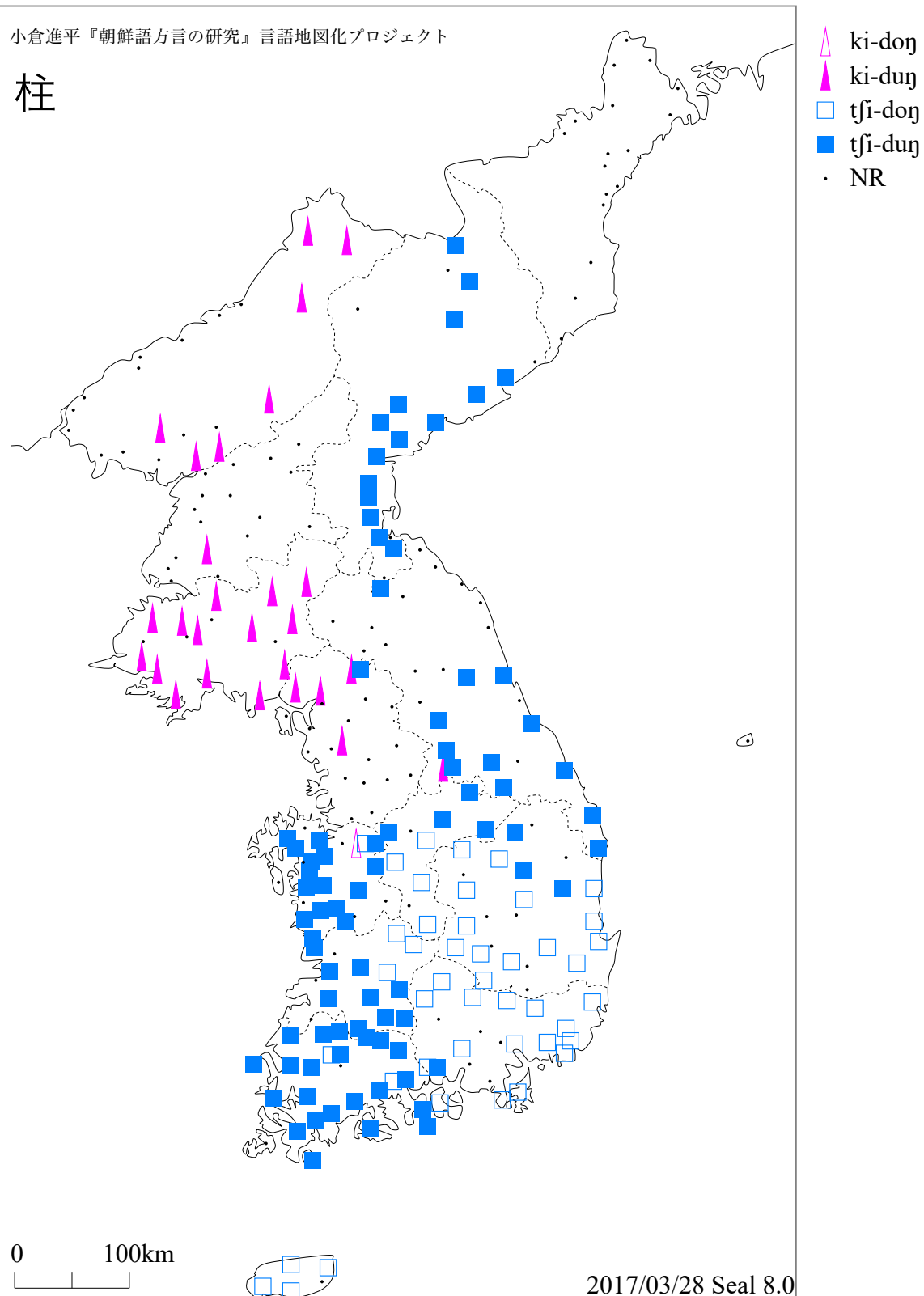
(2) tji 系については、tji-don, tji-dun とその変種が確認されるが、文献上の記録も少ないため首都付近で用いられていた語形かどうかを断言するのは難しい。しかし、ㄱがㅈになるㄱ口蓋化は慶尚道と全羅道でみられる現象であること (『国語音韻論』2004), そして『韓国言語地図』には지동について「표준어의 영향을 받으면서도 ‘지동’의 뿌리도 다 뿌리치지 못한 일종의 혼효어 (標準語の影響を受けながらも「tji-don」を根こそぎにできなかった一種の混交語)」という記述があることを鑑みると、まずは tji-don が南部地域などの特定地域で用いられるようになり、それがその地域の周辺へも広まっていくにつれて tji-dun へと変化したのではないかと予想される。

また、(1) ki 系 / (2) tji 系という観点ではなく、第二音節が -don か -dun かという観点については、文献上の記録から前者が古い形であるということができよう。-don は、散在している地点を除けば、慶尚道を中心とした南部地域と済州島に分布しており、地理的分布からこれが古い形であることがわかる。

参考文献

- 金武林 (2012) 『韓国語語源辞典』ソウル：知識と教養.
金泰均 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.
劉昌惇 (1997) 『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
崔明玉 (2004) 『国語音韻論』ソウル：太学社.
崔鶴根 (1990) 『韓国方言辞典』ソウル：明文堂.

柱



瓦

林 茶 英

1 はじめに

韓国語の標準語は ki-wa (기와) である。『朝鮮語方言の研究』(上: 118)にはこれにあたる語が 13 種記録されている。これらの語形は大きく k- から始まる語形のグループと tʃ- から始まる語形のグループに分けることができる。tʃ- で始まる語形はさらに「瓦」の韓国漢字音である wa (와) が含まれるものとそうではないものに分かれる。

(1) 第 1 音節が k- から始まるもの

(1a) ki-wa / ki-a / ki-ε

(1b) ke-wa

(1c) kja

(2) 第 1 音節が tʃ- から始まるもの

(2a) tʃi-wa / tʃi-a / tʃi-ε / tʃi-ja

(2b) tʃε-wa / tʃε-ε / tʃε

(3) 第 2 音節に wa (와) が含まれていないもの

tʃi-se

(1)や(2)の語形は第 1 音節の母音の種類によりそれぞれ 3 グループ、2 グループに分かれるが、各グループの第 1 音節の母音を見ると、(1a)や(2a)は i, (1b)は e, (1c)は ja, (2b)は ε で現れる。(1a)と(2a)の場合、第 2 音節に wa, a, ε が共通して現れる。13 個の語形のうち、瓦の韓国漢字音が含まれていない語形は(3)の tʃi-se しかない。

2 地理的分布

(1)と(2)の分布地域を見ると、大体北部地域と南部地域に分かれるように見える。(1)のほとんどすべてが中央以北地域に分布し、(2)の場合、咸鏡南道にも若干見られるが、ほとんどの語形が南部地域に分布する。

各語形の分布地域を見ると、まず(3)の tʃi-se は済州地域にしか見られない。(1a)の ki-wa は主に黄海道、平安南北道、京畿道に分布し、全羅南道や忠清北道の 1 箇所に見られる。ki-a は京畿道や江原道に、ki-ε は平安北道に 1 箇所ずつ見られる。(1b)の ke-wa は平安地域に若干見られる。(1c)の kja は黄海道の広い範囲にかけて分布する。(2a)の tʃi-wa は ki-wa と共に最も多く見られる語形であるが、全北、忠南、咸南、江原に分布し、忠北の 1 箇所にも見られる。tʃi-a は全羅地域に分布し、tʃi-ε は主に済州や咸南に分布するが、江原や忠北にも若干

見られ、慶南や慶北に 1 箇所ずつ見られる。tʃi-ja は全北や忠南に分布するが、全南にも見られる。(2b)の tʃe-wa は慶尚道に分布し、全南の 1 箇所にも見られる。tʃe-ε は慶南の 2 箇所に、tʃe は江原に分布し、慶北や全北にも若干見られる。

3 文献上の記録

ki-wa(기와)の古い語形である ti-se(디새)¹が見られる最も古い文献は『釈譜詳節』(1447)であり、『杜詩諺解』(1481),『金剛經三家解』(1482),『訓蒙字会』(1527),『類合(七長寺版)』(1664)などにもこの語形が見られる。代表的用例は次の通り。

디새며 돌호로 <1447 釈譜詳節 13: 51b>

디새 와(瓦) <1527 訓蒙字会 中 9b>

디새 와(瓦) <1664 類合 七長寺版>

ki-wa の済州方言である tʃi-se(지새)は『倭語類解』(17--)や『訳語類解補』(1775)に見られる。『漢清文鑑』(1779)には tʃi-wa(지와)が載っており、『物譜』(1802)に tʃi-wa-ka-ma(지와가마)という語が見られる。標準語である ki-wa が見られる最初の文献は『続明義録諺解』(1778)であるが、この語形は 19 世紀の文献である『柳氏物名考』(1824)や、『広才物譜』(18--)にもよく見られる。代表的用例は次の通り。

지새 모루(蓋瓦壟) <1775 訳語類解補 13a>

지새 와(瓦) <17-- 倭語類解 上 32a>

지와 <1779 漢清文鑑>

瓦溝 지와굴 <18-- 広才物譜>

4 考察

李基文(1991:28)によると、se(새)は「草」の訓であり、屋根をふく伝統の材料を表す語であった。また、中国から瓦が流入した直後には瓦をも se と呼んだが、se の前に陶器類を表す til(틸)がついて til-se(틸새)となり、これがさらに ti-se(디새)になったという。現在残っている語形のうち最も古い語形が tʃi-se であるが、これは ti-se の ti が口蓋化した結果であろう。

tʃi-wa と ki-wa の場合、2 つの語形がほとんど同時期の文献に見られるため、2 種の語形の新古関係に関しては断定できないが、第 2 音節に se が残っている方言が済州方言しかないという点から考えれば、まず tʃi-se の se が wa に取り替えられ、次に一部の方言において tʃi が ki に変化したと考える方が妥当と思われる。tʃi の ki への変化は「k(ㄱ)口蓋化」に対す

¹ 李基文(1991:28)は ki-wa(기와)の古い語形が ti-se(디새)と述べて、この語形が陶器類を表す til(틸)と草を表す se(새)との合成語であると説明している。

るハイパーコレクション²の結果と考えられる³。こうしたことから、瓦の語形の変化は次のように想定できる。

ti-se > tʃi-se > tʃi-wa > tʃi-a > tʃi-ja
→ ki-wa > ki-a > kja
> tʃi-ε > tʃε-ε > tʃε
→ ki-ε
> tʃε-wa
→ ke-wa

(‘>’ は音韻変化を, ‘→’ はハイパーコレクションを表わす)

参考文献

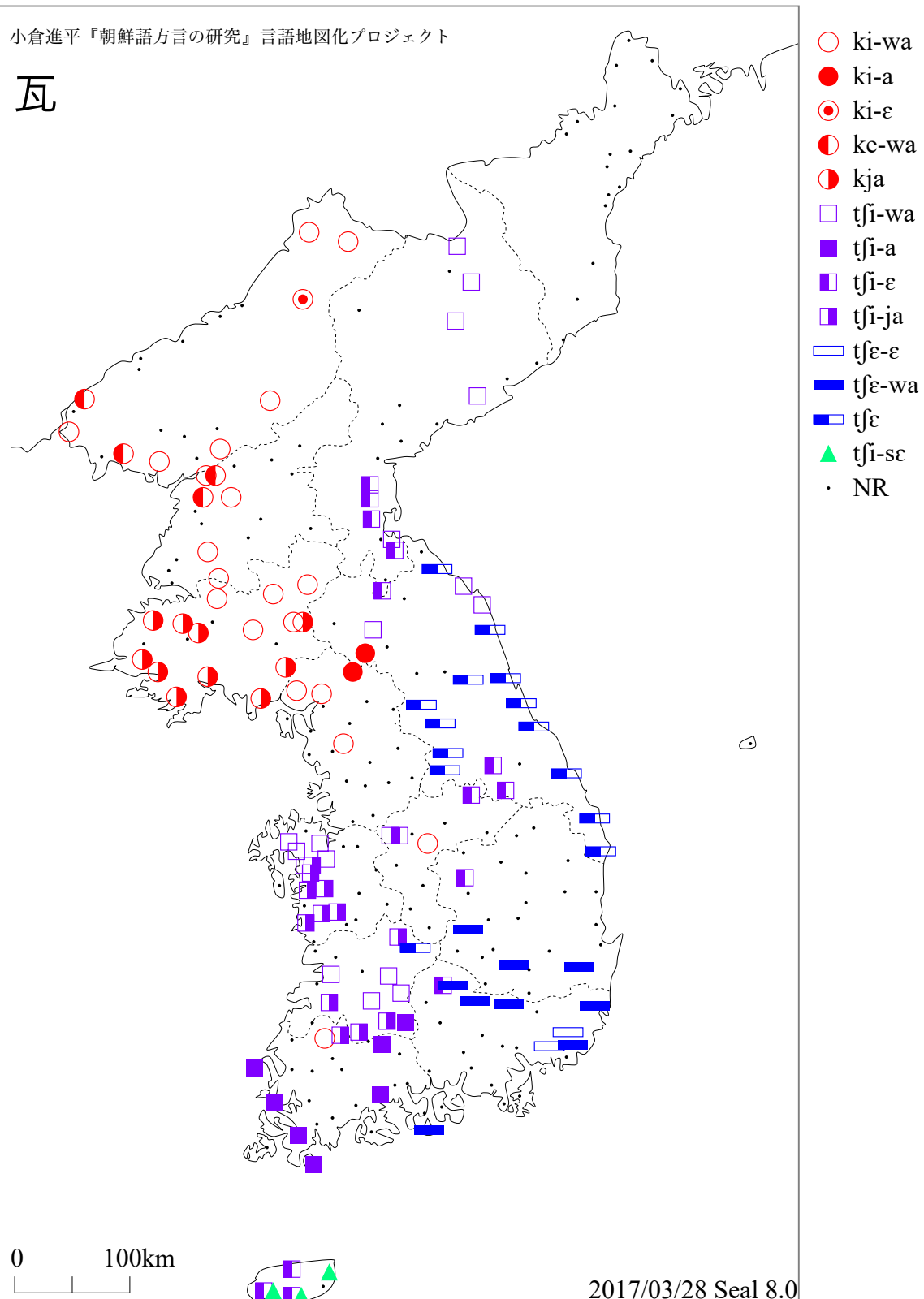
李基文 (1991) 『国語語彙史研究』 ソウル：東亜出版社.

李基文 (1998, 修正版 2002) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社.

² 南部方言から始まった t(ㄷ)口蓋化に抵抗があった中央方言話者が本来 tʃ(ㅈ)から始まる語まで k(ㄱ)に校正した事実をいう。

³ 李基文(2002: 210)は tʃi-se から ki-wa への変化は中世韓国語である tʃil-sam (길삼紡織)が kil-ʔsam (길쌈)に、tʃitʰ (깃羽)が kis (깃)になった変化と同様であるとしている。

瓦



台所

福井 玲

1 はじめに

「台所」にあたる現在の韓国の標準語は形態音韻論的表記では $pu\text{ək}^h$ (부엌) である。この語の語末子音は、単独形では単なる k と同じ音声的実現を見せるが、母音で始まる助詞が付くと激音（有気音）が現れるので、形態音韻論的に語末に有気音 k^h を持っているとして記述することができ、現代語の正書法もそれに従っている。しかし、実はソウルの在来の方言では、このような助詞が付いても、激音ではなく平音 k で発音するのが普通であった。例えば、 $pu\text{ək}$, $pu\text{ək-i}$ [$pu\text{əgi}$] (主格), $pu\text{ək-e}$ [$pu\text{əge}$] (処格) など。しかし、小倉進平の『朝鮮語方言の研究』には、基本的に単独形の発音しか記載されていない場合が大部分なので、こうした形態音韻論的な現象は知りえないという欠点がある。したがって、この項目の資料にはこうした限界があることを承知の上で進めていかざるをえない。

2 語形の分類

『朝鮮語方言の研究』には、「台所」にあたる語形が 25 種記録されている（上: 126–128）。それらは、大きく見ると現在の標準語の単独形 $pu\text{-}\text{ək}$ およびそれに近い変種と、それとは語源の異なる $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒi}$ 系の 2 つに分けられる。後者は一般的に「鼎厨」($t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒu}$) という漢字語に由来すると言われているが、これについては 5 節で考察する。なお小倉進平はこの項目について「地方により炊き口にもいふ」という注釈を付けているが、これは咸鏡道などにおける独特の台所・炊き口の構造にかかわるものである。

(1) $pu\text{-}\text{ək}$ 系

(1a) $pu\text{-s}\text{ək}$ / $pu\text{-s}\text{əp}$ / $pu\text{-s}\text{ak}$ / $pu\text{-s}\text{ap}$ / $pu\text{-s}\text{ut-ke}$

(1b) $pu\text{-d}\text{ʒ}\text{ək}$ / $pu\text{-d}\text{ʒik}$

(1c) $pu\text{-}\text{ək}$ / $pu\text{-}\text{ək-ke}$ / $pu\text{-}\text{ət-ke}$ / $pu\text{-at-ke}$ / $p\text{ək}$ / $p\text{ək-ke}$

(1d) $pi\text{-}\text{ək}$ / $pi\text{-j}\text{ək}$ / $pj\text{ək}$ / $pe\text{-j}\text{ək}$ / pek / $pek\text{-ke}$ / $pek\text{-ke}$

(2) $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒi}$ 系

$t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒe}$ / $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒe}$ / $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒi}$ / $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒa-}^?kan$ / $t\text{ʃ}\text{ə}\eta\text{-d}\text{ʒe-si-ri}$

(1)の $pu\text{-}\text{ək}$ 系は、まず、語中に子音が現れるもの(1a), (1b)とそうでないもの(1c), (1d)に大別することができる。前者は、語中子音が $-s-$ か $-d\text{ʒ-}$ によって(1a)と(1b)に分けられる。後者は、第 1 音節の母音が u かそれに由来するもの(1c)と、 i あるいは i に由来すると思われるもの(1d)の 2 つに分けられる。なお、語末子音が k ではなく p で現れる語形があるが、これは(1a)に限られる。その他に $-ke$ あるいは $-ke$ という接尾辞が付いたものが見られる。

次に、(2)の tʃɔŋ-dʒi 系は、第2音節の母音にいくつかの種類があり、さらに「部屋」を意味する接尾辞 -ʔkan および -si-ri が付いたものが存在する。

3 地理的分布

まず、(1a) pu-sɔk 系は、慶尚道、全羅道、咸鏡道に多く見られる。次に、(1b) pu-dʒɔk 系は、慶尚道東部に見られる。

(1c) pu-ɔk 系は、黄海道、京畿道、江原道、忠清道、江原道、平安道、咸鏡南道など、半島中央部を中心に幅広く分布する。これに対し、(1d) pi-ɔk 系は、平安道、黄海道、咸鏡南道南部など、北西部に偏在する。

次に、(2) tʃɔŋ-dʒi 系は、全羅道、済州島、慶尚道、咸鏡道などに見られ、(1a)の pu-sɔk 系と併用されている地域が少なくない。あるいは何らかの意味的な使い分けがあるのかもしれない。

4 文献上の記録

まず、中世語には、브엎, 브익, 브억という3つの語形が見られる。このうち15世紀の前半ぐらいまでは브엎が最も多く、次いで15世紀後半から16世紀には브익が用いられるようになり、16世紀末に語中子音がゼロとなった브억が登場する。

브엎爲竈 <1446 訓民正音解例本 57>

브익빋 검디영을 彈子만 ㅎ닐 가져 漿水예 프러 <1466 救急方上 40b>

싸홀 파 브익 마티 ㅎ야 <1489 救急簡易方 1:74a>

庖 브익 포, 廚 브익 두, 竈 브익 조 <1527 訓蒙字會中 5b>

竈 브억 조 <1576 類合上 24a>

なおこれらの用例を通覧すると、この語は今日の台所というよりは「竈（かまど）」の意味で用いられることも少なくなかったことが分かる。また語末子音が -p か -k かという点に関しては、中世語において sop~sok 「中」のような並行的な例が見られる。こうした子音の変化に関しては、一般に -p が -k より古いものと考えられる。

17世紀以降の近代語になると、브엎, 브익, 브억といった形が用いられるようになる。これらは中世語の -z- が消失したものである。

4 考察

まず、(1)の pu-ɔk 系の中では、(1a)の pu-sɔk 系が中世語の -z- に対応する -s- を持っている点で、古い要素を残している語形と考えられる。その分布は南の全羅道・慶尚道と北の咸鏡道に分断されているが、これは圏論的な分布を示していると考えられる。また、その中でも語末子音として pu-sɔp のように -p- を持つ語形が全羅南道の西部に見られるが、

これは中世語の中でも初期の語形により近いものである。次に、(1b) pu-dʒɔk などについては、-s- の代わりに破擦音が見られるが、これは中世語の -z- の別方向への変化を示すもので、並行的な例は他の語でも見られる。

(1)の pu-ɔk 系のその他の語形はすべて語中の子音が脱落したものである。その中で、平安道・黄海道を中心に見られる(1d)の pi-ɔk などの語形は、中世語の母音 i が i に変わっている点で特異である。この母音は唇音に後続するときは u になるのが原則だからである。他に並行的な例があるかどうかは不明である。

なお、(1)の pu-ɔk 系については、브섭 < 불 「火」 + 섭 (『우리말語源辞典』) という語源説がある。第 1 音節が 불 「火」に由来するという点は、複合や派生において語幹末の /r/ [ɹ] が z の前で脱落するのが一般的に見られ、また意味的にも自然であって、正しいと思われる。第 2 音節의 섭 は中世語では例証されないが、方言で 섭あるいは 섯 が「傍」の意味で用いられることと関係があるものと思われる。

次に、(2)의 tfɔŋ-dʒi 系であるが、この由来は「鼎厨」(정주)であると一般的に言われている。例えば『韓国方言地図』のこの項目の解説には次のような説明が見られる(p. 87)。

tfɔŋ-dʒi 系は、言うまでもなく「鼎厨」あるいは「鼎厨間」から来たものであろうが、実際、「鼎厨」は咸鏡道の家屋構造で見られる特殊な空間、即ち台所と居間との間に壁がなく、かまどと繋がっている空間のことなので、いくらか意味変化を経たものだと言えるだろう。(‘정지’계는 말할 것도 없이 정주(鼎厨) 또는 저주간(鼎厨間)에서 온 것이겠는데 사실 ‘정주’는 함경도 쪽 가옥구조에서 볼 수 있는 특수한 공간, 즉 부엌과 안방 사이에 벽이 없이 부뚜막과 잇닿은 공간인 만큼 의미 변화도 얼마간 겪은 것이라 할 것이다. 筆者訳)

しかし、小倉進平のデータでは、第 2 音節の母音として u をもつ語形がまったく見られないという点が問題になる。u から i への変化は接尾辞 i の付加により u+i > wi > i という過程を想定すれば可能であるが、その他の母音、例えば tfɔŋ-dʒe の ‘e’, tfɔŋ-dʒe の ‘e’,あるいは tfɔŋ-dʒa-ʔkan などの ‘a’ が、u からどのような過程を経て生じたのかがうまく説明できないからである。あるいは、「寺の台所」という意味で使われる「浄斎」(정재)との関係は考えられないだろうか。

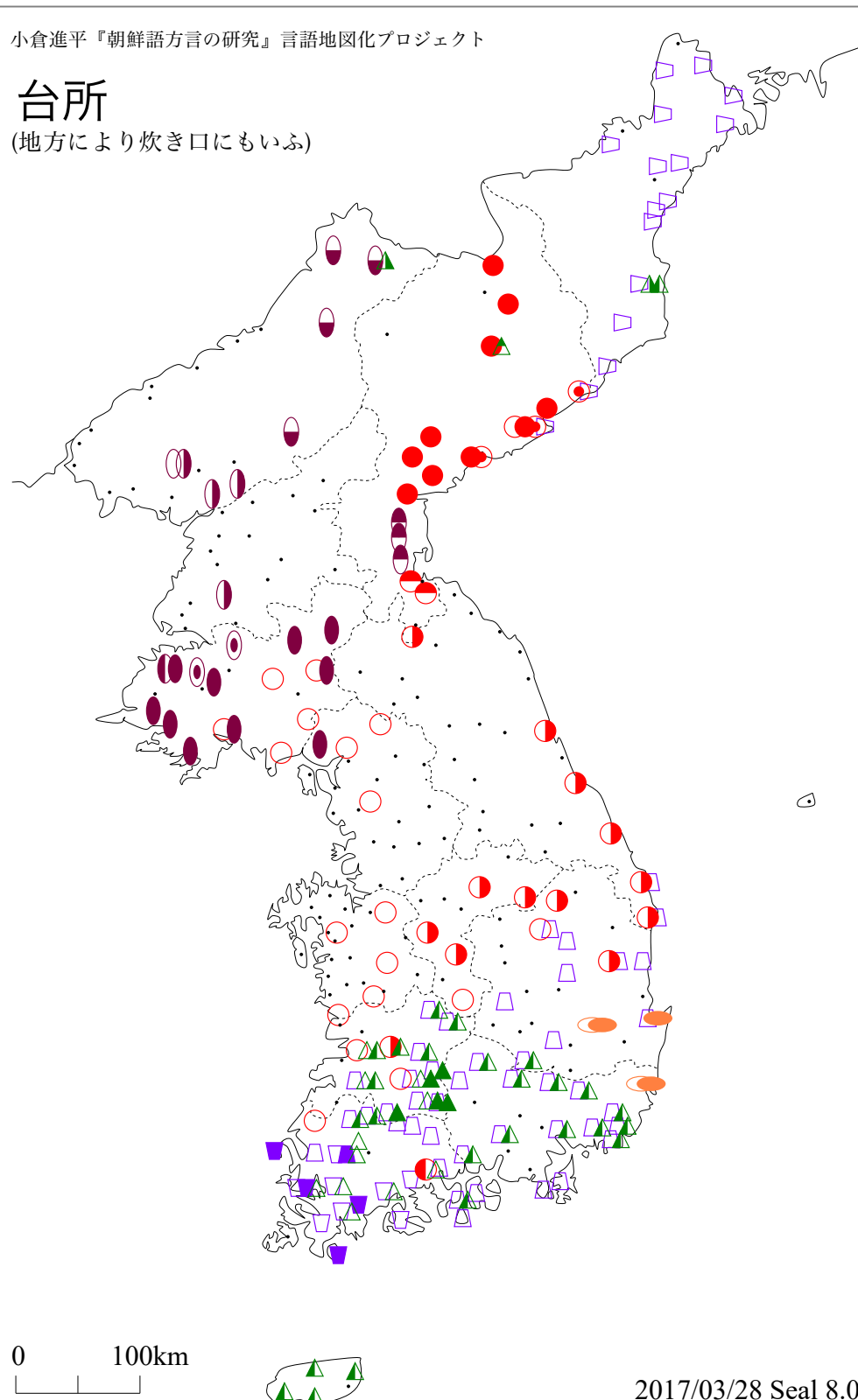
最後に、中世語において、語末子音が p から k に変化したことは上で見たとおりであるが、これがさらに現代の標準語で形態音韻論的に激音 kʰ に変わった理由も今のところ不明である。

参考文献

金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社。

台所

(地方により炊き口にもいふ)



- pu-sək
- ▲ pu-səp
- pu-sak
- ▼ pu-sap
- pu-sut-kε
- pu-dʒək
- pu-dʒik
- pu-ək
- pək-kε
- ⊙ pu-ət-kε
- ◐ pu-at-kε
- ◑ pək
- ◒ pək-kε
- ◓ pi-ək
- ◔ pi-jək
- ◕ pjək
- ◖ pe-jək
- ◗ pek
- ◘ pek-kε
- ◙ pek-kε
- △ tʃəŋ-dʒε
- ▲ tʃəŋ-dʒε
- ▲ tʃəŋ-dʒi
- ▲ tʃəŋ-dʒa-ʔkan
- ▲ tʃəŋ-dʒε-si-ri
- NR

木履(ぼくり)

山崎玲美奈

1 はじめに

韓国の標準語は *namak-sin* (나막신) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』(上: 142-143) に 12 種記録されている。これらはまず ‘*namak*’ (나막) が含まれるものとその変種、それが含まれず *kək-tui-gi*, *ʔkət-tu-gi* という形をなすものの 3 つのグループに大きく分けることができる。

(1) *namak* が含まれるものおよびそれに類似した語形

(1a) *na-mak sin* 系 (「木」 + *sin*)

(1a-1) *na-mak sin*, (1a-2) *nam-bak sin*, (1a-3) *na-mok sin*, (1a-4) *na-muk sin*,
(1a-5) *na-mu sin*

(1b) *na-mak kɛ* 系 (「木」 + *kɛ*)

(1b-1) *na-mak kɛ*, (1b-2) *na-mok kɛ*, (1b-3) *na-muk kɛ*

(1c) *nam-sin* 系 (1c-1) *nam-sin*, (1c-2) *mok-sin*

(2) *namak* が含まれない語形

(2a) *kək-tui-gi*, (2b) *ʔkət-tu-gi*

(1) の *namak* が含まれるものは、「木」を表す語形に *sin* がついたものと、そのあとに *kɛ* がついたもの、そして「木」を表す 1 音節の語形に *sin* のついたものの 3 つに分かれる。(2) の *namak* が含まれない形式のものは、*kək-tui-gi*, *ʔkət-tu-gi* の 2 つである。

2 その他の語形

これ以外の語形として『標準国語大辞典』には *미영*, *갯두기* が見られる。*갯두기* は (2) の変種と考えられる。この他に『韓国民族文化大百科』には *걱지*, *목극*(木屐), *각색*(脚蹻), *목리*(木履), *목혜*(木鞋), *토막신* などの語形が見られる。『韓国方言資料集』には、江原道方言として *갯뛰기*, *걱뛰기*, *나박신*, 忠清南道方言として *나무개*, *나모개*, 全羅北道方言として *굼나무개*, 全羅北道方言として *나마개*, *나매개*, *나박신* などの語形が見られる。

3 地理的分布

(1a-1) の *na-mak sin* は黄海道, 咸鏡南道, 江原道, 京畿道, 忠清道, 全羅道, 慶尚道にかけて幅広く分布する。慶尚道においては全域に現れている。(1a-2) の *nam-bak sin* は黄海道, (1a-3) の *na-mok sin* は咸鏡南道, (1a-4) の *na-muk sin* は慶尚道だけに見られる。(1a-5) の *na-mu sin* は朝鮮半島の北部および南部で見受けられるが中央に当たる地域では現れていない。

(1b-1) の *na-mak kɛ* は忠清道, 全羅道, 慶尚南道という南部でのみ見られる。(1b-2) の *na-*

mok ke は忠清道でのみ現れる。(1b-3)の na-muk ke は忠清道, 全羅北道に集まっている。

(1c-1)の nam-sin は済州島, (1c-2)の mok-sin は忠清南道でのみ見られる。

(2a)の kək-tui-gi は咸鏡南道を中心に分布し, 京畿道にも若干見られる。(2b)の ʔkət-tu-gi は平安道, 黄海道に広く分布しているが, 他の地域では見られない。

4 文献上の記録

나막신という語形は 19 世紀以降の文献で多く表れる。『国漢会語』(1895), 『独立新聞』(1896), 『韓英字典』(1897)など, 開化期の多くの文献に見られる。나막신을表すものの中で最も古い語形は나모신で『南明集諺解』(1482)に見られるが, 나모신という語形は小倉(1944)には紹介されていない。一方, 나모격지의語形では『四声通解』(1517)に見られ, 남악신의語形では『太平広記諺解』(17 世紀)に見られる。『韓國民族文化大百科』にあった각색は『訳語類解』(1690)に見られる。例は次の通り。

나모신 쓰스고 <1482 南明集諺解 下 8>

나모격지(木履) <1517 四声通解 下 48>

남악신을 주어 <16-- 太平広記諺解 1:56>

木履 격지 脚襪 上全 <1690 訳語類解 上 47a>

격지는『標準国語大辞典』において나막신의古語であるとされている。例は次の通り。

謝靈運의 피흘 좇던 격지오 陶淵明의 술 거르던 頭巾이로다 <1481 杜詩諺解 16:22>

고지 衰殘흔디 격지 신고 거로물 더디 호라 <1481 杜詩諺解 25:22>

履 격지 극 <1527 訓蒙字會 中 11>

また, (1a-2) nam-bak sin, (1a-4) na-muk sin, (1a-5) na-mu sin, (1c) nam-sin 系, (1c-1) nam-sin, (1c-2) mok-sin, (2a) kək-tui-gi, (2b) ʔkət-tu-gi は 19 世紀以降にのみ見られる。

一方(1a-3) na-mok sin, (1b-1) na-mak ke, (1b-2) na-mok ke, (1b-3) na-muk ke は文献上では見られない。

5 考察

(1) の語形は「木」を表す語形に, 履物を表す sin がついたものと, そのあとに ke がついたものがある。ke の語源については, 現段階では明らかではない。ここで「木」を意味する語形には, 나막, 남박, 나목, 나목, 나무, 남, 목があるが, 목は「木」の漢字音であろう。この他の나막, 남박, 나목, 나목, 나무, 남は現代語の나무につながるものと思われる。나무の古い語形は나모/남ㅏであり, 前者は単独形及び共格助詞との結合で, 後者は主格, 対格など主要な格助詞の前で用いられている。中世語では, 『釈譜詳節』(1447)をはじめとして数多く用いられている。

(2) の na-mak が含まれない語形である(2a) kək-tui-gi と(2b) ʔkət-tu-gi は, 『標準国語大辞

典』によると나막신의俗称とされている。당혜(唐鞋)の形に作った在来方式の皮の靴である
꺅두기와形が類似したことから転用され、それがいくつかの語形で用いられたものと推定
される。

語形の新古関係では、文献上では나모신이最も古い(1)の語形にその形は見られない。
나무の古い語形가나모/남ㄱであったとしても、(1)の語形の「木」にあたる部分に、それと
同形のものが見られない点は、どのように考えたらいだろうか。

나무については、河野六郎 (1945: 217-220)¹に詳しい。ここでは、나무は李朝初期나모と
書かれる一方で、その語形変化は남기等のように-gを含む形が用いられていたことに言及
すると共に、「又 Ramsted も已に指摘しているように、「足駄」(朝鮮在来)を namak-sin
という所からこの「樹」という語は k の要素を含んでいたことが知られる」とし、この点
について註釈において「namak-の形態論的機能は不明であるが、嘗て此の語は namak なる
二音節の語根を持っていたと思われる。これが namak-sin なる熟語の中に名残を留めている
のであろう。この語根が第二音節の母音脱落に依り namg-を招来したものであろう」と述べて
いる。そして、나모と남ㄱにおいては나모が新形であろうとして次のような変化を提示
している。

(単独形) namgΛ → (g が脱落) > namΛ → (mΛ は第一主題により mo となる) > namo

同じく「木」については、李基文(1998: 164-165) では古語*나목을設定し、次のような推
定をしている。

*나목 > 나ㅁ > 나모/남

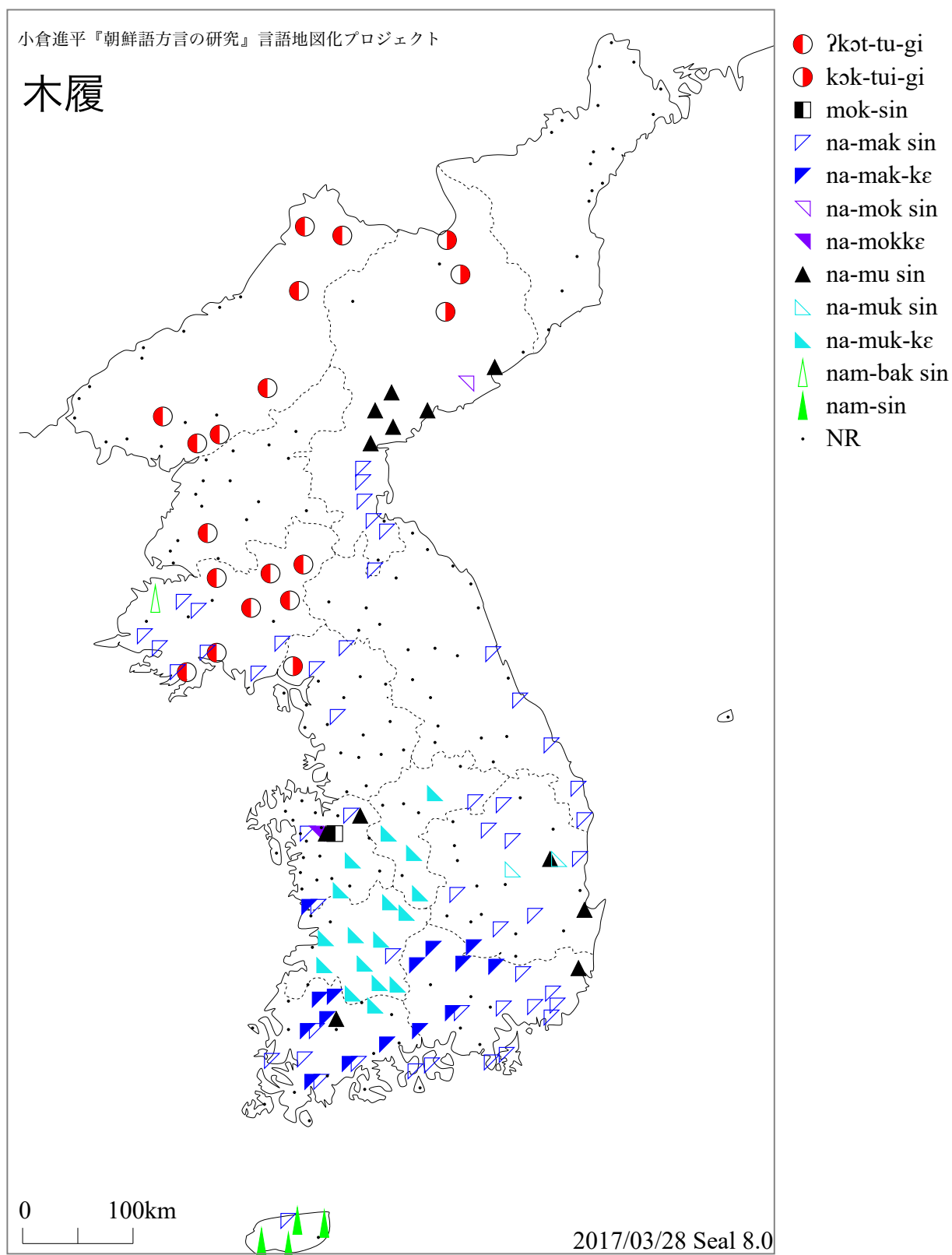
現代語의 나막신이、この*나목に由来し、その名残を留めていると考えることは可能であ
るが、そうであるとするならば文献上で現れる나모신이方言形として現れていない点及び、
現在の標準語形が何故나모신ではなく나막신となったのかという点が疑問である。남악신
の語形が太平廣記諺解(17世紀)に見られることから、現代語의 나막신に繋がる語形は 17 世
紀ごろから見られ、それ以前は나모신あるいは꺅지, 나모꺅지, 각색などの語形が使用さ
れていたものと考えられる。

参考文献

- 韓国精神文化研究院編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南: 韓國精神文化研究院.
한글학회 (1991) 『우리말큰사전』ソウル: 語文閣.
河野六郎(1945) 「朝鮮方言学試攷—「缺」語考—」京城帝国大学文学会論纂 11. 東京書籍京
城支店. (『河野六郎著作集』(1979: 101-373) 所収 平凡社)
李基文 (1998) 『新訂版 国語史概説』ソウル: 太学社.
劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』ソウル: 延世大学校出版部.

¹ 引用部分の仮名使いは、便宜上本稿作成者により現代仮名遣いに直した。

木履



木綿

岩井 亮雄

1 語形の分類

韓国の標準語は mu-mjɔŋ (무명) であるが、これに当たる語は『朝鮮語方言の研究』の「服飾」に「木綿」という項目名で都合 17 個の語形が記録される (上: 149)。

これらの語形は, mu-mjɔŋ / mi-iɔŋ 系と, mu-mjɔŋ / mi-iɔŋ 系と pe (布) から成る複合語系, 綿を意味する 목화 (木花) の変種と考えられる mok-het に大きく分けることができる。

(1) mu-mjɔŋ / mi-iɔŋ 系

(1a) mu-nɔŋ / mu-njɔŋ / mu-mjɔŋ / mi-njɔŋ / mi-mjɔŋ

(1b) mi-iɔŋ / mi-iŋ / miŋ / me-ɛŋ / me-eŋ / me--jɔŋ (sic) / mjɔŋ

(2) 複合語系

(2a) mi-mjɔŋ pe / miŋ-pe / meŋ-be / mjɔŋ-be

(3) その他の語形

(3a) mok-het

ここで miŋ-pe は meŋ-be / mjɔŋ-be の如く miŋ-be と表記されるか, mi-mjɔŋ pe の如く miŋ pe と表記されるべきである。mi-iɔŋ は小倉進平の転写の原則によれば mi-jɔŋ と表記してもよいはずである。また, me--jɔŋ は me-jɔŋ の誤植と見て, 以下では me-jɔŋ と表記する。

2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、『韓国方言資料集』では 목화 (木花) や 면화 (綿花) の項目に上で挙げた語形が見られる。『韓国方言辞典』では上記以外の語形が見られるが, これらの語形は (1) の変種, (2a) の変種, mjɔ:ŋ と sil (糸) から成る複合語, 日本語の木綿に由来すると考えられる語形, 疋の麻・木綿織物を意味する p^hil-mok (疋木) の変種に大きく分けることができる。

(1a) の変種: (mu-meŋ / mu-me: / mu-meŋ) / mu-miŋ / mi-nɔŋ

(1b) の変種: me: / me-ɔŋ / mjɔ-ɔŋ / mjɔ:ŋ / mi:ŋ / mi-ɔŋ

(2a) の変種: me:ŋ-be / me:ŋ-be / meŋ-be(:) / me-eŋ-be / mi:ŋ-be(ɛ) / mi-ɔŋ-be(ɛ) /
mi-jɔŋ-be(ɛ) / mi-iŋ-be

(2b) mjɔ:ŋ-sil

(3b) mo-meŋ / (mu-meŋ / mu-me: / mu-meŋ)

(3c) p^hil-juk

3 地理的分布

韓国の標準語である (1a) の *mu-mjɔŋ* は忠清道に分布する。『韓国方言辞典』では全羅道, 慶尚道, 忠清道, 江原道, 黄海道, 咸鏡南道に分布する。*mu-mjɔŋ* の変種と考えられる *mu-nɔŋ* は平安道に, *mu-njɔŋ* は京畿道北部と黄海道に, *mi-njɔŋ* は済州島, 京畿道北部, 黄海道に, *mi-mjɔŋ* は忠清道南部に分布する。

最も広く分布する語形は (1b) の *mi-iɔŋ* で, 全羅道, 慶尚道, 忠清道, 京畿道中部, 江原道沿岸部と北部, 咸鏡道に分布する。*mi-iɔŋ* の変種と考えられる *mi-iŋ* / *miŋ* / *mɛ-ɛŋ* / *mɛ-ɛŋ* / *mɛ-jɔŋ* は慶尚道に, *mjɔŋ* は慶尚北道北部と忠清北道北部に分布する。

複合語系の (2a) は全羅南道南部や慶尚南道南部に分布する。

その他の語形の (3a) は江原道南部の一地点 (平海) にのみ, 併用系として分布する。

4 文献上の記録

澤村東平 (1941: 8-9) では「朝鮮に於ける木綿布原料の生産に就いてわれわれの知ることの出来る最も古い記録は, 海東繹史第二十六巻にみえる木綿布 (中略) であらう」と指摘し, 文中の地名や書物の出所を根拠に, 「少くも唐代を遡ることは明らかである」と論ずる。中世語文献では『釈譜詳節』(1447) や『月印釈譜』(1459) に「木綿」が確認される。近代語文献でも「木綿」や「木棉」が確認される¹。例えば, 『捷解新語』(1676) や『酉年工夫』(1705), 「対馬宗家文書ハングル書簡類」では, 日本との木綿を巡る交渉の様子が描かれる²。対外的には対日貿易に, 国内的には徴税の手段として木綿は利用された。

(1a) の *mu-mjɔŋ* は, 16 世紀文献「順天金氏墓出土簡札」や『癸丑日記』(16--), 『西宮日記』(16--), 『玄風郭氏諺簡』(16--)『東国新続三綱行実図』(1617), 『丙子日記』(163-) などに見られ, 現代語文献に至るまで用例は多い。Witson と Eibokken による 17 世紀中葉の全羅南道方言を反映したと推定される単語資料にも *mumyŏng* という語形が見られる (F. Vos 1975: 34)。 *mu-mjɔŋ* の変種である *mu-njɔŋ* は『耶蘇聖教全書』(1887) に見られる。

(1b) の *mi-iɔŋ* は『韓英字典』(1897) や『毎日新聞』(1898) に見られる。

5 考察

무명 (木綿) は近世中国語からの借用語であるが, 『雅言覚非』(1819) に用例がある (李基文 1991: 223)。語形変化に関して『韓国語語源辞典』では, 木綿 [*mumian*] > *mu-mjɔn* > *mu-mjɔŋ* ように近代音を部分的に借用したと推定する。

小倉進平のデータは不規則な音変化を経たと考えられる様々な語形が見られる点が特徴

¹ 沢村東平 (1985: 10) によると, 1930 年代の朝鮮の棉作・綿業関係では, 「棉」は植物体または作物, 種子のついたわた, 棉花を繰ること, わたを繰りとった種子などに使用し, 「綿」は棉を繰りとった後のわたを表したという。現代中国語でも「棉」は植物を, 「綿」は繊維を主に表すようである。

² 日朝の木綿の交易に関して, F. Vos (1975: 29) では次のように記録する: In this country much silk is produced, but no foreigners buy it, for which reason it is very cheap. But by way of Sussima or Tussima there is now some trade with the Japanese, which is annoying to the Netherlands' silk-trade in Japan.

である。文献上の記録によると、mu-mjɔŋ の用例が中世語文献から現代語文献まで見られるので、mu-mjɔŋ を始点にして次のような語形の変化経路が想定される。

$$\begin{array}{lcl}
 \text{mu-mjɔŋ} & > & \text{mu-njɔŋ} & > & \text{mu-iɔŋ} \\
 & > & \text{mi-mjɔŋ} & > & \text{mi-njɔŋ} \\
 ((\text{mu} / \text{mi} \text{ の脱落}) \rightarrow \text{mjɔŋ}) & > & \text{mi-iɔŋ} & (> \text{mjɔŋ}) & \\
 & & & > & \text{mi-iŋ} & > & \text{miŋ} \\
 & & & > & \text{me-jɔŋ} & > & \text{me-eŋ} (\text{me-eŋ})
 \end{array}$$

ここで mi-iɔŋ は、mi-njɔŋ / mi-mjɔŋ > mi-iɔŋ のような変化と、mjɔŋ > mi-iɔŋ のような変化の 2 種類の変化経路が想定でき、同様に mjɔŋ は、mu-mjɔŋ / mi-mjɔŋ → mjɔŋ (mu / mi の脱落) のような変化と、mi-iɔŋ > mjɔŋ のような変化の 2 種類の変化経路が想定できる。

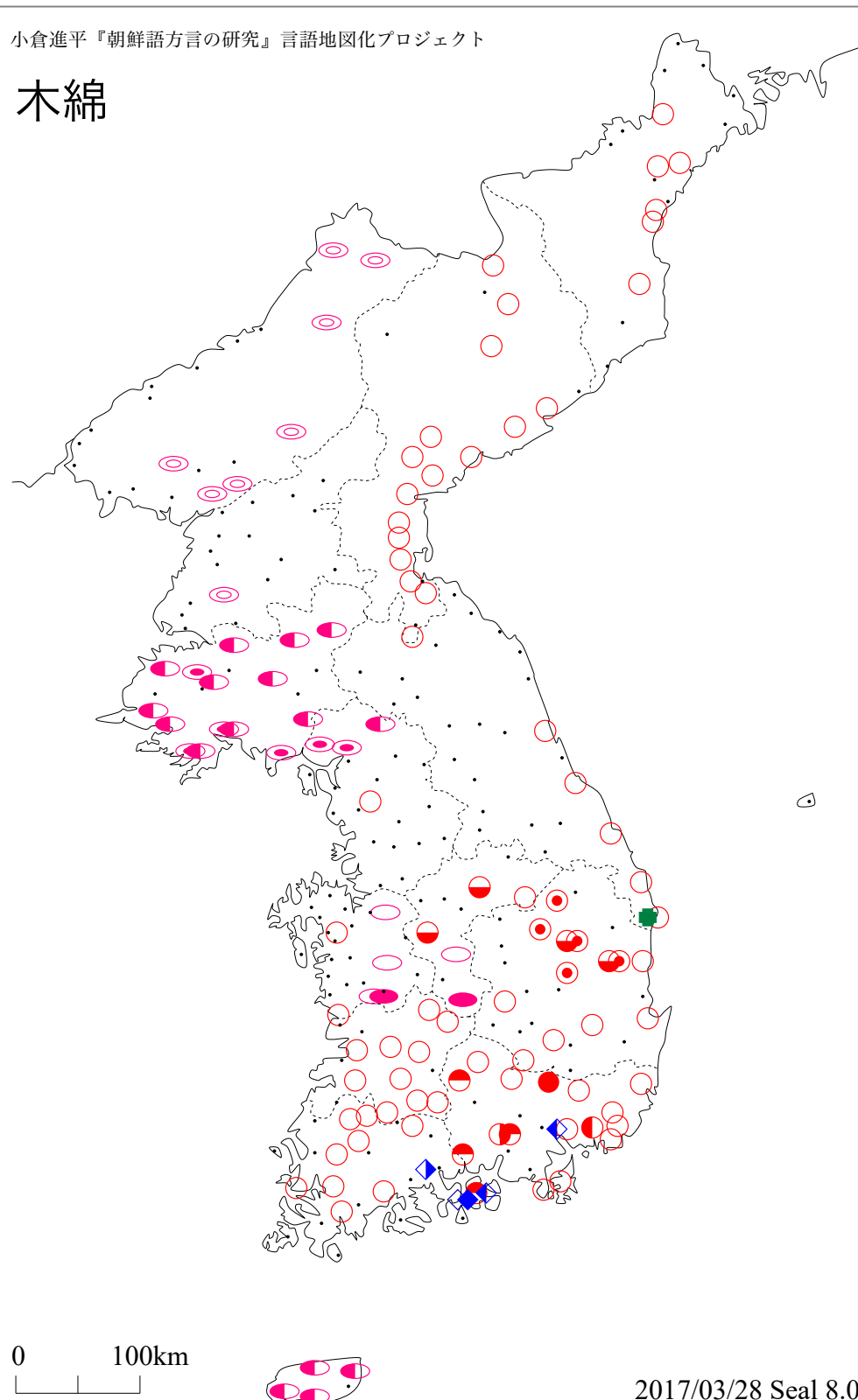
もう一つこの項目について問題となるのは、mu-mjɔŋ と mi-iɔŋ の関係である。mu-mjɔŋ は中世語文献から見られるが、mi-iɔŋ は中世語文献には見られず、19 世紀末の文献に見られる。よって、文献上の記録からは mu-mjɔŋ が古形であると考えられる。一方、mu-mjɔŋ は中央（忠清道）に分布し、その周辺（全羅道，慶尚道，忠清道，京畿道，江原道，咸鏡道）に mi-iɔŋ が広く見られる。よって、地理的分布からは mu-mjɔŋ と mi-iɔŋ は圏論的分布を成し、mi-iɔŋ が古形であるように見える。（ただし、小倉進平の記録でも『韓国方言辞典』でも平安道や黄海道では mi-iɔŋ は分布しない。）慶尚道では mi-iɔŋ の変種が多く見られるが、咸鏡道では mi-iɔŋ しか見られないので、mi-iɔŋ という語形が南部地方から咸鏡道に新たに伝わった可能性もある。ちなみに、木綿栽培は 15 世紀中葉まで全羅道，慶尚南道，慶尚北道南部，忠清道南部といった南部地方のみで行なわれていた（世宗実録地理志による）が、次第に北部地方まで拡大していったようである³。小倉進平の記録では mi-iɔŋ が最も広く見られるが、標準語普及の過程で mu-mjɔŋ が各地に浸透したと思われる。

参考文献

- 韓国精神文化院編（1987-1995）『韓国方言資料集』（全 9 巻）.
 金武林（2012）『韓国語語源辞典』ソウル：知識と教養.
 崔鶴根（1990）『韓国方言辞典』（増補版）ソウル：明文堂.
 澤村東平（1941）『朝鮮棉作綿業の生成と発展』京城：朝鮮纖維協会.
 沢村東平（1985）『近代朝鮮の棉作綿業』東京：未来社.
 李基文（1991）『国語語彙史研究』ソウル：東亜出版社.
 Vos, Frits（1975）Master Eibokken on Korea and the Korean language: supplementary remarks to Hamel's narrative. *Transactions of the Korea Branch of the Royal Asiatic Society* L: 7-42.

³ 澤村東平（1941: 34-57）及び沢村東平（1985: 13-26）による。また、澤村東平（1941: 56-57）によると、咸鏡道では宣祖朝以前のごく一時期に木綿が栽培されていたが、凶作により摩滅したという。同じく、黄海道や平安道は木綿の消費地であったという。

木綿



- mu-nŏŋ
- ◐ mu-njŏŋ
- mu-mjŏŋ
- ◐ mi-njŏŋ
- ◐ mi-mjŏŋ
- mi-iŏŋ
- mi-iŋ
- ◐ miŋ
- ◐ me-ŋ
- ◐ me-ŋ
- ◐ me--jŏŋ
- ◐ mjŏŋ
- ◐ mi-mjŏŋ pe
- ◐ miŋ-pe
- ◐ meŋ-be
- ◐ mjŏŋ-be
- mok-het
- NR

麻布

岩井 亮 雄

1 語形の分類

韓国の標準語は *pe* (배) であるが、これに当たる語は『朝鮮語方言の研究』の「服飾」に「麻布」という項目名で都合 5 個の語形が記録される (上: 151-152)。

これらの語形は、*pø* とその (母音の) 変種から成る。

(1) *pø* 系

(1a) *pɛ / pe / pø / pue / pi*

ここで *pue* は小倉進平の転写の原則によれば *pwe* と表記してもよいはずである。

2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、上記以外の語形として、『韓国方言辞典』には, *마재*, *배자*, *삼배*, *삼뵤* が、『韓国方言資料集』には, *sambɛ / meŋjibɛ / miyənbe / sambɛ / mosube* (全羅南道編), *pe-ji* (全羅北道編・忠清北道編), *minyən / miyən / sambe / myənju / p^hilmuk* (江原道編) が見られる。これらの語形は, *sam-be* (麻布) とその変種, 苧麻で織った布を意味する *mo-si-be* の変種, 芎の麻・木綿織物を意味する *p^hil-mok* (芎木) の変種, 木綿と関連がある語形, チョゴリの上に着る防寒具を意味する *pɛ-dʒa* (褸子) とその変種に大きく分けることができる。以下では小倉進平の記録に合わせて転写する。

(2) *sam-bɛ / sam-be / sam-bɛ / sam-bø*

(3) *mo-su-bɛ / mo-si-be*

(4) *p^hil-muk*

(5) *mi-jən-bɛ / mi-njən / mi-jən / mjən-dʒu / meŋ-dʒi-bɛ*

(6) *pa-dʒɛ / pɛ-dʒa / pe-dʒi*

3 地理的分布

pɛ は全羅道, 慶尚道, 黄海道北部, 咸鏡道, 平安道に分布する。*pe* は済州島, 全羅道, 慶尚道, 忠清道, 京畿道, 江原道, 黄海道, 咸鏡南道南部, 咸鏡南北道の道境付近に分布する。*pɛ* は朝鮮半島の南北地域を中心に, *pe* は朝鮮半島の中部地域を中心に見られる。*pø* は黄海道と咸鏡道に見られる。*pue* (= *pwe*) は咸鏡北道の一地点 (富居) にだけ見られる。*pi* は慶尚道に見られる。

小倉進平の記録による *pɛ* (と *pe*) の地理的分布を他の記録と比べると, 若干の違いが見

られる。『韓国方言辞典』には $p\epsilon$ が黄海道 (1 地点), 咸鏡北道, 咸鏡南道 (1 地点), 平安南道 (1 地点), 平安北道に見られ, 全羅道や慶尚道には見られない。全羅道と慶尚道では, $p\theta$ が全羅北道 (1 地点), pi が慶尚北道 (3 地点) に見られる。『韓国方言資料集』には全羅道と慶尚道の多くの地点で ϵ と e が区別されていない pE という語形が見られる。

4 文献上の記録

文献上で確認できる最も古い語形は ㅍ ($p\theta$) であり, 『釈譜詳節』(1447), 『月印釈譜』(1459), 『翻訳小学』(1518), 『訓蒙字会』(1527), 『光州千字文』(1575), 『新增類合』(1576), 『石峯千字文』(1583), 『小学諺解』(1588) などに用例が見られる。具体的には以下のようである。

갓블와 옷과 ㅍ 와로 佛像을 꾸미스바도 <1477 釈譜詳節 13:52a>

김과 ㅍ 와를 통통케 햅엇거니와 <1459 月印釈譜 25:18a>

ㅍ 일천 필 받고 <1518 翻訳小学 9:43a>

布 ㅍ 포 <1527 訓蒙字会中 15a, 1575 光州千字文 39a, 1576 新增類合 26a, 1583 石峯千字文 39a>

ㅍ 일천 疋을 마닷더니 <1588 小学諺解 6:39a>

『李朝語辞典』には見出し語として ㅍ (θ) という語形も挙がっている。 ㅍ (θ) の用例は『翻訳朴通事』(1517) に見られるが, 同書には ㅍ ($p\theta$) の用例も見られる。具体的には以下のようである。

백 모시 ㅍ [白毛施布] <1517 翻訳朴通事 51b>

누른 모시 ㅍ [黄毛施布] <1517 翻訳朴通事 51b>

ㅍ ($p\epsilon$) が見られだすのは 20 世紀前半の文献からのようである。『部別千字文』(1913) や『初学要選』(1918) に用例が見られる。『筆写本古語大辞典』には ㅍ ($p\theta$) の異形態として ㅍ ($p\epsilon$), ㅍ (pje), ㅍ ($p\epsilon / p\epsilon$) という語形が見出し語として挙がっている。

5 考察

現代語の $p\epsilon$ (布) は古語では $p\theta$ や θ に当たる。『韓国語語源辞典』では, 布 [pua / pu] > $p\theta$ > $p\epsilon$ のように, 中世語の $p\theta$ (布) は漢語の上古音 [pua] や中古音 [pu] に由来すると推定する。『朝鮮漢字音研究』によると, 「布」の朝鮮漢字音は [po] と [p^ho] (有気音) の 2 種の代表音があり, 共に上声である。『比較言語学的語源辞典』では, 中世語の $p\theta$ (布) は bos (Gily), $b\ddot{o}z$ (Turk), $boso$ (Ma), $b\ddot{u}s$ (W. Mo) などと比較でき, 直接的にはアルタイ共通基語 $*b\ddot{o}z$ と対応するとし, $*b\ddot{o}z$ > $po\ddot{z}$ > poy > $p\ddot{o}$ (ㅍ) > $p\epsilon$ (ㅍ)

のような語形の変化経路を推定する。

母音 ø について、小倉進平 (1931: 147) は「此の외 (ø) 音は地域によつては発音が困難で, 외 (we)・외 (wε)・애 (ε)・에 (e) 其の他に転訛することが稀でない」と指摘する。 pø においては, ø が中部地方北部地域 (黄海道, 咸鏡道の一部) で保存されており, この周辺地域に $\text{pε} / \text{pe} / \text{pi}$ が見られる。北部地方 (平安道, 咸鏡道の一部) で $\text{pø} > \text{pε}$, 中部地方 (忠清道, 京畿道, 江原道, 黄海道の一部) と済州島で $\text{pø} > \text{pe}$, 南部地方 (全羅道, 慶尚道) で $\text{pø} > \text{pe} / \text{pε} (\text{pE}) > \text{pi}$ のように変化したと考えられる。こうした点を考慮に入れて pø 系の語形の変化経路を推定すると, 次のようである。

$$\begin{aligned} \text{pø} &> \text{pe} > \text{pi} \\ &> \text{pε} \\ &> \text{pue} (= \text{pwe}) \end{aligned}$$

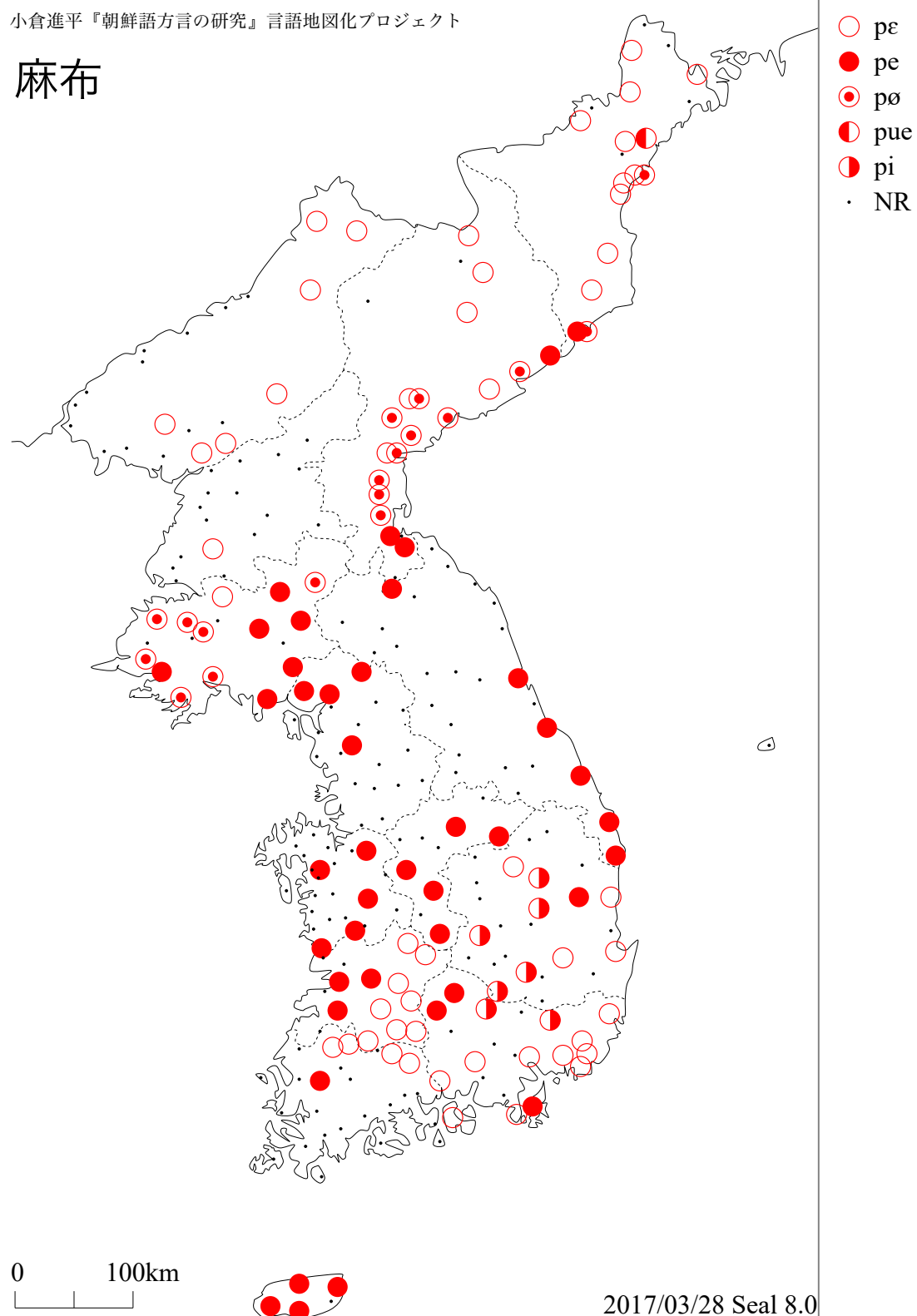
ここで $\text{pue} (= \text{pwe})$ は咸鏡北道の一地点 (富居) にのみ現れる語形であるので, 独自の音変化を経たように見えるが, $\text{ø} > \text{we}$ のような変化自体は決して奇異ではない。また, 平安道や咸鏡道では母音 ø が $\text{ø} > \text{ε}$ のように (非円唇前舌) 半広母音に変化していることが注目される。

小倉進平の記録には pø 系の都合 5 種の語形しか見られないが, 他の方言辞典などには (2) ~ (6) のような語形も見られる。小倉進平の調査ではこれら 5 種の語形しか観察されなかった可能性もあるが, いろいろな語形が見られた中から pø とその (母音の) 変種だけに注目して記録している可能性もある。また, (2) ~ (6) の語形の分布には地域差があるので, 麻布 (布) と言ったときに何を指すかに地域差があると考えられる。ちなみに, 麻は李朝初期には全道的に分布していたようである (澤村東平 1941: 50)。

参考文献

- 伊藤智ゆき (2007) 『朝鮮漢字音研究』 (資料編) 東京: 汲古書院.
小倉進平 (1931) 「朝鮮語母音の記号表記法について」『音声の研究』 4: 139-149.
韓国精神文化院編 (1987-1995) 『韓国語方言資料集』 (全 9 巻).
姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』ソウル: 韓国文化社.
金武林 (2012) 『韓国語語源辞典』ソウル: 知識と教養.
崔鶴根 (1990) 『韓国方言辞典』 (増補版) ソウル: 明文堂.
澤村東平 (1941) 『朝鮮棉作綿業の生成と発展』京城: 朝鮮繊維協会.
朴在淵 (2010) 『筆写本古語大辞典』 (全 7 巻) ソウル: 学古房.
劉昌淳 (1964) 『李朝語辞典』ソウル: 延世大学校出版部.

麻布



漬物

張 河 林

1 はじめに

韓国の標準語は kim-tʃi (김치)であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「飲食」に「漬物 (つけもの)」という項目名で6種記録されている (上: 161-162)。

これらの語形は, 'tʃim' が含まれるものとその変化形と思われる 'kim' が含まれるもの, それらが含まれず, 代わりに 'tʃi' を含むもの, そして(1), (2)と全く形が異なる 'ʔkak-tu-gi' の3つのグループに大きく分けることができる。

(1) tʃim-tʃi 系

(1a) tʃim-tʃi

(1b) tʃim-ʔki

(1c) kim-tʃi

(2) tʃi 系

(2a) tʃi

(2b) ʔʃan-dʒi

(3) ʔkak-tu-gi

2 その他の語形

これ以外の語形として『標準国語大辞典』には금치, 덩치, 짐채がみられる。금치는京畿道, 덩치는平安道, 짐채は全羅南道・咸鏡北道の方言と記されているがこれらは全て tʃim-tʃi 系といえる。

一方, ʔkak-tu-gi はより多くの語形がみられるが, tʃim-tʃi 系と tʃi 系に関連があると思われる語形だけ挙げると간동지, 나박김치, 나박디, 똑똑지, 똑딱지, 무시김치, 서빱지, 쪼가리김치, 쪼박김치, 추런짬지, 무김치, 쪼각지가挙げられる。

3 地理的分布

ソウルでは大根で作った漬物を示す(3) ʔkak-tu-gi は咸鏡南道の北青にのみ現れる。(2a) tʃi は主に全羅道で, (2b) ʔʃan-dʒi は咸鏡南道と黄海道の安岳で確認できる。

その一方で, (1a) tʃim-tʃi は慶尚道を中心として, 忠清道, 江原道, 全羅道, 済州島, 咸鏡南道にみられる。現代韓国の標準語とされる(1c) kim-tʃi は黄海道, 京畿道と咸鏡北道に多くみられ, その他に江原道, 忠清南道, 慶尚北道にも見られる。(1b) tʃim-ʔki は済州島の城山, 西歸, 大靜にのみ現れる。

一見、中間に新しい語形が分布する A-B-A 型の分布に見えるが、これについては文献上の記録とつきあわせて考える必要である。

4 文献上の記録

kim-tʃi の古い形として韓国のキムチ冷蔵庫の名前である딴치が人々に知られているが、古くは漬物を示す用語として디히が使われた時期もあった。『杜詩諺解』(1481), 『家礼諺解』(1632), 『翻譯朴通事』(16世紀)などで確認できる。

長安엿 겨웁 디히는 식오 쏘 꼭꼭고 <1481 杜詩諺解 3:50b>

다몬 도흔 장엿디히 밥하야 먹다가 <1517 翻譯朴通事 上 55b>

豆는 디히 젓 담는 목괴라 <1632 家礼諺解 10:12>

디히については李基文(1991)で詳しく述べられている。それによると、漬物を示す語としてディヒが使われてきたが、15世紀以前のある時期に「딴치 沈菜」が現れ代替されたという。디히を딩-から派生した名詞と推測し、딩-は自動詞디-の使役形であろうとしている。そしてこの딩-が沈菜の「沈」の意味ではないかとみている。

それではなぜ「디히」は「沈菜」に代替されたのだろうか。李基文(1991)は沈菜を韓国で作られた漢字語とみている。디히の音相の問題、即ち「ㅎ」の弱化により名詞としての独立性が脅かされ複合語でしか存在できなくなったのではないかと推測している。

디히の代替語と思われる딴치는『訓蒙字会』(1527), 『新增類合』(1576)などで確認できる。

菹 딴치 조 <1527 訓蒙字会 中 11a>

菹 딴치 저 <1576 新增類合 上 30a>

また딴치는『小学諺解』(1588), 『倭語類解』(178-)などでは딴치という形でも記録されている。

술와 촌믈과 대그릇과 나모 그릇과 딴치와 저술 드러 <1588 小学諺解 1: 7a>

菹 딴치 조 <178- 倭語類解 上 47b>

「딴치」は16世紀の字音をそのまま反映し、「딴치」はそれより古い形といえる。딴치는口蓋音化し침치となり、そしてまた침치と変化し今日の김치となったと思われる。「딴치」は「침채」となり祭祀の供え物として残っている。

一方、李基文(1991)では「디히」と「沈菜」の語形変化についての意見も確認できる。디히が沈菜に代替されたとはいえ、디히の痕跡は現代の韓国語にも残っている。디히の디に口蓋音化が起こり지になり、それが짬지, 오이지の形で残っている。西北方言では口蓋音化も起

こらず짬디, 오이디の形で残っている。

5 考察

以上の内容を踏まえ『朝鮮語方言の研究』の語形を古い順から並べると次のようになるだろう。

ti-hi > ti > tʃi → ʔʃan-dʒi
tim- tsʰʌi > tʃim-tʃʰii > tʃim-tʃʰi
→ kim-tʃʰii > kim-tʃʰi
→ tʃim-ʔki

(>は規則的な音変化を, →はそれ以外の変化(他の形態素の付加, ハーパーコレクション, 音韻転倒など)を表わす。)

それではなぜこのような語形変化が起こったのだろうか。こうした変化の中で, ʔimがʃimになるような, 口蓋音化は韓国語では17世紀から起きた自然な音変化である。しかし, ʃimがʃimになるのは自然ではない。「ʃim」が「ʃim」になった原因は, 李基文(1991), 김지숙・홍기옥 (2009), 강용중 (2012)などの先行研究でも指摘されるように, 一部の方言で起きていた ki の口蓋音化に対するハイパーコレクション(過剰修正)であったと考えられる。

なお, この項目で登場した ʔkak-tu-gi については, 漬物のことを ʔkak-tu-gi のみで表現する地域はなかったため, これが他の語形と同じものを指しているとは考えにくいのではないだろうか。ʔkak-tu-gi は主に大根で作った漬物を示す言葉で, 漬物の下位概念と思われる。ʔkak-tu-gi についてはまた別の考察が必要である。

参考文献

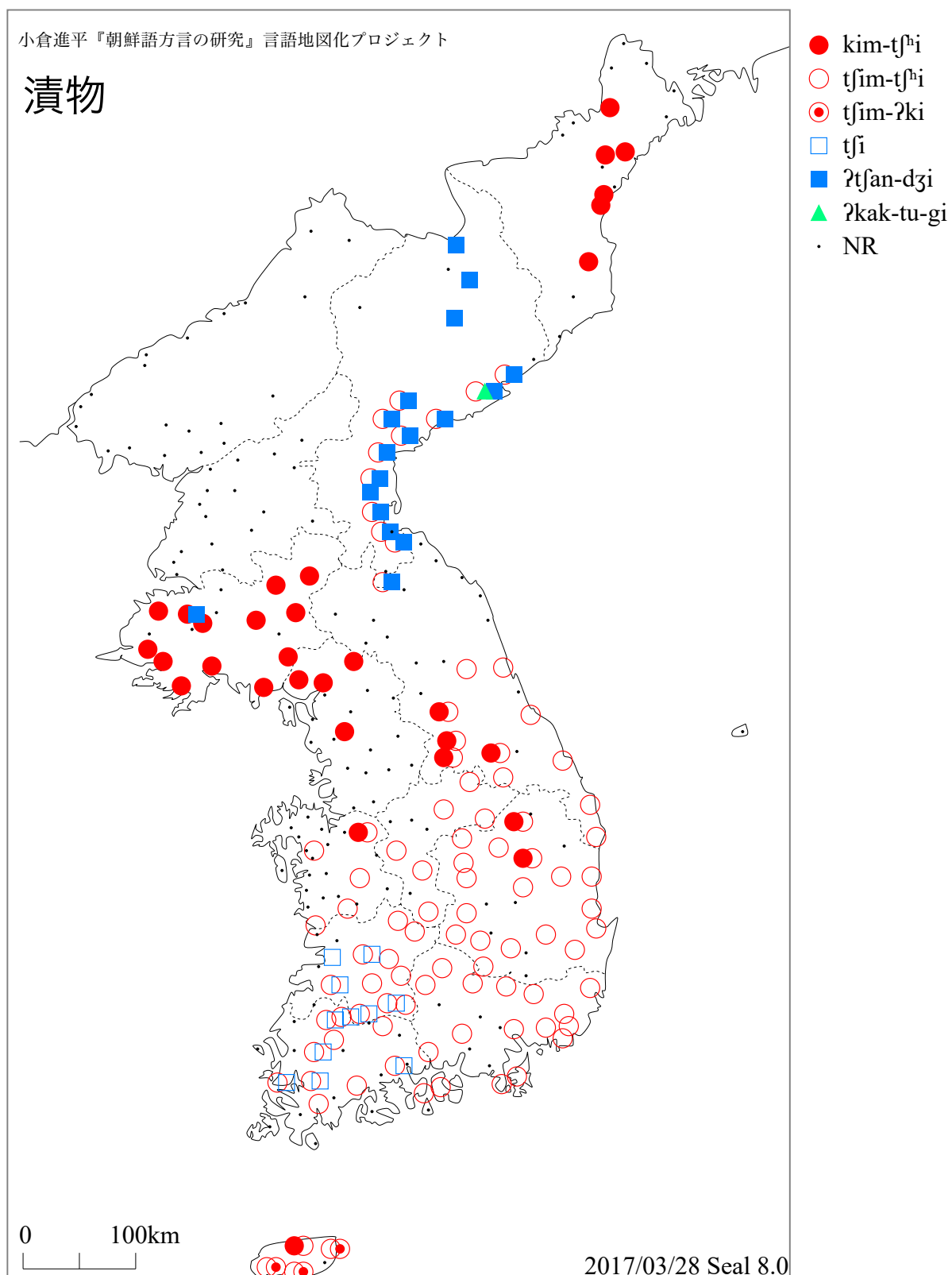
金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル: 太学社.

李基文 (1991) 『国語語彙史研究』 ソウル: 東亜出版社.

강용중 (2012) 「한중 양국의 김치 관련 어휘의 비교를 통해본 우리말 ‘김치’의 어원 연구 – 김치(沈菜)의 ‘沈’을 중심으로」 『중어중문학회』 53: 417-446. 중어중문학회.

김지숙・홍기옥 (2009) 「김치 관련 명칭 연구-경북과 경남의 비교를 중심으로」 『한민족어문학』 131-164.

漬物



箕(み)

徐 叡 廷

1 語形の分類

韓国語の標準語は $k^h i$ (키) であるが、『朝鮮語方言の研究』の「農耕」に「箕」という項目で以下の 9 種の語形が記録されている(上: 180–181)。これらの語形は語頭子音を基準に、 $k^h i$ 系と $t^h i$ 系に分類することができる。

(1) $k^h i$ 系

(1a) $k^h i$, (1b) $k^h i-{}^2t^h ak$

(2) $t^h i$ 系

(2a) $t^h i / t^h e$

(2b) $t^h e\eta-i / t^h e\eta-i / t^h i\eta-i / t^h i-i$

(3) $p^h u-nin-t^h e$

$t^h i$ は $k^h i$ が口蓋音化したものだと考えられる。 $k^h i$ 系には $k^h i$ と、第 2 音節に ${}^2t^h ak$ が付いた語形が、 $t^h i$ 系には $t^h i$ と、 $t^h i$ の後ろに接尾辞 $-e\eta-i$ などが付いた語形、また母音が e である語形 $t^h e$ がある。最後に $t^h e$ の前に $p^h u-nin$ が付いた語形 $p^h u-nin-t^h e$ がある。『韓国言語地図』では、 $k^h i/t^h i$ と、 $k^h i/t^h i$ の後部に接尾辞 $-e\eta-i$ の付いた語形に分類することもできると述べている。これを考慮し、地図には $k^h i$ 系と $t^h i$ 系は各々類似した記号で示すが、語形 $k^h i$ と $t^h i$ は塗りつぶしの記号で示す。

2 その他の語形

『韓国言語地図』では、키, 치, 첩이, 칭이, 켜이, 체, 푸는체 の 7 種の語形が挙げられており、その中、慶尚北道の一部(奉化, 英陽, 盈徳)で分布しているとされている 켜이 は、『朝鮮語方言の研究』では見られない語形である。また語形 칭이 も一か所で見られたが、첩이 に含めて処理したと述べている。첩이 に関しては、『朝鮮語方言の研究』では母音 e と ε を区別して $t^h e\eta-i$ と $t^h \varepsilon\eta-i$ を別の語形として挙げているが、『韓国言語地図』では区別していないと思われる。

3 語形の分布

$k^h i$ 系は主に朝鮮半島の西北部を中心に分布している。 $k^h i$ は慶尚北道と忠清南道, 忠清北道の各々の 1 か所に分布し、他に京畿道, 黄海道, 咸鏡北道, 平安道に分布している。 $k^h i-{}^2t^h ak$ は黄海道に分布している。

これに対し, tʰi 系は朝鮮半島の南部及び東部と東北部の沿岸を中心に分布している。tʰi は全羅道, 慶尚北道の一部, 忠清道, 江原道, 咸鏡道に分布している。tʰeŋ-i は全羅道, tʰeŋ-i は全羅道, 慶尚道と忠清北道の一部に分布している。tʰiŋ-i は全羅南道の一部と慶尚道に分布しており, tʰiŋ-i から第1音節の末音 ŋ が脱落したと考えられる tʰi-i は慶尚道の一か所に分布している。tʰe は全羅南道の一部と済州島に分布し, また pʰu-nin-tʰe が済州島のみ分布している。

なお, 上述のごとく, 『韓国言語地図』によると kʰi/tʰi と kʰi/tʰi の後部に接尾辞 -eŋ-i などが付いた語形に二分することもでき, kʰi/tʰi 系と -eŋ-i 系は韓国を東南と西北に両分することになっていると述べている。『韓国言語地図』では朝鮮半島の北の方は対象としていないが, 『朝鮮語方言の研究』の分布においても, この解釈は当てはまると考えられる。また, 『韓国言語地図』では켄이が tʰi 系の地域である慶尚北道の一部で見られることを疑問としているが, これに関しては, 『朝鮮語方言の研究』で語形 kʰi が켄이의分布地域に隣接して見られることと何らかの関係があるかもしれない。

4 文献上の記録

kʰi 系の古い語形は키で, 『訓民正音解例』(1446), 『訓蒙字會』(1527), 『四聲通解』(1517), 『漢清文鑑』(1775)などの文献で見られる:

키 為箕 <1446 訓民正音解例>

키 𪛗(箕) <1527 訓蒙字會 中 11>, <1576 新增類合 上 28>

키(箕箕) <1517 四聲通解>, <174 同文類解 下 2>, <1775 漢清文鑑 296a>

また, 口蓋音化を起こした tʰi 系の最も古い用例は 17 世紀の『음식디미방 상화법』に見られる。

두 불 지허 열령이 젓마리 다 치 즈고 <17世紀 음식디미방 상화법 2a>

鮮文大学校 中韓翻訳文献研究所(2010)では, 치の項目で, 「現代語「키」はㄷ口蓋音化に類推された「치」の過渡矯正型」と述べているが, 文献上の記録の年代から, kʰi が古い形であり, kʰi が口蓋音化して語形 tʰi が現れたと解釈するのが正しいと考えられる。

5 考察

李秉根・崔明玉(1997)によると, ㄷ系の子音が口蓋音になる「ㄷ口蓋音化」は主に東南方言(慶尚道方言), 西南方言(全羅道方言)で起こる現象であるが, 箕の語形の分布においては, 全羅道, 慶尚道のみならず, 江原道, 咸鏡道でも口蓋音化した語形が見られる。但し, 咸鏡北道では tʰi と共に kʰi も見られ, 新しい語形と古い語形が共存している。

tʰi 系の中で tʰeŋ-i, tʰeŋ-i は口蓋音化した tʰi に -eŋ-i/eŋ-i が結合したものと考えられ、さらに eŋ-i/eŋ-i は接尾辞 '-aŋ-i' の前舌母音化(ウムラウト)した変種であると考えられる。また tʰiŋ-i は、第2音節の母音 i の影響によって、-eŋ-i/eŋ-i の第1音節の母音が高母音化したものと、tʰi-i は tʰiŋ-i から第1音節の ŋ が脱して分化したものと推定される。『韓国言語地図』で挙げられている語形 ㄱ이 に関して口蓋音化を経ていない古い語形 kʰi に接尾辞 eŋ-i が結合したと考えられる。想定される kʰi の語形変化をまとめると、以下のとおりである¹。

$$\begin{aligned} kʰi > tʰi &\rightarrow tʰeŋ-i/tʰeŋ-i > tʰiŋ-i > tʰi-i \\ &> tʰe &\rightarrow pʰu-nin-tʰe \\ &\rightarrow kʰi-ʔtʰak \end{aligned}$$

tʰe は全羅南道の一部でしか現れない語形であるが、tʰeŋ-i の分布地域と隣接していることから、tʰeŋ-i から ŋ-i が脱落したものと考えられる²。この tʰe が済州島に渡り、tʰe の前に動詞 pʰu- の連体形が結合し pʰu-nin-tʰe が現れたと考えられる。国立国語研究院編(1999)によると、pʰu- は「箕を上下に振り、穀物のくずや草などを取り払う」という意味の 𪎐 𪎐 𪎐 の済州島方言である。

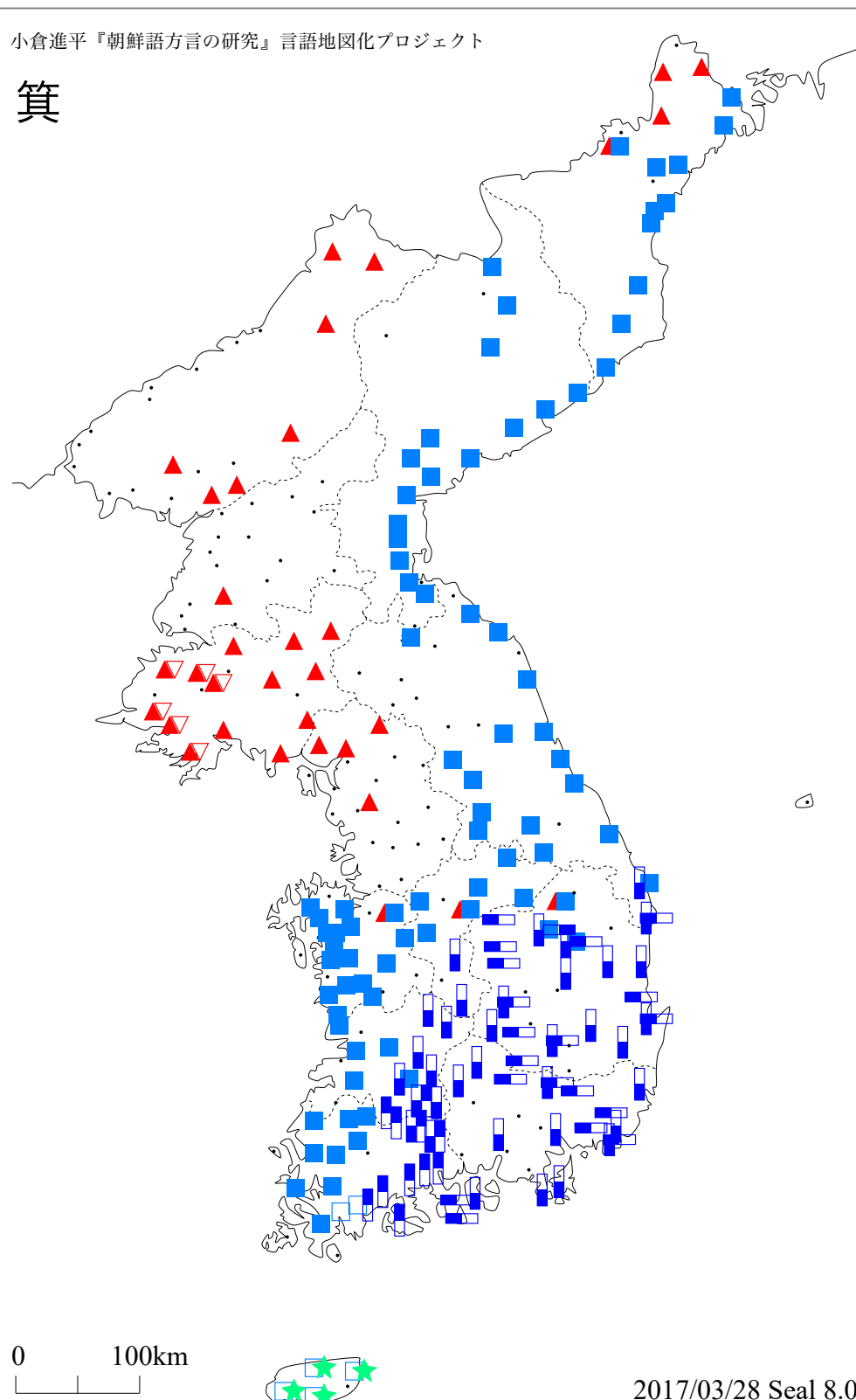
参考文献

- 李秉根・崔明玉(1997)『国語音韻論』ソウル：韓国放送大学校出版部。
 金成烈(2001)『国語方言研究』ソウル：国語資料院。
 国立国語研究院編(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜。
 鮮文大学校 中韓翻訳文献研究所(2010)『筆写本古語大辞典』ソウル：学古房。
 崔明玉(2004)『国語音韻論』ソウル：太学社。
 崔明玉(2015)『韓国語의 方言』世昌出版社。

¹ 「>」は音韻変化、「→」は接尾辞の付加などによる語形変化を表す。

² tʰe は tʰi の分布地域とも隣接して分布しているため、tʰi の母 i が e に変化した可能性も考えられるが、金成烈(2001)によると、前舌母音化が一般的な変化であり、이 から ㅐ への変化(i→E)のような後舌母音化は慶尚道尙州方言に限って見られる特殊な変化である。

箕



石臼

林 茶 英

1 はじめに

韓国の標準語は hoak (斛) である。『朝鮮語方言の研究』(上: 181–182) にはこれにあたる語が 7 種記録されているが、これらは ho-bak 系と hoak 系に分かれる。

(1) ho-bak 系

(1a) ho-bak

(1b) ho-be-gi

(2) hoak¹系

(2a) hoak, hok

(2b) hoak-tok, hak-tok

(2c) hak-to-gi

(1) の ho-bak 系には、ho-bak と (1a) に接尾辞 ‘-i’ が付いて変化したと思われる ho-be-gi がある。(2) の hoak 系は、単音節の語形、(2b) に ‘tok’ が付いた語形、(2c) にさらに接尾辞 ‘-i’ が付いた語形に分かれる²。

2 地理的分布

(1a) は慶尚南北道、咸鏡南北道に主に分布し、江原道の 3 地点にも見られる。(1b) は慶南の東萊や咸鏡南北道の 2 地点ずつに分布する。(2a) の hoak は最も広い地域に分布するが、全羅南道、黄海道、咸鏡南道、平安北道の広い範囲にかけて分布し、全羅北道の 3 地点、忠清南北道や京畿道及び平安南道の 1 地点ずつ、江原道の 2 地点に見られる。また、(2a) の hok は全羅南道の済州地域に見られる。(2b) の hoak-tok は全羅南道だけに分布し、hak-tok は忠南江景に見られる。(2c) は忠南舒川に見られる。

石臼の語形の地理的分布を見ると、ho-bak 系と hoak 系が東西を両分して分布しているということが分かる。つまり、ho-bak 系は東部の慶尚道、咸鏡道を中心に分布する反面、hoak 系の場合、咸鏡南道に若干見られるが、主に西部の全羅道、忠清道、平安道を中心に分布する。しかし、江原道の場合、ho-bak 系と hoak 系が両方見られるのが特徴である。

¹ 中声「斗」を「oa」をもって表記したのは古書の綴字を示すためであり、この中声の現代発音記号は [wa] である。

² 『朝鮮語方言の研究』(上 182) には、これ以外の語形として、met-tol や maj が見られるが、met-tol は京畿道長湍や蓮川地域に分布し、maj は黄海道の一部の地域に分布すると述べた。また、丹陽では hoak が水車の意味で用いられているという。

3 文献上の記録

文献上確認できる語形には hoak (학)及び hoak の古い語形と考えられる hΛ-wak (호학), ho-wak (호학), ho-ak (호학)がある。また、臼に石を意味する tol (돌)がついた合成語である tol-hoak も見られる。まず hΛ-wak が見られる最も古い文献は『月印積譜』(1459)である。次に、ho-wak は『訓蒙字会』(1527),『新增類合』(1576)に見られ、ho-ak は『類合(七長寺版)』(1664)に見られる。また、標準語である hoak が見られる最も古い文献は『類合』(1700)であり、tol-hoak は『韓仏字典』(1880)に見られる。その用例は次の通りである。

衆生이 호학 소배 이서 <1459 月印積譜 23:78b>

臼 호학 구 <1527 訓蒙字会 中 6b>

臼 호학 구 <1576 新增類合 上 27b>

호학 구 (臼) <1664 類合七長寺版>

臼 학 구 <1700 類合>

돌학 石臼 <1880 韓仏字典>

4 考察

まず、(1)の ho-bak については、河野六郎は『朝鮮方言学試攷』(1945)において hoak の原形が ho-bak (호박)であり、ho-bak の bak (박)が瓢瓜を意味すると述べ、hoak の語形が次のように変化したと推定した。

ho-bak > ho-βak > ho-wak

つまり、上述した7つの語形のうち ho-bak が最も古い語形と考えている。しかし、文献で確認できる hΛ-wak まを含めて考えれば、*hΛ-bak という語形が存在した可能性もありうると思われる。つまり、*hΛ-bak の第1音節が第2音節に影響され、ho-bak になったと考えるのがより自然に思われるのである。

次に(1)の ho-be-gi は ho-bak に接尾辞 ‘-i’ がついて、ho-bak-i になり、bak が後の母音 i に影響され be になったと思われる。上で述べたように(2a)の hoak は河野六郎(1945)によれば、ho-bak が変化して ho-wak になり、それが縮約した形のように思われるが、もし、*hΛ-bak という語形が存在したと仮定すれば、次のような変化が仮定できる。

hΛ-bak > hΛ-βak > hΛ-wak > ho-wak > hoak

(2a)の hok は hoak が縮約した形と考えられる。(2b)は(2a)に ‘tok’ がついた語形である。tok は石(tol)の方言形と思われるが、tol の方言形を見ると、(2b)や(2c)が分布するほとんどすべての地域に tok が分布している。ただし、済州には tol が見られる。hak-tok の、hak とい

う語形が残っていないのを根拠にすれば, おそらく hoak-tok という語形が生じた後, 第1音節の hoak が縮約して hak-tok になったと考えるのが自然であろう。(2c)の hak-to-gi は hak-tok に接尾辞 ‘-i’ がついた語形である。

以上の説明をまとめると, hoak (石臼)の語形変化は次のように想定できる。

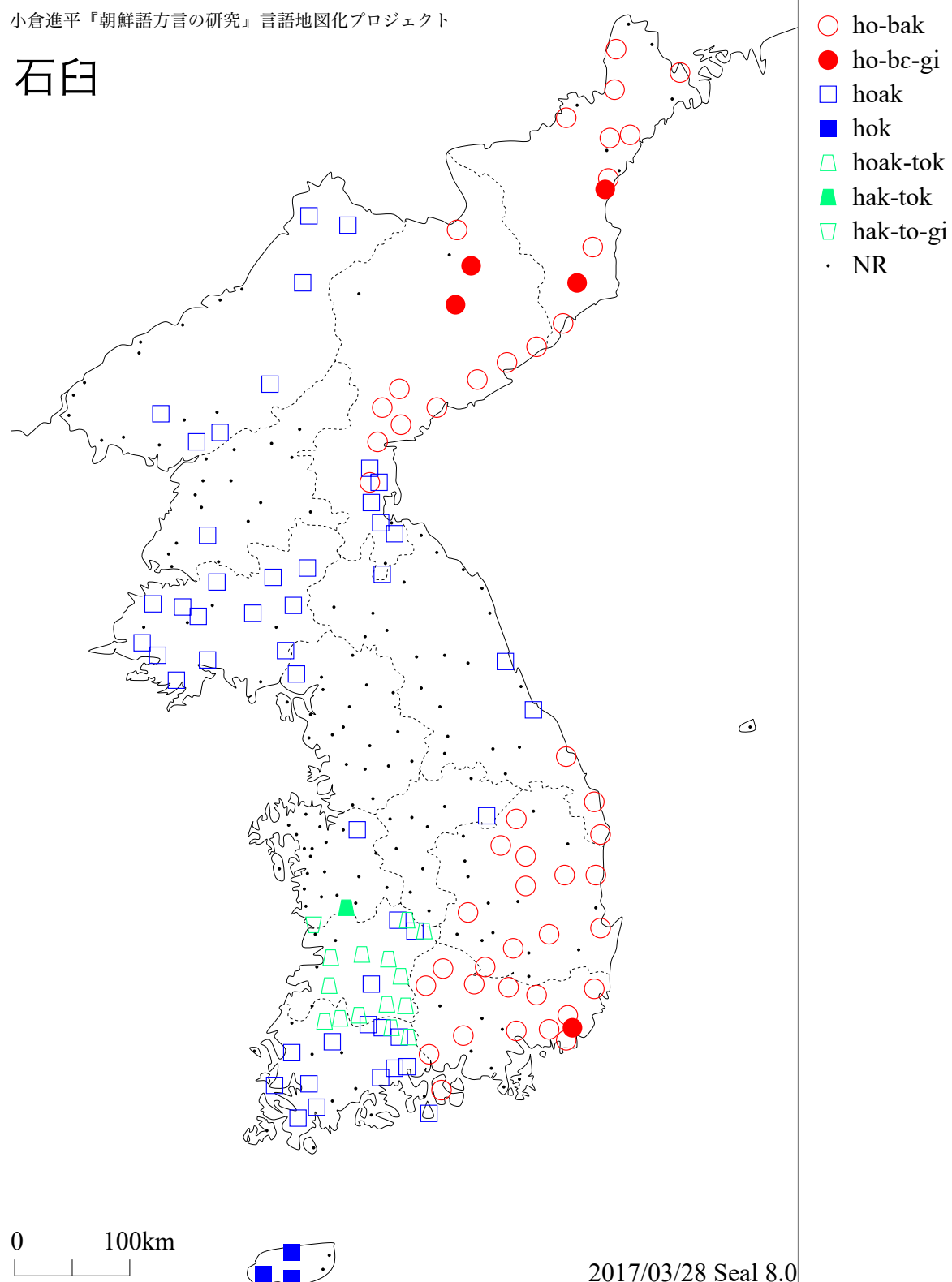
*h_Λ-bak > ho-bak > ho-bɛ-gi
> h_Λ-wak(?³) > ho-wak(?) > hoak > hok
> hoak-tok > hak-tok > hak-to-gi

参考文献

河野六郎(1945)「朝鮮方言学試攷一「鋏」語考一」京城帝国大学文学会論纂 11. 東京書籍京城支店. (『河野六郎著作集』(1979: 101-373) 所収 平凡社)

³ (?)のしるしは文献に見られるが, 現在は用いられない語形を示す。

石臼



百合の花

鮑 潤 叙

1 はじめに

韓国語の標準語は *pek-hap ʔkot* (백합 꽃) と *na-ri ʔkot* (나리 꽃) であり、『標準国語大辞典』では「鬼百合と百合の花 (筆者訳)」と記録している。ここに当たる語は『朝鮮語方言の研究』(上: 186-187) の「花果」に「百合の花」と言う項目名で以下の 11 種が記録されている。これらは次のように 7 種類に分けられる。

- (1) *kɛ-na-ri ʔkot*
- (2) *na-ri ʔkot* / *na-ra ʔkot* / *na-rɛ ʔkot*
- (3) *na-bal ʔkot* / *na-pʰal ʔkot*
- (4) *pek-hap* が含まれるもの
pek-hap ʔkot / *pek-ha-bi*
- (5) *hoŋ-ap ʔkot*
- (6) *mal-mɛŋ-i*
- (7) *ju-ri*

(1)は現代語で「連翹」の意味である。(3)は現代語で「朝顔」の意味であり、(2)と(4)は「百合の花」を意味する。(5)と(6)は「百合の花」の方言形で、(7)は日本語と関連があるのではないかと考えられる。

2 その他の語形

この他に、崔鶴根 (1978)では(2)に近い 나리 と 나:리 , (4)의 백합 のような語形もある。また、済州島の城山では(6)の近い 말매이 [*malmɛŋ-i*] のような語形もあげられる。さらに、慶尚北道の盈徳地域では 산나리 のような語形もある。

3 地理的分布

これらの語形の地理的分布は次のようになっている。

まず、この項目は咸鏡北道においては調査されていない。

(1) *kɛ-na-ri ʔkot* は主に黄海道に分布している。江原道の中南部の沿岸地域、慶尚北道に数地点分布している。平安北道、京畿道、忠清道、全羅道にも見られる。

(2)において na-ra ʔkot は慶尚南道, na-re ʔkot は全羅道, 慶尚道に分布し, na-ri ʔkot は咸鏡道, 平安道, 全羅道, 慶尚道に分布している。

(3)は忠清道だけに分布している。na-bal ʔkot は忠清北道の中部と忠清南道の南部に分布し, na-phal ʔkot は忠清南道の北部と中部地域に 1 地点ずつ分布している。

(4)は主に濟州島に分布している。pek-hap ʔkot は京畿道, 全羅道, 濟州島に分布している。pek-ha-bi は濟州島に分布している。

その他の語形はすべて 1 地点だけ記録されている。(5) hoŋ-ap ʔkot は慶尚南道の東地域に 1 地点あり, (6) mal-məŋ-i は濟州島の東北地域に 1 地点, (7) ju-ri は慶尚南道の東北地域に 1 地点がある。

4 文献上の記録

(1)の ke-na-ri 系の用例は次に示すように『救急簡易方諺解』(1489)に見られるものがもっとも古く, 次いで 17 世紀初頭の例がいくつか見られる。

개나릿 불휘를 디허 브티라 (擣百合根傳之) <1489 救急簡易方諺解 3: 31b>

百合 개나리 불휘 <1613 東医宝鑑 3: 5a>

なお, 世宗大王記念事業会の訳注本『救急簡易方諺解 3』(2008: 213)には, 上記の用例の 개나리에注釈が付けられているが, その内容は「連翹」に関する記述になっている。しかし, 上記の用例は対応する漢文が「百合」であることから分かるように, 現代語の개나리すなわち連翹ではなく, 明らかに百合のことを指すものと考えられる。またそう考えれば, 小倉進平の調査結果において「百合の花」の意味で ke-na-ri ʔkot を用いる地域が少なくないことも理解できる。

その他の語形の中では pek-hap 「百合」(백합, 古くは빅합) が含まれる語形が 17 世紀の文献からいくつか見られる。17 世紀の用例はほとんど次のように「百合散」という薬名として用いられている。

빅합산은 즈수 고티느니 빅합 즈완용 패모 …… (百合散治子嗽 百合 紫苑茸 貝母 ……)

<1608 諺解胎産集要 45a>

빅합산으로 고티고 (百合散治之) <16--馬經抄集諺解下 55a>

百合 빅합 …… 흰나리 <18-- 広才物譜 3 菜部 柔滑類 2b>

次に、(2)の na-ri ʔkot のように na-ri が用いられた用例は、古いものは見いだせず、上の『広才物譜』の ‘흰나리’ の他には、19 世紀末の聖書翻訳から ‘나리꽃’ の用例が見られるようになる。

엇지 의복을 위하여 넘네하나냐 들에 나리꽃을 험하랴 <1887 예수성교전서 172>

(3)の na-bal ʔkot のように現代の標準語で「朝顔」の意味になる語が「百合」の意味で用いられた例は 20 世紀初頭までの文献上では見いだせないようである。

5 考察

現代語では개나리꽃は「連翹」、나리꽃と백합꽃は「百合の花」、나팔꽃は「朝顔」、それぞれ違う花である。ただし、方言によって違う意味を表す場合も多い。

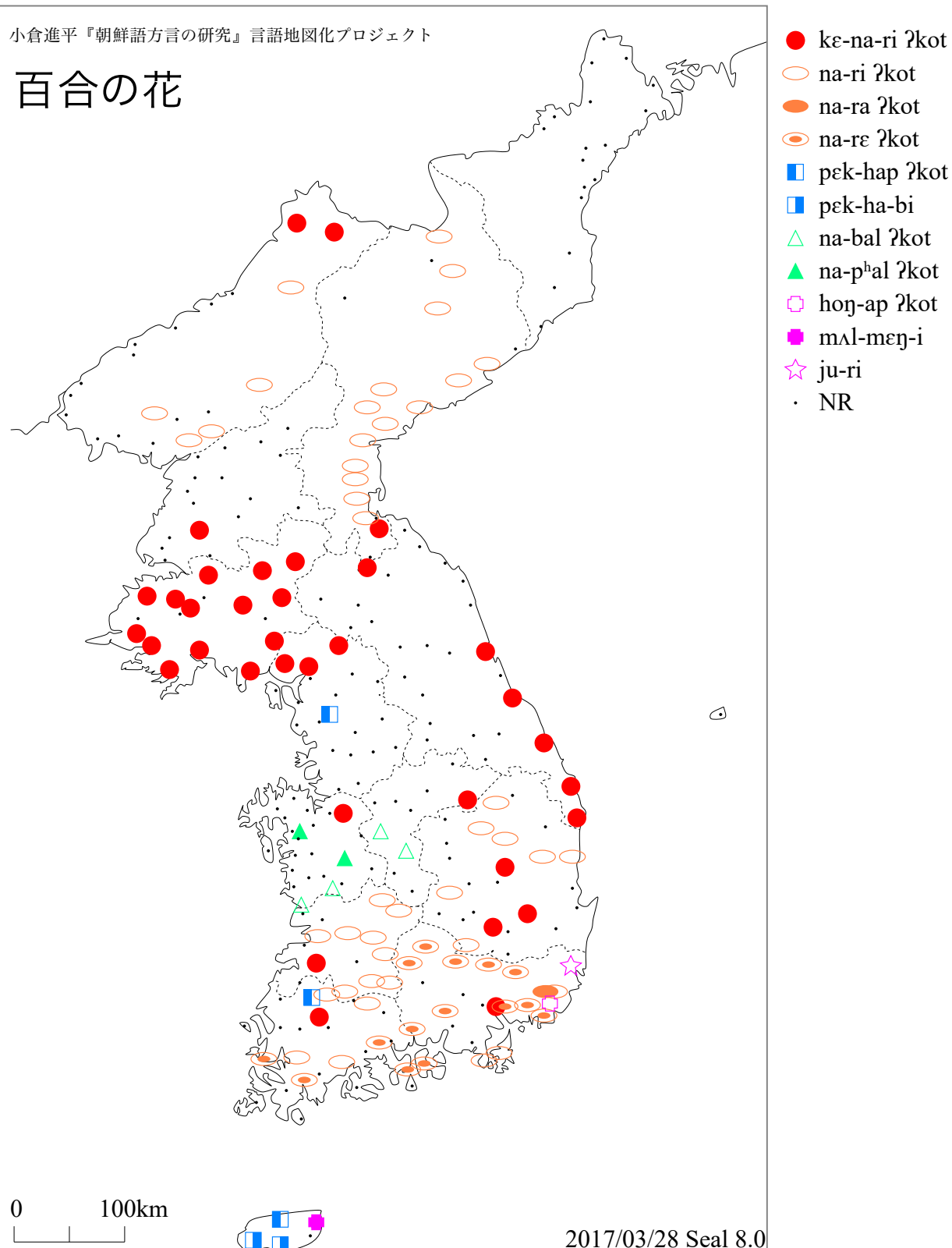
- ・개나리꽃には標準語の他に、백합꽃の意味もある。
- ・백합꽃は標準語の他に、홍합꽃の意味があり、済州島では mal-mɛŋ-i のような語形もある。
- ・나팔꽃は나발꽃と同じ意味であり、忠清南道では백합꽃の語形もあげられる。
- ・나라꽃は개나리꽃の意味で、慶尚南道では나리꽃のような語形もある。
- ・나리꽃は개나리꽃の意味で、慶尚北道では유리のような語形がある。
- ・나래꽃は慶尚南道、全羅南道方言で개나리꽃と同じ意味である。それ以外に、백합꽃の意味もある。

現代語では違う花を指しているが、方言でまとまって見ると同じく百合の花を指す。ただし、개나리는小倉進平の資料では百合の花の意味であるが、地域によっては違う意味を表す場合がある。それに、나리だけではなく、개- のような接頭辞が付加されていることの意味は今後の課題としてあげられる。

参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.
崔鶴根 (1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.
劉昌惇 (1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
한글학회 (1991)『우리말큰사전』ソウル：語文閣.

百合の花



杏子の実

鮑 潤 叙

1 はじめに

韓国の標準語は sal-gu (살구) であり、『標準国語大辞典』では「杏の木、野生アンズの木などの実。肉は食用し、種の中身は漢方材として使っている。=肉杏（筆者訳）」と記録している。これに当たる語は『朝鮮語方言の研究』（上: 192-193）の「花果」に「杏子の実」という項目名で以下の4種が記録されている。

- (1) sal-gu
- (2) ?sal-gu
- (3) sal-gui
- (4) sal-gi

語形の種類が少なく、想定される変化も比較的単純である。第1音節は(2) ?sal-gu 以外は全て 'sal' であり、第2音節は全ての語形で子音が 'g' になり、母音は 'u', 'ui', 'i' になっている。なお、小倉進平の方言転写方式では、ここで 'ui' としてあるものは本来は 'wi' と表記されるべきものである(福井玲(2016: 49-50))。

2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008)にはこの項目は記録がなく、『標準国語大辞典』と『우리말큰사전』では済州道方言で살귀が見られる。また、『우리말큰사전』には慶尚北道方言で살고が見られる。

この他に、崔鶴根 (1978)では개살구(忠清北道報恩), 사:꺾구(慶尚北道聞慶), 실구(全羅南道咸平), 살귀(済州島全域)のような語形もあげられる。小倉進平のデータで、済州島に第1音節に '솔' を含む語形が記録されていないのは不思議である。

3 地理的分布

これらの語形の地理的分布は次のようになっている。

sal-gu は幅広く分布している。そのなかでも南部地域、全羅道、慶尚道、忠清道に一番多く分布しているが、京畿道、江原道、黄海道と平安道にも数地点見られる。そのほか、済州道にも一地点見られる。ただし、咸境道にはほとんどみられない。

?sal-gu は慶尚南道の河東に一地点しかみられない。

sal-gui は主に咸境道に分布しているが、黄海道の沿岸地域にも数地点見られる。また、南部地域には一地点でも分布が見られないが、済州島に見られる。

sal-gi は咸境道のみで見られる。咸境北道に 2 地点、咸境南道に 1 地点見られる。

4 文献上の記録

最も古い語形は「솔고」で、『救急方諺解』(1466), 『杜詩諺解』(1481), 『南明集諺解』(1482), 『訓蒙字会』(1527), 『朴通事諺解初刊』, など多数多くの文献に見られる。代表的な例としては次の通り。第 2 音節の母音が ‘o’ から ‘u’ に変化したものは 19 世紀中頃の文献から見られるようになる。

솔고 시몬 仙家^ㄴ 白榆^에 갓갑도다 <1481 杜詩諺解 9:20a>

당상 솔곳 죽스^를 머거 그 毒氣^를 업게 ^하라 <1466 救急方諺解 下 73a>

杏 살구 <18-- 広才物譜 果五 1a>

주인 장시 큰 살구 남글 버혀 집 터를 널니려 ^하느니라

<1852 太上感應篇圖說諺解 5:40b>

5 考察

語形は中世語から現代語にかけて以下の通りに変化したと考えられる。このうちで、第 2 段階の ‘살고’ の語形は小倉進平のデータには見られなかったが、上の「その他の語形」で示したように慶尚北道には存在する。

솔고 > 살고 > 살구

まず、第 1 音節の「^ㄴ」が「^ㄷ」に変化し、その後第 2 音節の母音「^ㅜ」が「^ㅗ」に変化して現代語までの間に살구となった。このように母音「^ㅜ」が「^ㅗ」に変化するものは名詞、副詞、用言語幹などよく現れる。

대초 > 대추 (ナツメ)

나모 > 나무 (木)

모도 > 모두 (全て)

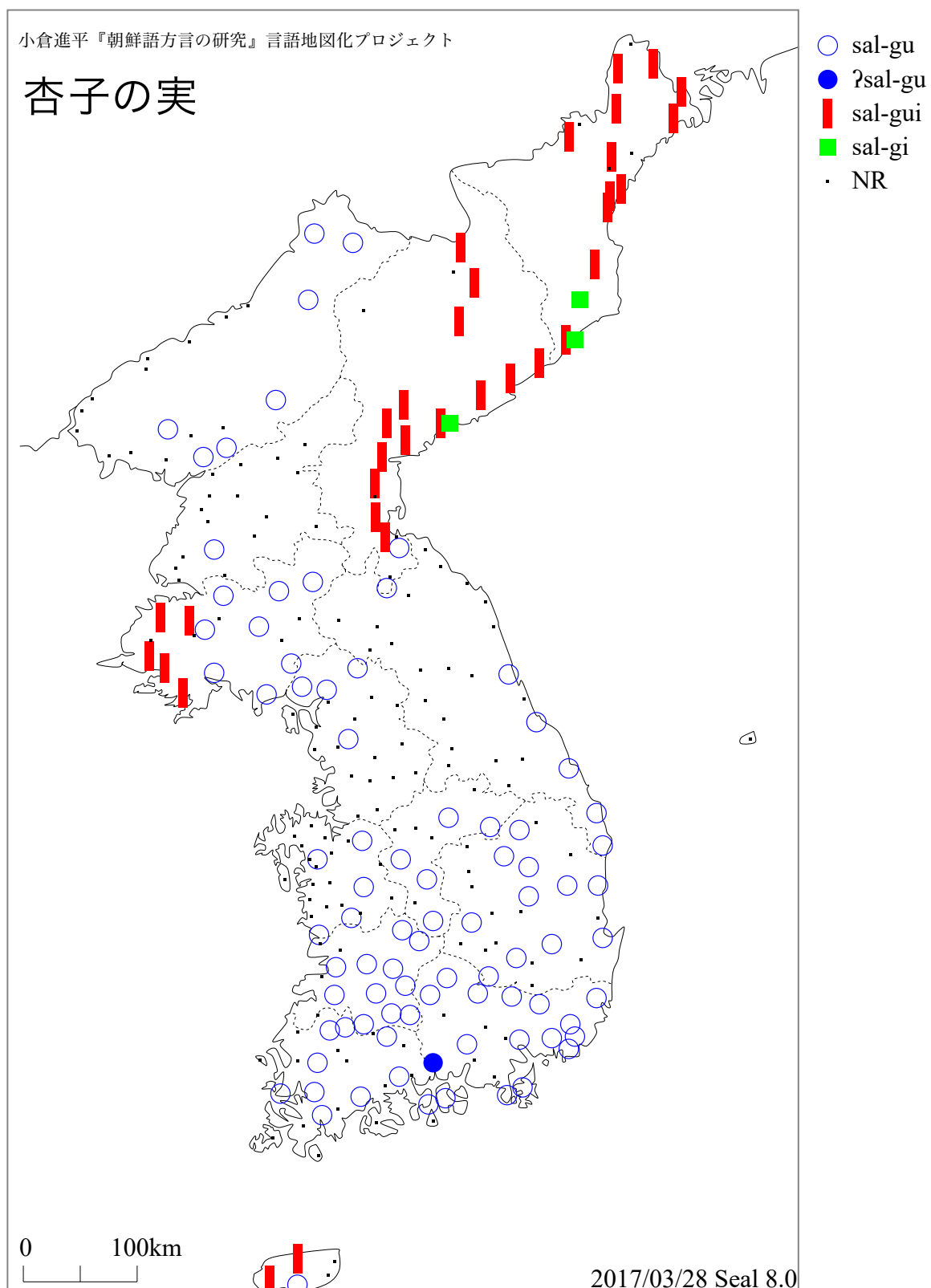
빅호- > 배우- (学ぶ)

また、(3)の sal-gui の形は、しばしば動植物名のあとに付く接尾辞 -i が付いたものに由来すると考えられる。(2)の ?sal-gu は語頭子音が散発的に濃音化したもので、慶尚道では多く見られることが知られている。

参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.
崔鶴根 (1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.
福井玲 (2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—『東京大学言語学論集』37: 41–70. 東京大学言語学研究室.
劉昌惇 (1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
한글학회 (1991)『우리말큰사전』ソウル：語文閣.

杏子の実



甘藷と馬鈴薯

福井 玲

1 甘藷と馬鈴薯の朝鮮半島への伝来と名称について

現代の標準語では、甘藷は고구마(ko-gu-ma)、馬鈴薯は감자(kam-dza)である。これらはどちらも 18 世紀以降に外国からもたらされた作物である。しかし地域によってそれぞれ名称が異なり、特に同じ감자(kam-dza)という語形が地域によって甘藷を指す場合もあれば馬鈴薯を指す場合もあるというように複雑になっている。この 2 種類の芋の伝来とそれらの名称をめぐっては小倉進平(1920, 1937, 1944)、藤井茂利(1993, 2002)、노성환(2010)、Fukui Rei (2014)などの先行研究があり、以下にその要点をまとめる。

小倉進平(1920: 156–165)では、甘藷の対馬への導入と、そこからどのように朝鮮に伝えられたかが紹介されている。1763 年から 1764 年にかけて日本を訪問した朝鮮通信使の正使であった趙曦(1719–1777)の『海槎日記』に「島中有草根可食，名曰甘藷，或謂孝子麻，倭音古貴為麻……(下線筆者)」とあり、それが救荒食物に適しているので 1763 年に釜山鎮に送ったことが記されているが、これに基づいて小倉は、朝鮮の人々が対馬方言の「孝行芋 (コウコウイモ)」を「古貴為麻」と受け取り (但し、イモの部分は朝鮮語の ‘마’ を連想して「麻」とした)、それが今日の ‘고구마’ になっているとした。

次に、小倉進平(1937: 321–341¹)では「甘藷」について彼の行った方言調査に基づいて、朝鮮語で「甘藷」を意味する語を分類し、その中で kam-dza 系統については地域によって「馬鈴薯」の意味でも使われることから、これについても語形の分類と地理的分布を考察し、両者を比べて、kam-dza が同一地方で「甘藷」と「馬鈴薯」の両義に用いられることはないことに着目して両者の関係を考察している。また、新たに「馬鈴薯」の伝来経路について、オランダ人宣教師 Gutzlaff が 1832 年に全羅道に馬鈴薯を植えたという記事を紹介した上で、改めて甘藷の伝来について論じ、上で論じた対馬経由の他に、それ以前にすでに中国からも伝来していたとする。その理由は、中国には日本よりも百年早く甘藷が入っていたこと、甘藷を表すのにもっぱら kam-dza 系統を用いる地域があることなどによる。そして、「一時は相当広い範囲に亘り半島内に行はれたが、その後南方よりなる語の進出するに及び、全羅南北道の一部に押し込められるに至ったもの」と推測している (小倉 1944 下: 218)。また、平安道の ti-gwa は中国の山東地方の方言「地瓜」によるもので、「平安南北道地方へは近年山東地方の支那人労働者が頻繁に往復して居るから、この語の西鮮地方に行はれたのは、比較的近世のことであらう」としている (小倉 1944 下: 218)。

次に、藤井茂利(2002)は同氏の 1993 年の論文を拡大してモノグラフとして刊行されたもので、以下に小倉進平のあげていない主な論点をまとめる。

¹ これは小倉進平(1944)『朝鮮語方言の研究』下: 198–219 に再録されている。以下での引用はこの再録に基づく。

・対馬方言の「コーコモ」あるいは「ココモ」のような語形が朝鮮通信使によって慶尚南道にもたらされて、当初は고고매と発音され、それが慶尚北道に伝わる際に発音が고구마と変化した。

・「甘藷」を表わす감자について、18世紀に薩摩で作られた福建省の発音を写した資料である『南山俗語考』を参考に、この語形は中国の福建省の方言音に由来するとする。また、同書に「白芋 トウイモ」とあり、白い甘藷が存在していたこと、ま「薯」は同書によると「ジュイ」と発音され、これが最初に감저または감즈として濟州島にもたらされた。濟州島にもたらされた감저または감즈はやがて全羅南道、そしてさらに北方に감자あるいはその変異形として伝わっていった。

・「馬鈴薯」の意味의북감자의북は、全羅北道を意味する。最初に全羅北道に伝えられ、それを全羅南道の人が「北」を付けて呼んだのが始まりである。

・「馬鈴薯」について、하지감자, 보리감자と言う地域は、甘藷との収穫時期の違いを表わしたものである。濟州島で지실というのは「枳実」（からたちの実）を意味する。

・対馬から慶尚道に伝わった고구마「甘藷」は赤いものであり、また中国から濟州島を経て全羅道に伝わった감자는白くて円い形の「甘藷」だった。また、馬鈴薯は最初に全羅道に伝わったが、すでに白い「甘藷」が伝わっていたため、接頭語を付けて「～감자」と呼ばれるようになった。現在は全羅道でも赤い色の고구마が伝わっているが、全羅南道海南郡に、白い色の甘藷を栽培している農家が一軒だけある。忠清道などで무감자というのは白い甘藷が伝わったためである。

これらの論点において、「甘藷」色の違いに着目している点、「甘藷」を表わす감자의語形が中国福建省の発音に基づくとしている点など非常に興味深い点だが、Fukui (2014)ではこれに対して、次のような疑問点をあげている。

甘藷が最初に伝わったときの発音を고고매とするが、-매の母音は動植物名等に付く接尾辞 -i が付いたものと考えられる。元の形が고고마と想定でき、こちらの方が古いと思われる。また、濟州島にもたらされた甘藷は감저または감즈と発音されることについて、中国福建省に由来する発音であるとするが、実際にそこからもたらされた証拠はあるのだろうか。북감자의북が全羅北道を意味するとされているが、文献上では、これに対して「南」を付けた남감자가存在することが考慮されていない。「馬鈴薯」が最初に入ってきたのが全羅道で、しかも流入のルートは1つだけだったという点はどうだろうか。

なお、甘藷と馬鈴薯の朝鮮への伝来について、Fukui (2014)では小倉進平と藤井茂利氏が扱っていない資料に関しても論じている。その主な点は次のようである。まず, 노성환(2010)によると, 李匡呂(1720-83)という江華学派の人物が中国から甘藷の種を得ようと, 1762年に燕行使として北京に向かう人物に依頼し, 得ることに成功したが, 保管がよくなって途中で傷めてしまい, 結局うまくいかなかったという。そしてその翌年に朝鮮通信使の趙曦が対馬から持ち帰ることになる。このことから対馬を通しての甘藷の導入は成功したが, 小倉・藤井両氏の主張する中国からの導入は確証されているとは言えない。一方, 馬鈴薯

については甘藷よりも資料が少ない。上で紹介したオランダ人宣教師(正しくはドイツ人宣教師²⁾)によって 1832 年に全羅道に導入されたという記事以外では、李圭景(1788–1863)の『五洲衍文長箋散考』に、純祖甲申乙酉(1824)頃に豆満江を越えて伝来したという北方説もある(巻3「北藷弁証説」)。いずれにしても、伝来時期は 1820–30 年代ということになるだろう。

2 語形の分類

2.1 甘藷

『朝鮮語方言の研究』には、「甘藷」にあたる語形が 22 種記録されている(上: 195–196)。これらは次のように 4 つのグループに分けられる。今日の標準語である ko-gu-ma 系の他に、kam-dʒa 系、接頭辞 + kam-dʒa, ti-gwa 系がある。接頭辞がつくものはその種類によって、地域名を特定するものと、外見、味などの属性に関するものの 2 つに分けられる。

(1) ko-gu-ma 系

ko-gu-ma / ko-gu-mɛ / ko-go-mɛ

(2) kam-dʒa 系

kam-dʒɔ / kam-dʒa / kam-dʒɛ / kam-dʒe / kam-dʒi

(3) 接頭辞 + kam-dʒa

(3a) 地域名 + kam-dʒa

ho kam-dʒa / ho kam-dʒɛ (胡) / taŋ kam-dʒɛ (唐) / tɔ kam-dʒɛ (戎) / wɛ kam-dʒɛ (倭) /
il-bon kam-dʒɛ (日本) / jaŋ kam-dʒɛ (洋) / tʃi-dʒu kam-dʒa (濟州)

(3b) 属性 + kam-dʒa

mu kam-dʒa / mu-su kam-dʒa / mu-si kam-dʒa (大根) /
sa-daŋ kam-dʒɛ / sa-tʰaŋ kam-dʒɛ (砂糖)

(4) ti-gwa 系

ti-gwa (地瓜)

なお、小倉進平(1944 下: 207–209)には「事物・名称不明」と記された地点があるが、これには「「事物・名称不明」とせるは、土地北方に偏し、「甘藷」に対する明白な観念を欠く地方を意味する」と注記されており、該当する地域は、咸南：豊山，甲山，咸北：明川，鏡城，富居，慶源，慶興，雄基で、すべて咸鏡道である。当時これらの地域まで「甘藷」は入っていなかったらしい。本篇付載の地図上ではこれらの地点を「×」印で表した。

2.2 馬鈴薯

『朝鮮語方言の研究』には、「馬鈴薯」にあたる語形が 14 種記録されている(上: 196–197)。これらは次のように 5 つのグループに分けられる。今日の標準語である kam-dʒa 系の他に、

² 小倉進平(1944 下: 215)は Allen (1904: 151)に基づいてオランダ人宣教師グツラフとしているが、実際には中国で活動したドイツ人宣教師 Karl Friedrich August Gützlaff (1803–1851)である。

接頭辞+kam-dʒa, kɛŋ-ge, tʃi-sil, tʰul-lɔŋ-i がある。接頭辞がつくものはその種類によって、地域名を特定するものと、外見、味などの属性に関するものの2つに分けられる。

(1) kam-dʒa 系

kam-dʒa, kam-dʒɛ, kam-dʒi

(2) 接頭辞+ kam-dʒa

puk kam-dʒa (北) / ha-dʒi kam-dʒa (夏至) / ʔtaŋ kam-dʒa (地) / kuŋ kam-dʒa (?) /

ka-dʒi kam-dʒa (茄子) / ol kam-dʒa (早) / po-ri kam-dʒa (麦) / pʰut kam-dʒa (?)

(3) kɛŋ-ge

(4) tʃi-sil (小倉(1944) 地実, 藤井(2002) 枳実)

(5) tʰul-lɔŋ-i (山人参採取業者の隠語)

なお, kam-dʒa という語形に関して, 慶尚道の陝川で「柑子」(みかん) とアクセントによって区別されるという注記がある (下: 200)。「馬鈴薯はアクセントが第二音節にあり, 蜜柑は第一音節にある」。このことは, 「甘藷」という語形が「柑子」と紛らわしくなっていたことを示すもので興味深い。またこれを参考にすると, 慶尚道の巨済, 昌寧で ʔtaŋ kam-dʒa という語形があることが説明できる。蜜柑は空中に実になるのに, 馬鈴薯は地中になる, という発想で区別をしようとしたものであろう。

3 地理的分布

まず, 「甘藷」の地理的分布は, ko-gu-ma 系は慶尚道を中心としつつ, そこから中部地方, 江原道, 咸鏡南道, 全羅道の一部に広がっている様子がうかがえる。これに対して, kam-dʒa 系は全羅南北道, 済州島を中心に分布し, それに接頭辞をつけたものは, 全羅道, 忠清南道, 黄海道, 平安道の一部, 咸鏡北道の一部などに見られる。ti-gwa は平安北道に見られる。

次に, 「馬鈴薯」の地理的分布は, kam-dʒa 系が全国的に広く分布し, それに接頭語を付けた形は全羅道を中心に分布する。この他に kɛŋ-ge が咸鏡道に, tʃi-sil が済州島に見られる。

4 文献上の記録

まず, 甘藷と馬鈴薯にあたるこれらの語形は, ハングル資料の中では 19 世紀後半になってようやく登場する。ただし, 漢文の資料では漢字語の「甘藷」が 18 世紀末から見られる。例えば, 正祖 18 年(1794 年)12 月 25 日「沿海諸邑, 有所謂甘藷者…」など 18 世紀末に『正祖実録』に 3 回, 19 世紀初頭に『純祖実録』に 1 回登場する。ハングル資料の中では次の最初の例に示す 19 世紀中ごろと推定される『広才物譜』の用例が最も古い。その後, 西洋からの宣教師が編纂した辞書類, さらに新聞などにもみられるようになる。この 19 世紀末の文献の多くに「北甘藷」に対して「南甘藷」見られるのが特徴的で, 辞書の対訳を見ると前者は馬鈴薯, 後者は甘藷を表わしていたことが分かる。また, 「南甘藷」は方言資料には見られなかったものである。

甘藷 감저 根似芋味全山藥…… <18-- 広才物譜 3 柔滑類 2b>
 감조. 蔗. Pomme de terre, patate, igitane. <1880 韓仏字典>
 남감조, 南蔗. Pomme de terre du sud; igitane; patate douce (tubercule). <同上>
 북감조, 北昔子. Pomme de terre du nord, patate ordinaire de France. <同上>
 감조, 蔗, The potato. <1890 韓英字典 (Underwood)>
 남감조, 南蔗, Sweet potatoes (lit. south potatoes). <同上>
 북감조, 北蔗, Potato. (lit. “north potato,”) Irish potato. <同上>
 감자 藷, 북감자 北甘藷 <1895 国漢会語>
 고구마 남감조 南薯→남감 <1897 韓英字典 (Gale)>
 피좁쌀 첫곡식에 보리 감자 첫친 걸로 일싱을 지나가미 <1898 毎日新聞>

5 考察

まず、先行研究について次のような点は同意できる。対馬経由で「甘藷」が入り、対馬での「孝行芋」という名称が고구마の語源になったこと。それとは別に、「甘藷」にあたる語形(감자, 감저, …)が用いられていたこと。「甘藷」が先に入っていた地域では、「馬鈴薯」の流入に際して、後者に接頭語を付けて区別して呼んだこと。감자에接頭語を付けたものから考えて、これは本来全羅道を中心とする地域は甘藷、それ以外の地域は馬鈴薯だったと考えられる。また、いくつかの接頭語の語源について同意できる。

次に、問題点となるのは次のようなものがある。甘藷의 고구마의 語形は慶尙南道を中心として発音がより俗化したもの(고구매, 고고매, 고매など)が分布する。これに対して、馬鈴薯の意味の감자の方は平安道, 咸鏡道など、北部においてより俗化した形(감재, 감제, 감지など)が多い。これは、流入時期が前者は慶尙南道が早く、後者は北部地域が早かったと解釈できるのではないだろうか。

「감자」という語形とその由来、変異については不明な点が多い。「甘藷」の漢字音については 19 世紀中頃に書かれた『広才物譜』に「甘藷 감저」とあるのは、「藷」を「저」と読む最も古い実例かもしれない。藤井(2002)はこの発音は中国語福建方言からの直接借用であるとするが、「甘」が「감」であることから、文字を通して取り入れられた字音語でと見られるのではなかろうか。実際、実録の記事でもすでに「甘藷」という漢字語が使われている。一方、そこから감자에変化し理由については正確には不明だが、同化による変化か、あるいは慶尙道でアクセントによって区別される地域があること、また、同じく慶尙道で땅감자と呼ばれる地域があることから、「柑子」との類似による混交の可能性もある。감자に関する俗化した形については次のような変化のルートを考えることができる。

kam-dʒo > kam-dʒe > kam-dʒi
 →kam-dʒa > kam-dʒe

また、由来が不明の咸鏡道の *keŋ-ge* については、あるいはハイパーコレクションによって *kam-dʒi* > *kam-gi* > *keŋ-gi* > *keŋ-ge* と変化したのかもしれないが、普通この種の変化は第1音節で見られるので、第2音節で起こりうるのかは定かではない。

済州島に見られる *kam-dʒo* という語形には注意が必要である。小倉進平(1944)ではこの形しか見られないが、崔鶴根(1978)と済州島方言辞典には、これとならんで、*감* の形が見られる。このうち前者は、「甘藷」の本来の字音を残しているようにも見えるが、後者は「柑子」と混同を起こした形かもしれない。第2音節の2つの母音の違いが紛らわしいために前者の発音ができたか、あるは調査に際してそのように聞き取られたという可能性はないであろうか。方言形には見られないが、19世紀末の文献に「南」を付けた語形がみられる点は、「北」に対するものと考えられるが、これらの名称の成立地域についても考慮する必要がある。上で述べたように俗化形の分布から、甘藷はもともと南部地域から始まり、馬鈴薯は北部地域から始まったとすれば、この南北は大きくその由来を示していることになる。このことは馬鈴薯の伝来について、北方説を支持することになる。

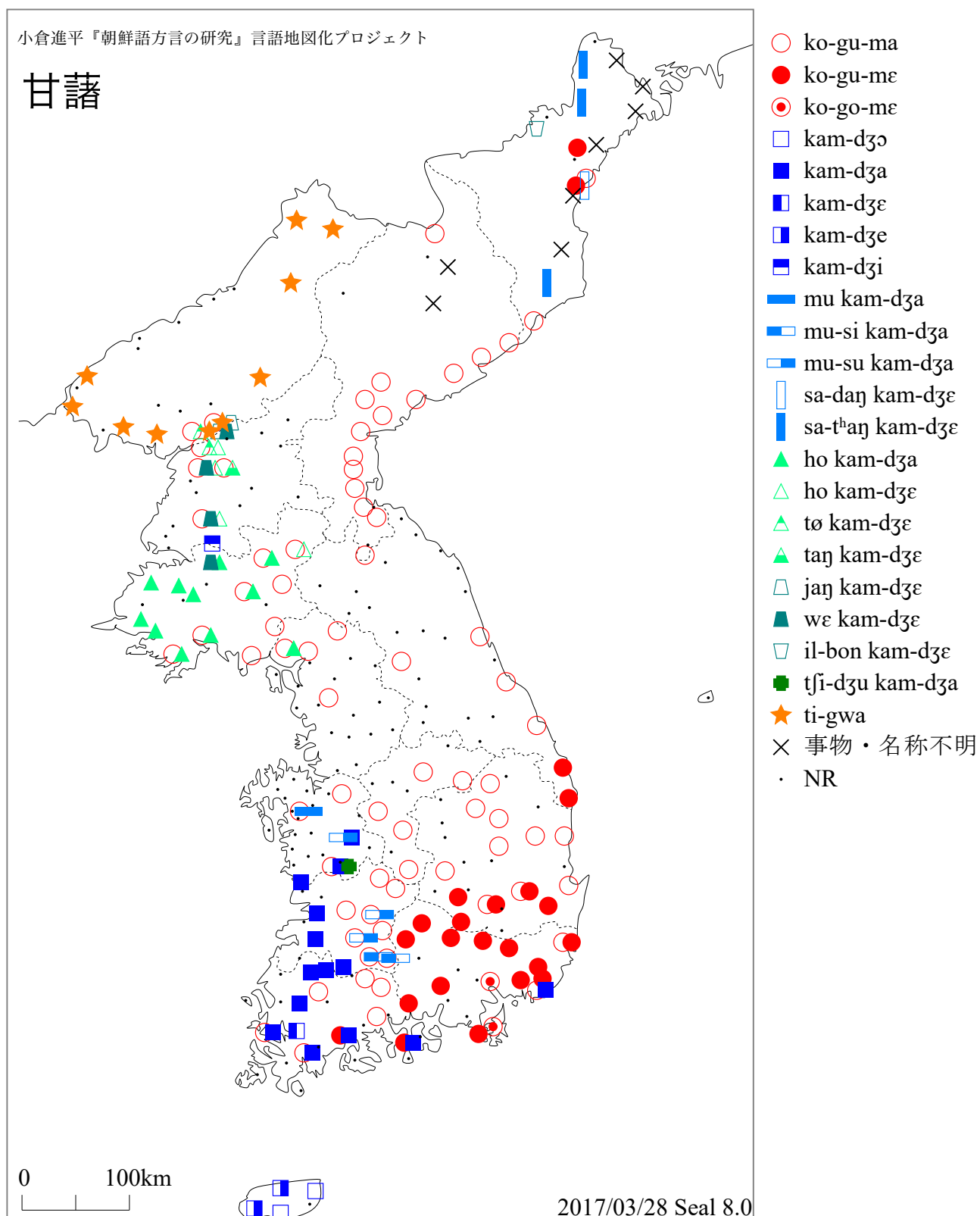
なお、特に「馬鈴薯」の流入ルートにはなお不明な点が多いが、今回の言語地図の解釈は北方説を支持する。Gützlaff によって全羅道に植えられたものは、その後広まっていったのかどうか不明である。

最後に、金東仁の小説『감자』にでてくる「감자」は「고구마」を意味したと考えられているが(波田野 2013)、平壤では甘藷について *ko-gu-ma*, *ho kam-dʒa*, *we kam-dʒa* が併用されている。したがって、「감자」で「甘藷」を表わした典型的な地域とは言えないが、あるいは接頭辞を無視して「감자」と略称することも可能だったのかもしれない。

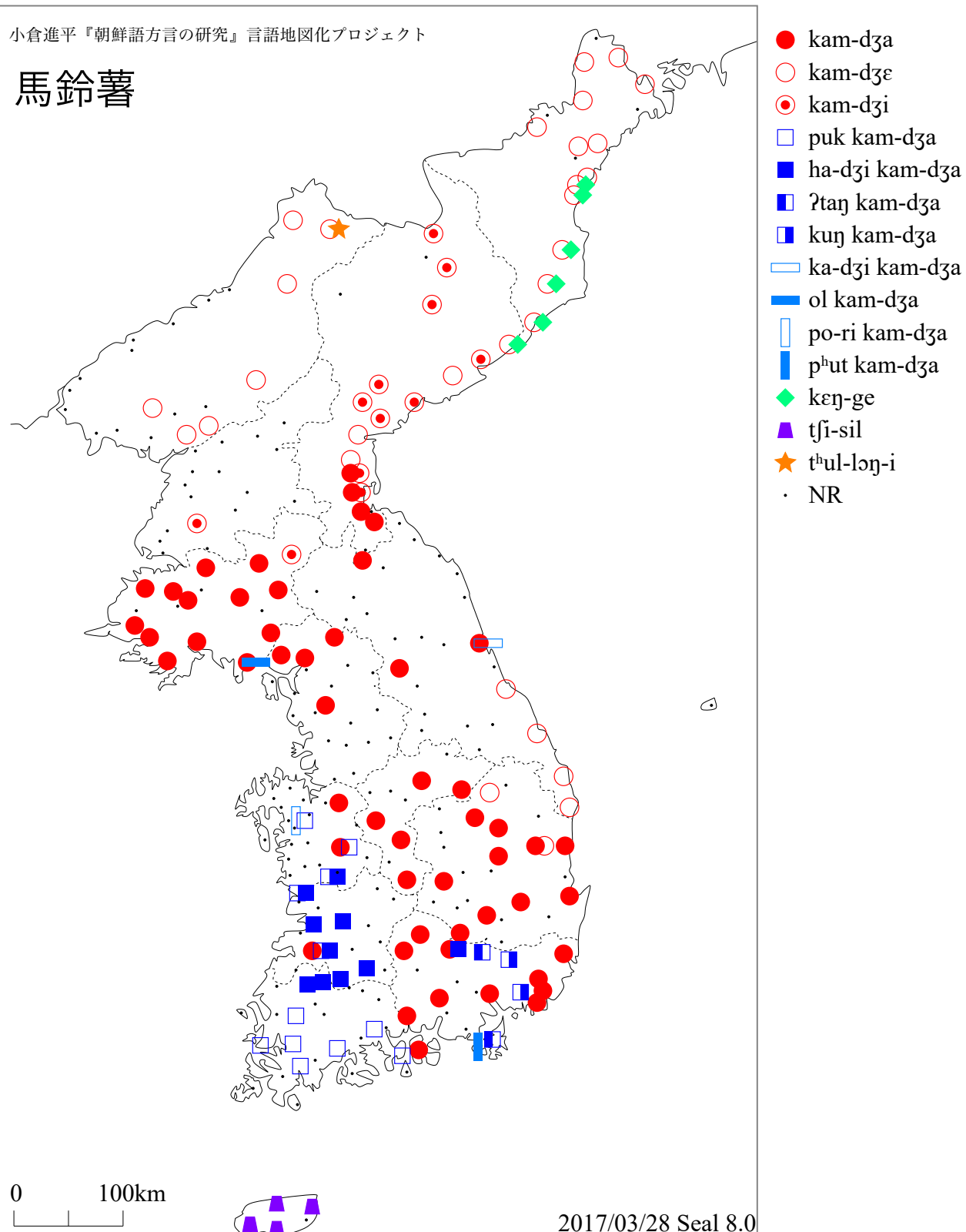
参考文献

- 小倉進平(1920)『国語と朝鮮語のために』京城：ウツボヤ書籍店。
- 小倉進平(1937) 甘藷を表はす朝鮮方言の分布について。伊波先生記念論文集編輯委員会編『南島論叢』321–341。那覇：沖縄日報社。
- 波田野節子(2013) 김동인의 단편소설 「감자」에 대하여. 『상허학보』38: 349–353.
- 藤井茂利(1993)「日本方言と韓国方言」『鶴久教授退官記念 国語学論集』鶴久教授退官記念論文集刊行会(編). 527–547. 東京：桜楓社。
- 藤井茂利(2002)『東アジア比較方言論—「甘藷」「馬鈴薯」の名称の流動』東京：近代文芸社。
- 노성환(2010) 조선통신사와 고구마의 전래. 『동북아문화연구』23: 537–555.
- 崔鶴根(1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社
- 韓国精神文化院編(1987–1995)『韓国方言資料集』(全9巻)
- Allen, H. N. (1904) *Korea, Fact and Fancy*. Seoul: Methodist publishing house.
- Fukui, Rei (2014) On the history of words for sweet potato and potato in Korean. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. 59–70.

甘藷



馬鈴薯



砂

李 在 鎬

1 はじめに

韓国の標準語は mo-re (모래) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「金石」に「砂」という項目名で9種が記録されている(上: 219-220)。

これらは、第2音節が g から始まるもの (1) と、第2音節が流音 (r, l) から始まるもの (2)、その他 (3) の3つに分けられる。

(1) 第2音節が g から始まるもの

mol-ge / mol-ge-mi

(2) 第2音節が流音 (r, l) から始まるもの

mo-re / mol-le

(3) その他

(3a) mo-se / mo-se / mok-se

(3b) mo-sal / mo-gal

(1)の mol-ge-mi は mol-ge から、(2)の mol-le は mo-re から派生してできたものとみられる。最後の(3)は、第2音節が s から始まるのが特徴であるが、(3b)の mo-gal は類似語形の mo-sal と関連があると思われるため、同じ種類として扱うことにした。

2 地理的分布

(1)の mol-ge は、朝鮮半島の東南～中部～東北地方にかけて分布している。類似語形の mol-ge-mi は mol-ge が分布する地域のうち、慶北の一部のみにあらわれており mol-ge の派生形であることは確実に思われる。半島の東は(1)の語形の勢力が強い。

(2)の mo-re は、済州、咸北を除いた全域でみられ最も広い分布を見せている。また、mol-le は済州でみられる語形であるが、mo-re からの派生関係でできたものとみられる。(2)の語形は(1)と比べ比較的半島の西において勢力が強いといえよう。

その他の(3a)の mo-se は、中部地方を除き南部と北部に分布している。類似語形の mo-se は西南部の mo-se が分布する圏域内の1個所でみられる。そして mok-se は、mo-se と mol-ge が一緒に分布する咸鏡道の一部地域で見られ、後者の語中流音の l を脱落させた後、両

語形の混交が起こってできたものとしてみることができるだろうか。(3b)の mo-sal, mo-gal は、済州や南部の沿岸部でみられる語形であり、mo-sal があらわれた地域から比較的近いところで mo-gal があらわれている。mo-sal は類似語形の mo-se, mo-se がみられる地域やその付近でみられることから、mo-se, mo-se に小さいという意味を持つ al(알) が接尾辞として付いたものではないかと推定される。

3 文献上の記録¹

文献上、最も古くに「砂」の語形が確認できるのは『龍飛御天歌』(1447)であり, 물애 が記録されている。同語形は 15~16 世紀に刊行された他の文献『釈譜詳節』(1447), 『月印釈譜』(1459), 『訓蒙字会』(1527) などでも確認されるが, 16 世紀まではこの語形のみがみられる。

沙岬 물애 오개 <1447 龍飛御天歌 49>

물애 모도아 塔을 밍마라도 <1447 釈譜詳節 13:51b>

沙 물애 사 <1527 訓蒙字会 上 2b>

以降, 17 世紀からは今日の標準語とされている語形の 모래のほか, 물애, 물래 もあらわれる。

灰에 모래와 흙 섞근 거슬 <1632 家礼諺解 7:24a>

흙과 물애에 섞갯노라 <1632 杜詩諺解 重刊本 6:47b>

石灰는 물래를 어더서 굳고 <1632 家礼諺解 7:23b>

そして 모래 は, 19 世紀から他の語形より圧倒的に多くみられるようになる。そのほかに 19 世紀の文献では, 今日の方言形 mo-se と類似語形の 모식 もあらわれるが, そのほかの方言形は見当たらない。

빅암과 모릭로 사름 쏘는 증싱이라 <1892 論中外大小民人等斥邪論音 3b>

하날의 별과 바다 갯테 물릭 갯치 무수히니 <1887 예수성교전서 히브리서 11:12>

그 수가 비록 바다 모식 갯타나 <1887 예수성교전서 로마서 9:27>

¹ 文献における語形確認は, 歴史コーパス資料 (21 世紀世宗計画) と『李朝語辭典』を通じて確認したものである。

4 考察

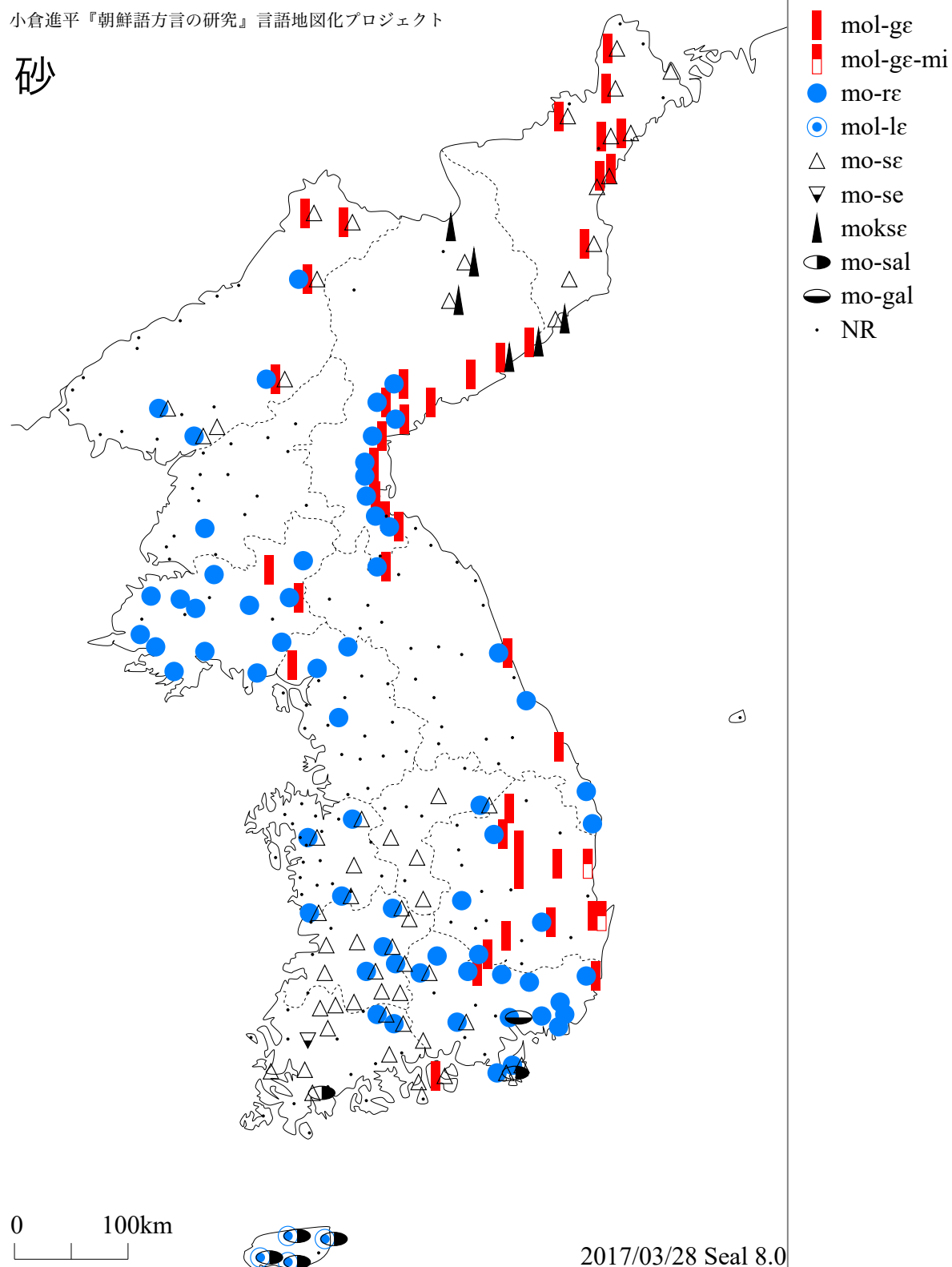
方言形において mol-ge, mol-ge-mi のように語中に k/g を持つ語(1)と, mo-re, mol-le のように k/g を持たない語(2)のような場合は「砂」以外の語においてもみられる。「山葡萄」mo-ru/mol-gu などがそのような例である。これについて李基文(2008: 143)では, 15 世紀朝鮮語における語中子音「ㅇ」が, y, ‘ㅁ’, ‘ㅂ’と母音の間にのみあらわれており, そのような分布における「ㅇ」は「*ㅈ」が変化 ([g]>[ɣ]>[h]) を経た結果であるとしている。そのような李基文(2008)に従うと, 方言形として存在する mol-ge(砂), mol-gu(山葡萄)などは過去にあった語形が方言形として残っているといえる。

一方, 「砂」の場合を含め, 以上のような語中子音 k/g を持つ語の多くは主に咸鏡, 江原, 慶北にその分布が確認されることから, 中央から周辺へと広まり周辺部に古い語形を残しているという方言圏論的な解釈が可能であろうか。

参考文献

- 劉昌惇 (1997) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部.
李基文 (2008) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社.
崔明玉 (1998) 「東南方言と東北方言の対照研究」『韓国語方言研究の実際』 ソウル：太学社.

砂



鉄・金(かね)

福井 玲

1 はじめに

現代の韓国の標準語で鉄・金(かね)を意味する語は 쇠 (発音は [swe] あるいは [sø])である。これは基本的に金属一般、その中でも鉄を意味する。鉄をより専門的に言えば漢字語の 철(철)を使うこともできるが、これは近代化以降の産業にかかわる専門的な用語であり、もともと日常的に使われた語ではない。方言的な違いはあまり大きくないが、swe あるいは sø の語源に関してはあとで見るように興味深い点がある。

2 語形の分類

『朝鮮語方言の研究』には、「鉄・金(かね)」にあたる語形が 16 種記録されている(上: 221–222)。しかし、そのすべてが swe あるいは sø の変種であり、語源の異なる他の語は含まれない。これを以下では次の(1), (2), (3)の3つに分けることにする。(1)は語頭子音が平音 s で始まる 1 音節語で、母音の種類によって 6 つの変種がある。このうち, sø は保守的な標準発音とされるが、ソウルなどの多くの話者は swe で発音することが多い。(2)は語頭子音が濃音 s で始まる 1 音節語で、これも(1)と同様、母音の種類によって 6 つの変種がある。(3)は(1)に含まれる語形のあとに接尾辞が付いたものである。

(1) sø / swe / swε / se / sε / si

(2) 語頭子音が濃音化したもの

?sø / ?swe / ?swε / ?se / ?sε / ?si

(3) 後ろに接尾辞が付いたもの

sø-?kop / swe-?kop / swe-?kot / swe-?kat

なお、崔鶴根(1978)には小倉のデータよりもはるかに多くの変種があげられているが、語形の類型としては主にこの3つのグループに分類できる(ただし、本来「鑄鉄、銑鉄」を意味する早쇠などが含まれており、これはこの類型にはあてはまらない)。

3 地理的分布

まず、(1)の sø が半島全体にわたって最も幅広く分布する語形である。(2)の語頭子音が濃音化したものは慶尚道と済州島に多く見られる。(3)の接尾辞が付いた形は、慶尚北道から江原道にかけての海岸地域に多く見られる。なお、(1)のうちで母音が半広母音 ε になっているものは平安道(swe)と慶尚道(?swε, ?se)に多く見られるが、これについては両地で意味合

いが異なる。慶尚道の場合には e と ε が区別されない地域が多いが、そのような場合、小倉進平は大体において ε で表記している。これに対して平安道では基本的に e と ε が区別されるので、この半広母音は中世語の二重母音 oj のこの地における特殊な現れ方の 1 つと見ることができる。また、あとで述べるようにこれに関しては語源的にも興味ある問題が存在する。

4 文献上の記録

まず、中世語では soj (쇠, 去声)であった。綴りは現代語とまったく同じであるが、当時は [oj] という二重母音で発音されていた。

제 손토비 쇠 드외야 <1459 月印釈譜 1:29a>

鐵 쇠 털 <1527 訓蒙字會 中 15b>

また、これを含む複合語も数多く存在し、素材が金属である場合に用いられる。

갓붙 소리 쇠붙 소리 바울 소리 <1447 釈譜詳節 19:14b>

不灰木을 쇠뚝으로 스라 붙게 하니와 <1466 救急方諺解 下 1b>

감초를 쇠그릇 띄디 마오 <1489 救急簡易方諺解 7:23a>

この語について一つ興味深いことは、中世語では「錠」の意味の同音語が存在したことである。用例は次のとおりである。

鉗은 쇠로 밀씨라 <1461, 1462 楞嚴經諺解 8:106b>

公卿의 불근 門이 쇠를 여디 아니하얏거늘 (未開鑰) <1481 杜詩諺解 8:27b>

네브터 寶物所송애 다다 쇠 잠고미 업거늘 <1482 南明集諺解 下 1b>

現代語では、「錠」(자물쇠)あるいは「鍵」(열쇠)は複合語を用いるのが普通である。中世語にもこれらに該当する複合語は存在するが、それと並んでこれらの例のように ‘쇠’ だけでも用いられていたのである。なお、20 世紀の作家の中でも、平安道出身の小説には ‘쇠’ だけで「鍵」の意味で用いられた例が存在する。

…… 그 옷을 다 넣은 때 장롱문을 닫고 쇠를 채우고 그리고 나서 …… <朱耀燮: 사랑 손님과 어머니, 1935>

…… 풍금 뚜껑을 닫으십니다. 그리고는 거기 쇠를 채우고, …… <朱耀燮: 同上>

5 考察

‘斗’の語源については、金敏洙(1997)、姜吉云(2010)などに紹介されているが、あまり説得力はない。しかし、上で見たように中世語で「錠／鍵」と同音異義語であった点を考慮に入れると漢語の「鎖 suǒ」からの借用語ではないかという可能性が提起されうる（倉部慶太氏の指摘による¹⁾）。

他の言語でも同様の現象があり、Matisoff (1992)では、“Many Southeast Asian languages have a different word for ‘lock/key’ which does seem to be borrowed from Chinese 鎖 (Mandarin suǒ)”としてタイ語、ビルマ語、ラフ語の例をあげている。

韓国語の場合、「鎖」の現代語の字音は‘쇄 (swɛ)’であり、斗との関連を考え得る余地はあると思われる。ただし、中世語までさかのぼると、この字の字音は‘斗 (swa)’ないし‘사 (sa)’であって（伊藤智ゆき(2007)による）‘斗 (soj)’とはややかけ離れた発音となる。

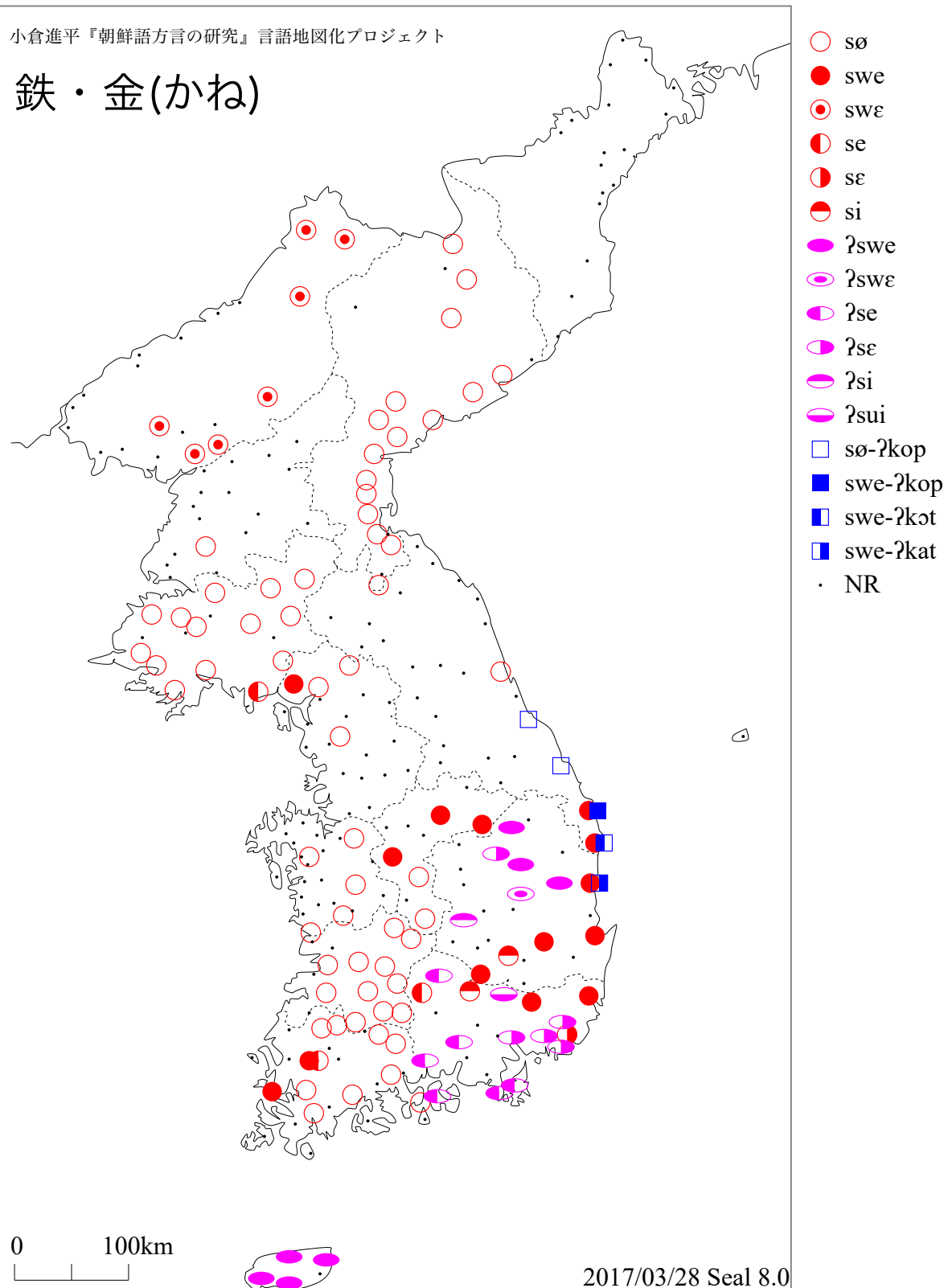
しかし、ここで興味深いのは上で見たように平安道において、「鉄・金」を swɛ と発音し、これが「鎖」の字音とまったく同じであった点である。このことと、中世語において、あるいは現代のいくつかの方言においても「鉄・金」と「錠／鍵」が同音であることは無視できないように思われる。

参考文献

- 伊藤智ゆき (2007) 『朝鮮漢字音研究』 東京：汲古書院。
姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』 ソウル：韓国文化社。
金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社。
崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』 ソウル：玄文社。
Matisoff, J. A. (1992) A key etymology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 15-1: 139–143.

¹⁾ これは、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所において遠藤光暁教授が主催されているプロジェクト「アジア地理言語学研究」の研究発表会において2016年11月20日に共同研究員の倉部慶太氏より受けたご教示に基づいている。また、Matisoffの論文も同氏より教えていただいたものである。倉部慶太氏とこの研究会を主催されている遠藤光暁氏に感謝いたします。

鉄・金(かね)



硯(すずり)

林 茶 英

1 はじめに

韓国の標準語は pjo-ru (벼루) である。『朝鮮語方言の研究』にはこれにあたる語が 13 種記録されている (上: 243-244)。13 個の語形は音節数によって分けると、2 音節のものと 3 音節のものに分かれる。

(1) 2 音節のもの

(1a) pjo-ru

(1b) pe-re / pe-ro / pe-ru / pe-ri

(1c) pe-ro / pe-ru / pe-ri

(1d) pi-ro / pi-ru / pi-ri

(2) 3 音節のもの

(2a) pe-ru-tuk

(2b) pe-ri-ʔtol

(1) の 11 個の語形を見ると、標準語である ‘pjo-ru’ を含めて、すべての語の第 1 音節には p(ㅍ)が、第 2 音節には l(ㄹ)が含まれている。‘pe’ や ‘pi’ から始まる語はそれぞれ 3 つずつ存在するが、これらの第 2 音節には共通して ro / ru / ri が現れる。‘pe’ から始まる語は全部で 4 つあるが、第 2 音節に ro / ru / ri のほか、re が付く語形がある。(2) の 3 音節の語形には (1b) の pe-ru に ‘tuk’ が付いたものや、pe-ri に ‘ʔtol’ が付いたものがある。それ以外の語形として、『標準国語大辞典』には ‘pjo-ri’ や ‘pjo-ru-ʔtol’ が見られる。

2 地理的分布

(1a) の pjo-ru は黄海道、咸鏡道、全羅南道を中心に分布し、慶尚南道、忠清道、京畿道、江原道にも見られる。(1b) の pe-re は全羅南道の順天 1 箇所だけに見られ、pe-ro は慶尚北道に若干見られる。pe-ru は 11 個の語形のうち最も幅広く分布するものであるが、済州島を除いた各地域に見られる。全羅道、慶尚道、忠清道、江原道、咸鏡南道、平安北道を中心に分布し、咸鏡北道の 2 地点、京畿道、黄海道、平安南道には各 1 地点に見られる。pe-ri は咸鏡南道、慶尚南道、済州島を中心に分布し、全羅南道、慶尚北道、江原道、忠清北道にも見られる。(1c) の pe-ro は慶尚道に若干見られ、pe-ru は全羅南道や慶尚道に分布する。pe-ri は慶尚北道に見られる。(1d) の pi-ro は慶尚北道に、pi-ru は全羅道や慶尚道に、pi-ri は全

羅道や慶尚北道に分布する。(2a) の pe-ru-tuk は忠清南道の 2 地点, (2b) の pe-ri-ʔtol は咸鏡南道だけに見られる。

全地域にかけて分布する語形は pjo-ru, pe-ru, pe-ri である。今の北朝鮮に当たる地域には pjo-ru, pe-ru, pe-ri, pe-ri-ʔtol の 4 つの語形しか見られない反面、京畿道以南には pe-ri-ʔtol を除いたすべての語形が分布する。

3 文献上の記録

文献上で確認できる最も古い語形は pjo-ro (벼로) である。この語形は『訓民正音解例本』(1446), 『訓蒙字会』(1527), 『新增類合』(1576) など 15-16 世紀の文献に見られるが、さらに『家礼諺解』(1632), 『類合』(1664), 『三訳総解』(1703), 『同文類解』(1748), 『倭語類解』(17--), 『蒙語類解』(1790), 『広才物譜』(18--) など 17 世紀から 19 世紀までの文献にもよく見られる。代表的な用例を見ると次の通り。

벼로為硯 <1446 訓民正音解例本 57>

硯 벼로 연 <1576 新增類合 25a>

現在の標準語である pjo-ru が載っている最初の文献は『翻譯朴通事』(1517) であるが、その後 17 世紀から 19 世紀初めまでの文献にはまったく見られず、19 世紀末の『韓仏字典』(1880)や『正蒙類語』(1884) から見られるようになる。代表的な用例は次の通り。

먹 붙 벼루 가져오라 <1517 翻譯朴通事 60a>

벼루 硯 <1880 韓仏字典 323>

벼루 연 (硯) <1884 正蒙類語 19a>

4 考察

合成語である (2) を除けば, pjo-ru の語形には基本的に単一の語形しか存在しないと言える。pe-ru-tuk (2a) や pe-ri-ʔtol (2b) の場合, pjo-ru の方言形である pe-ru や pe-ri (以上語根 1) に石を意味する ‘tol (돌)’ の方言形である tuk や tol (語根 2) が付いた合成語と考えられるが, (2b) の tol は濃音化した反面, (2a) の tuk はそう記録されていないのが目につく。また, 語根 1 に当たる語形が見られる地域と語根 1 が含まれる語形が分布する地域が重なる可能性もありうるが, 実際には重なる地点が 1箇所もないのも興味深い。語根 2 のうち tuk に関しては, 『朝鮮語方言の研究』(上 219)では tuk を tol の忠南保寧地域の方言と述べており, pe-ru-tuk が使われている公州や江景地域の石の方言形は ‘tok’ とされている。したがって公州や江景地域の硯の語形は ‘pe-ru-tok’ になるだろうと思われるが, 実際には ‘pe-ru-tuk’ が用いられている。これはおそらく第 2 音節の母音に影響された結果だろう。(保寧では pe-ru (語根 1) だけが見られる。)

語形の新古関係を見ると、『訓民正音解例』で pjo-ro が確認できるが、『訓民正音解例』以前の文献である『高麗図経』や『鷄林類事』を見ると、硯に関して‘皮盧’と述べており、その朝鮮漢字音は‘pi-ro’である。このことから‘pi-ro’がより古い語形と考えうるが、母音の変化を考えれば、jo > i がより自然であるため、pjo-ro が最も古い語形と考えられる。

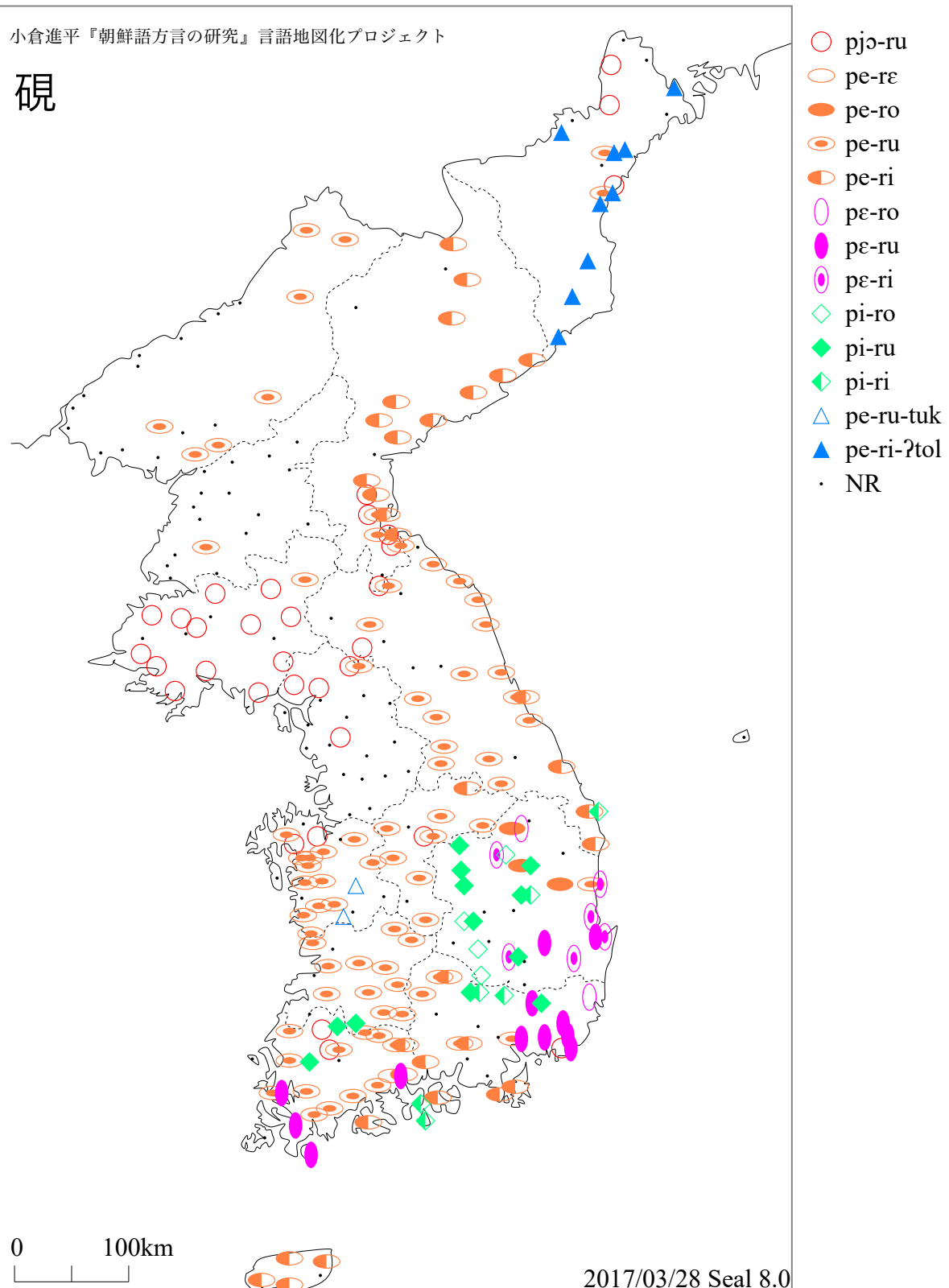
第1, 第2音節の音変化を見ると、まず、第1音節の場合、jo~e~i のような変化があったと思われるが、jo > e は韓国語の中声‘ㅈ’が短母音化した後で(18世紀頃)起きた変化と考えられる。その反面、第2音節の o~u は近代語の初期からよく見られる交替(変化)であるため、o~u の変化が jo~e~i より先に起きたと思われる。しかし、第2音節の re や ri は第1音節に影響された結果と思われるため、jo~e~i の変化より晚い時期に起きた変化と推測できる。また、(2)の語形は(1)の語形に硯を作る材料である石を追加したものであろう。以上をまとめると、硯の語形の変化は次のように想定できる。

pjo-ro	>	pe-ro	>	pi-ro			
				>	pɛ-ro		
			>	pe-re	>	pe-ri	>
						>	pi-ri
							pɛ-ri
	>	pjo-ru	>	pe-ru	>	pi-ru	
					>	pɛ-ru	
				>	pe-re	>	pe-ri
						>	pi-ri
							pɛ-ri

参考文献

国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.

硯



柄(え)

梁 紅 梅

1 はじめに

韓国の標準語は tʃa-ru (자루) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「柄 (え)」という項目で5種記録されている(上: 256-257)。

これらの語形は第1音節の母音が ʌ- のものと、a- のものと、第2音節に -g- が挿入されるグループに大きく分けることができる。

(1) ʌ- が含まれるもの

(1a) tʃʌ-rak

(1b) tʃʌ-rok

(2) a- が含まれるもの

(2a) tʃa-ru

(2b) tʃa-ri

(3) -g- が挿入されるもの

(3a) tʃal-gi

(1) の ʌ- が含まれるものは、後ろに -rak がつくものと、-rok がつくものがある。(2) の a- が含まれるものは後ろに -ru と -ri がつくものがある。母音の ʌ- は第1音節では18世紀ごろに完全に -a に合流し、第2音節では16世紀ごろから -i に合流し始めたと推定されていることから、(1) は最古形に近い形として残っていて、(2) は合流した後の語形を表している。これらは恐らく tʃʌrʌ > tʃari > tʃa-ru / tʃa-ri の変化を辿ったと考えられる。また ʌ > i が起こった後、r- の後ろで -i は -u/i に交替しやすいので、最終的には tʃa-ru / tʃa-ri になったと考えられる。(3a)の第2音節に -g- が挿入されるものは咸鏡道と平安北道で多く見られる現象である。小倉進平(1944: 下121)では音声的に [l] 音と [i] 音の連結が [g] 音を発生しやすくしたため、このような現象が起こったと解釈している。

2 その他の語形

これ以外の語形として『韓国方言資料集』には tʃari, tʃarak, tʃalku, tʃallu, tʃalk, pudai などがある。tʃari, tʃarak は (2) の変種、tʃalku, tʃallu, tʃalk は (3) の変種で、pudai は小倉のデータでは見られない語形であるが、咸鏡道で「袋」のことを podai (例えば sʰalpodai など)ともいうことから、これは「袋」の間違いである可能性も考えられる。また『표준어로 찾아보는 제주어 사전』によると済州道には tʃʌ-rok, tʃʌ-ruk, tʃʌ-rʌk, tʃsʌ-rok などより多くの語形が

分布している。

3 地理的分布

(1) の tʃʌ-rak/tʃʌ-rok 系は済州島だけに見られる。(2) の tʃa-ru/tʃa-ri は、前者は黄海道、京畿道、忠清道、全羅北道を中心とし、その周辺にも若干見られる。後者は慶尚道、全羅南道を中心に、全羅北道、江原道にも若干見られる。(3) の tʃal-gi は咸鏡道、平安北道を中心とし、江原道にも若干分布する。また『韓国方言資料集』では江原道のより多くの地域と、全羅北道、慶尚北道にも -g- が挿入された語形が散在している。しかし、半島中央部の標準語地域(京畿道、忠清南北道など)ではこのような現象が全く見られないことから、名詞にこのように -g- が挿入される現象はかなり古い時代から失われていたと考えられる。

4 文献上の記録

中世語ではㄹㄹ/ㄹㅇ(前者は単独形、後者は格助詞が付く場合の形)という交替形で現れ、『杜詩諺解初刊』(1481),『金剛經三家解』(1482),『救急簡易方』(1489),『訓蒙字会』(1527),『新增類合』(1576)などに見られる。近代語になると『朴通事諺解』(1677),『十九史略諺解』(1772),『倭語類解』(178-)など数多くの文献に見られ、単独形ではㄹㄹという形も現れる一方、格助詞が付く場合には、‘ㄹㅇ’(表記上はㄹㅇと書かれることが多い)という形も見られるようになる。いくつかの代表的な用例をあげると次のとおりである。

나모 ㄹㅇ니 (木柄) <1481 杜詩諺解 25: 26b>

ㄹㄹ 들 굼기 업스면 <1482 金剛經三家解 2:12b>

싸부 ㄹㅇ 닝그라 <1772 十九史略諺解 1:5a>

ㄹㄹ 병 柄 <178- 倭語類解 下 17b>

このように 15 世紀のㄹㄹ /ㄹㅇから始まって、現代語に至るまでの間にさまざまな変遷が見られるが、今の済州島の語形からみると、最も古い語形は *ㄹㄹ であつたと推測できる。

5 考察

(1) の tʃʌ-rak/tʃʌ-rok は -ʌ の母音を維持している済州島で確認できる。ㄹㄹ/ㄹㅇ < *ㄹㄹ > の再構によって最も古い語形として 15 世紀あるいはそれ以前には *ㄹㄹ があつたと推定できる。ちなみに『표준어로 찾아보는 제주어 사전』には tʃʌ-rak という語形も載っているが、これが上で推定した最古形が残存しているものか、あるいは、小倉進平のあげた tʃʌ-rak/tʃʌ-rok のような語形から、第 2 音節の母音が第 1 音節の母音に同化して新しくできたものなのかは分からない。これと類似する例として norak (노락) > norʌ (노ㄹ) をあげることができる(李基文 1998 と Ramsey 1977)。しかしいまでは nori の語形しか残っておらず、違う変化過程

を辿ったと考えられる。

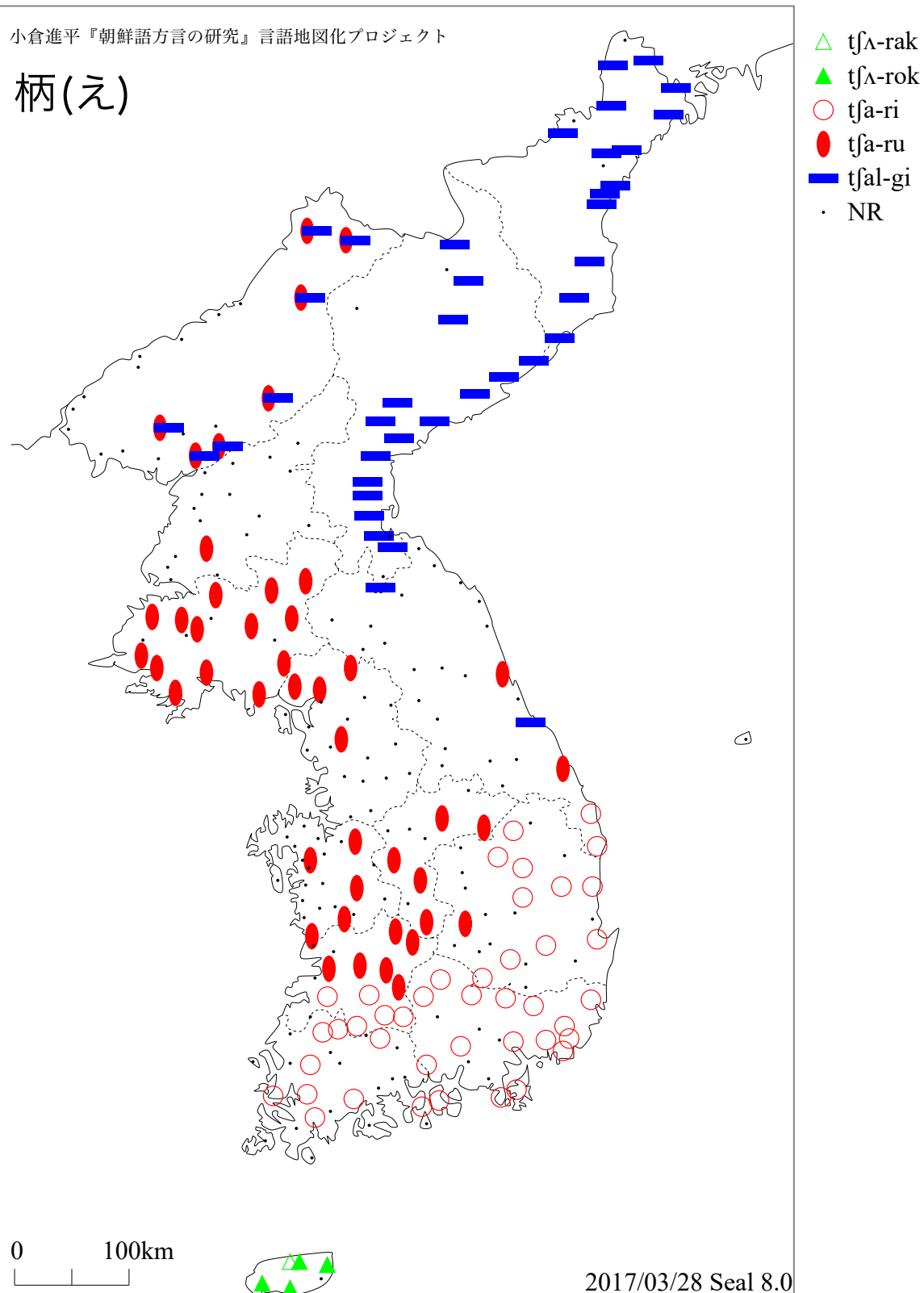
(2) の tʃa-ru / tʃa-ri 系は現代では標準語として最も多く使われる語形である。地理的にみると、小倉のデータでは済州島以外に平安道では語形が共存するものの、咸鏡道では全く確認されていないのだが、それは時代的にまだ変化の半ばにあったといえるかも知らない。

(3) の tʃal-g-i 系は小倉のデータでは平安道と咸鏡道と江原道で見られる語形であるが、語彙の第2音節で ‘k’, ‘g’ が挿入される特徴は特に咸鏡道でよく見られる現象である。いくつかの例を挙げると、tʃal-g-i (柄), kal-g-i (粉), sul-g-i (手押し車), pul-g-i (にら), naŋ-g-i (木), guŋ-g-i (穴) … などがある。この中で代表的な例として naŋ-g-i (木) の変化を見ると次のようなことが推測できる。namʌk (나무) > namʌ (나무) > namo (나무)/namk (나무) > namki (나무) > naŋki (나무), (李基文 1998, Ramsey 1977)。こちらも古語が ‘namʌk’ だと推定できる。ここで最後にくる -i に関しては李基文では主格助詞、小倉進平では後世に付加させられたものとしている。中国の延辺地方の方言で guŋ-g-i (궁기) は guŋ-g-e (궁개) と同じ意味を持つことからこれは接尾辞である可能性も無視できない。

参考文献

- 韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南：韓国精神文化研究院.
- 玄平孝, 姜榮峯 (2014) 『표준어로 찾아보는 제주어 사전』 済州大学 国語文化院 済州語センター 叢書 2.
- 李基文 (1998, 修正版 2002) 『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社.
- 劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
- Ramsey, S. R. (1977) Velar lenition in Korean. 『李崇寧先生古稀紀念 国語国文学論叢』ソウル：塔出版社.

柄(え)



火爐(火鉢)

岩井 亮 雄

1 語形の分類

韓国の標準語は *hoa-ro* (화로) であるが、これに当たる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「火爐 (火鉢)」という項目名で都合 17 個の語形が記録される (上: 261-262)。

これらの語形は、*hoa-ro* 系と、*hao-ro* 系と *ʔtoŋ(-i)* 及び *ʰui* から成る複合語系、*hoa-ro* よりも大きな器具を指す *hoa-dək* (화덕) の変種に大きく分けることができる。

(1) *hoa-ro* 系

(1a) *hoa-ro* / *hoa-ru* / *hoa-rɛ* / *hoa-re* / *hoa-ri* / *ha-ro* / *ha-ri*

(2) 複合語系

(2a) *hoa-ru ʔtoŋ* / *hoa-ri ʔtoŋ-i* / *hoal-ʔtoŋ-i* / *ha-ru ʔtoŋ-i* / *ha-ri ʔtoŋ-i* / *hal ʔtoŋ-i*

(2b) *hoal-ʰui* / *ha-ʰui* / *hal-ʰui*

(3) その他の語形

(3a) *ha-dak*

ここで *hoa-ro* などの *oa* は小倉進平の転写の原則によれば *wa* で転写されそうだが、他の語彙項目にも見られるように *oa* で記録されている¹。

もう一つこの項目で問題になるのは、小倉進平は明示していないが、『韓国方言資料集』では全羅南道の一部と慶尚南道のほとんどの地点を除いて、例えば *hwa:-ro* の如く、*hoa-ro* 系の第 1 音節が長母音で記録される点である。「火」は朝鮮漢字音では上声に当たるので、*hoa-ro* などは *hoa:-ro* の如く長母音であることが予想される²。

2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、『韓国方言辞典』では上記以外の語形が見られる。これらの語形には、(1) の変種、(2) の変種、(3a) の変種の他に、石臼を指すと思われる *hoa:k* という語形が見られる。

(1a) の変種: *hoa:-ro* / *hoa:-ru* / *hoa-rui* / *hoa:-ri* / *hoa-ri-gi*³ / *ha:-ro* / *ha-ru* / *ha:-ru* / *ha-rui* / *ha:-ri* / *ha-ri:*

¹ 小倉進平 (1931: 146), 『朝鮮語方言の研究』(下: 13-14), 福井玲 (2016: 49-50) 参照。

² 福井玲 (2016: 50) 参照。

³ *hoa-ri* に接辞 *-ki* (*-gi*) が付いた語形と考えられる。この語形は『韓国方言辞典』では忠清南道と平安南道に見られる。小倉進平 (1927: 28-29) は、咸鏡道方言の語形ではあるが、接辞 *-i* 以外に接辞 *-ki* (*-gi*) が付された語形、例えば *tʃa-ru* (柄) に対して *tʃal-gi* の如き語形が観察されることを報告する。

(2a) の変種: ha-ri ʔtoŋ / hoa ʔto-i / hoa-ro ʔtoŋ / hoa-rot toŋ / hoa-ru tʰoŋ / hoa-ri ʔtoŋ

(2b) の変種: ha-tʰi: / hal-tʰui / hal-tʰi

(3a) の変種: hoa-tok

(3b) hoa:k

ここで hoa:-ro や hoa-rui の如き語形を『韓国方言辞典』では hwa:-ro や hoa-rwi の如く記述しているが、小倉進平の記録に合わせるために hoa:-ro や hoa-rui の如く転写している。

3 地理的分布

(1)の hoa-ro 系は全道的に分布するが、このうち最も広く見られるのは hoa-ri / ha-ri で、京畿道と平安南道を除く地域に分布する。『韓国方言資料集』では全道的に見られる。hoa-ro / ha-ro は慶尚北道北部、忠清北道、咸鏡道に、hoa-ru は忠清南道西部、京畿道、黄海道南部に、hoa-re / hoa-re は黄海道と平安南道に分布する。現在の標準語形である hoa-ro や o と u が交替した hoa-ru よりも hoa-ri が全道的に見られるのが特徴である。

(2a) は江原道北部と咸鏡道といった朝鮮半島北東部に、(2b) は慶尚道といった朝鮮半島南東部に分布する。また、(2) の語形は (1) の語形との併用系として現れる。

(3) は慶尚南道の巨済と統営に分布するが、(1) の語形との併用系として現れる。

4 文献上の記録

最も古い語形は 화로 (hoa-ro) で、『南明集諺解』(1482)、『救急簡易方』(1489)、『翻訳老乞大』(1517)、『新增類合』(1576) などに見られ、中世語文献から現代語文献まで多くの用例がある。漢字表記の火爐も『月印釈譜』(1459)、『救急方諺解』(1466)、『杜詩諺解』(1481) などに見られ、中世語文献から現代語文献まで確認できる。

火炉 (火鉢) の意味で 화리 (hoa-ri) が用いられるようになったのは、19世紀後半からのようである。『韓仏字典』(1880) や『韓英字典』(1887) に用例が見られる。

ここで hoa-ro と hoa-ri の関係を考えるとき、hoa-ro → hoa-ro-i (接尾辞の添加) > hoa-roi > hoa-ri のように hoa-ro-i や hoa-roi のような語形が存在することが期待されるが、『胎産集要諺解』(1608) に 화뢰 (hoa-roi) という語形が見られる。

동지철애는 화뢰에 잇고 [十一月在爐] <1608 胎産集要諺解 66b>

5 考察

hoa-ro は漢語であるが、hoa-ro / hoa-ru に接辞 -i が付くとき、o / u が脱落する可能性があることを考慮に入れると、hoa-ro 系について、次のような語形の変化経路が想定できる。なお、小倉進平の記録には見られない語形のうち、hoa-roi という語形は『胎産集要諺解』(1608) に、hoa-rui という語形は『韓国方言辞典』に見られる。

hoa-ro > ha-ro
 > hoa-ru (→ *hoa-ru-i > hoa-rui > hoa-ri > ha-ri)
 → *hoa-ro-i > hoa-roi > hoa-re (ε)
 > hoa-ri > ha-ri
 (→は接尾辞の添加を, >は単純な音変化を表す。以下でも同様に記す。)

複合語系については、次のような語形の変化経路を想定できる。

*hoa-ro ʔtoŋ-i > hoa-ru ʔtoŋ-i > ha-ru ʔtoŋ-i
 > hoal ʔtoŋ-i > hal ʔtoŋ-i
 (→ *hoa-ru-i ʔtoŋ-i > hoa-ri ʔtoŋ-i > ha-ri ʔtoŋ-i)
 → *hoa-ro-i ʔtoŋ-i > hoa-ri ʔtoŋ-i > ha-ri ʔtoŋ-i

hoal-thii > hal-thii > ha-thii

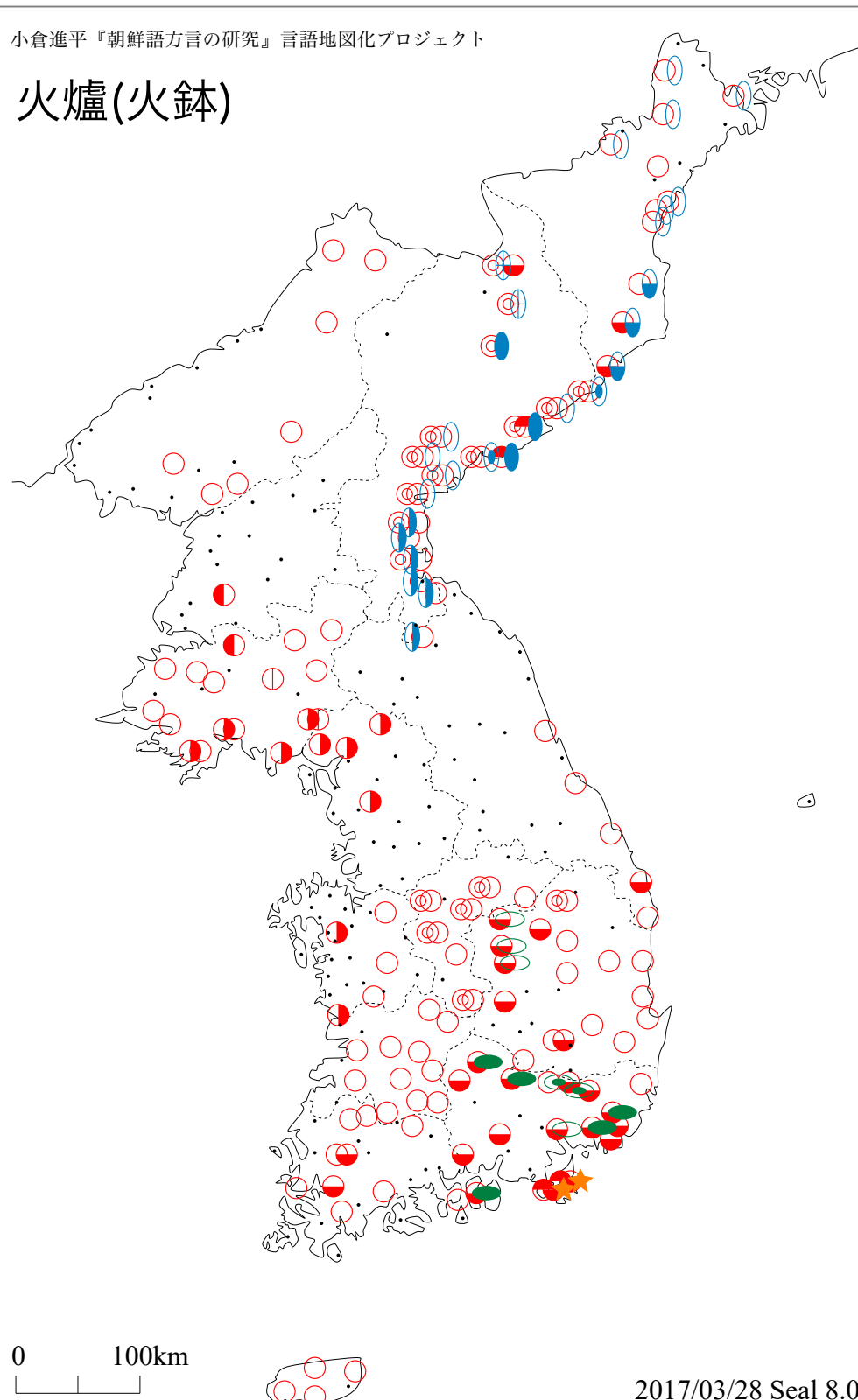
小倉進平の記録では hoa-ri が最も広い範囲に見られるが、標準語普及の過程で hoa-ro が各地に浸透していったと思われる。このように現在の標準語形とは異なる語形の方が広く分布する語彙項目が小倉進平の記録には幾らか見られる。

ところで、日本の火鉢は、木製、金属製、陶器製などの種類があり、炭火で暖めるのが一般的と思われる。韓国の火爐も同様に、陶器製、鉄製、蛭石製などの種類があり、炭や木炭を入れて炭火で暖めるのが一般的と思われる。また、日本の火鉢に比べて韓国の火炉は大きさが小さいようである。その他の語形で紹介したように平安道には hoa:k (石臼) という語形が見られるので、石臼を火炉としても使用しているか、火炉と石臼の形状が似ている地域もあったものと思われる。

参考文献

- 小倉進平 (1927) 「咸鏡南北道方言」『月刊雑誌朝鮮語』 19: 25-34.
 小倉進平 (1931) 「朝鮮語母音の記号表記法について」『音声の研究』 4: 139-149.
 韓国精神文化院編 (1987-1995) 『韓国語方言資料集』 (全9巻).
 洪起薫 (1985) 「胎産集要諺解」『原本国語国文学叢林』 18: 3-166.
 崔鶴根 (1990) 『韓国方言辞典』 (増補版) ソウル: 明文堂.
 福井玲 (2016) 「小倉進平の朝鮮語方言調査についてー『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のためにー」『東京大学言語学論集』 37: 41-70.

火爐(火鉢)



狐

李 在 鎬

1 はじめに

韓国の標準語は *jo-u* (여우) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』において「走獸」の下位分類「狐」に26種の語形が載っている(上: 299–300)。

これらの語形は、第1音節がすべて同類の語形とみられるため、第2音節を基準に大きく5つのグループに分けることにする¹。

(1) 第2音節が *s* で始まるもの

ja-su / *ja-si* / *jo-su* / *jo-si* / *je-su* / *je-su*

(2) 第2音節が *k* (ʔ*k* を含む) で始まるもの

(2a) *jak-keŋ-i* / *jak-kwaŋ-i* / *jok-keŋ-i* / *jok-kweŋ-i* / *jok-k'we-i*

(2b) *jok-ki* / *jek-ki*

(2c) *joŋ-ʔki* / *jeŋ-ʔki*

(3) 第2音節が母音(V)で始まるもの

jo-u / *jo-ui*

(4) 第2音節が *h* で始まるもの

jo-ho / *jo-hu* / *jo-hi*

(5) その他：第1音節が *ŋ* で終わるもの

(5a) *joŋ* / *iŋ* / *joŋ-ho*

(5b) *joŋ-u* / *joŋ-i* / *jeŋ-i*

(1)は第2音節に *-su* または *-si* がついたものである。(2)は第2音節以降が *-keŋ-i* の種類 (*-keŋ-i*, *-kwaŋ-i*, *-kweŋ-i*, *-k'we-i*) か *-ki* の種類 (*-ki*, *-ʔki*) かで2つにわかれるが、(2c)にみられる *ŋ* の挿入と濃音化は(2b)の後部要素 *-ki* によって起こったものと考えることができ、同じ(2)の種類として分類した。次の(3)は、標準語とされている *jo-u* とその変種の *jo-ui* である。(4)は第2音節に *-ho*, *-hu*, *-hi* がついたものであり、(5)は第1音節が *ŋ* で終わっているものである。

2 地理的分布

第2音節が *s* で始まる(1)の語形は、忠清道、全羅道、慶尚道、済州島と南部地方に広く分布している語形である。

¹ 研究編(下: 134–137)では、第1音節と第2音節の音節間の特徴を基にしてこれらの語形を8つにグループ分けしている。

次に第2音節が k で始まる(2)の語形は、西側の黄海道のみに分布する jək-k'wɛ-i 以外の忠清北道の東部、慶尚北道、江原道、咸鏡道と、東側の多数の地点で見られる。

そして第2音節が母音で始まる(3)の語形は、中部地方の京畿道、江原道、忠清道から以北にあたる黄海道、平安道で多くみられる。その他に咸鏡南道の一地点にもあらわれている。

(4)の語形は、慶尚北道、忠清南道、済州島にあらわれている。

最後に(5)の語形は、江原道の一部、平安道、咸鏡南道で見られ、全体的に半島北部に分布している。

以上の内容を、局所的に散在するものを除き全体的な分布状況を大まかに概略すると、南部 (s 音系)、東北 (k 音系)、西北 (母音系) と3つにまとめることができるだろう。

3 文献上の記録²

文献に記録されている「狐」の最も古い語形は、엿○/여ㅅで、前者、すなわち主要な格助詞の前で用いられる形は『訓民正音解例本』(1446)、『楞嚴經諺解』(1461, 1462)、『妙法蓮華經諺解』(1463)、『金剛經三家解』(1482)で確認できる。そして、『月印釈譜』(1459)では 엿が記録されているが、他の文献ではみられない。また、単独形および共同格の後で用いられる 여ㅅ は同じ 15 世紀の文献である『月印千江之曲』(1447)、『妙法蓮華經諺解』(1463)、『御製内訓』(1475)、『分類杜工部詩諺解』(1481)で確認できる。

빛곳 爲梨花 엿의 갓 爲狐皮 <1446 訓民正音解例本 42>

狐鬢 엿니 <1482 金剛經三家解 3:61b>

엿이 獅子 | 아니며 燈이 日月이 아니며 <1459 月印釈譜 2:76>

엇게엔 ㅅ얌 여ㅅ 앞뒤헨 아히 할미러니 <1447 月印千江之曲 25b>

여ㅅ와 습과는 足히 議論티 몬히리로다 <1481 分類杜工部詩諺解 8:12a>

他に 16~18 世紀の文献『訓蒙字会』(1527)、『新增類合』(1576)、『重刊杜詩諺解』(1632)、『十九史略諺解』(1772)、『倭語類解』(1781)では、当時 여으 という語形が使われていたことがわかる。18 世紀末期には、여호 が『五倫行実図』(1797)で登場するが、この語形は 20 世紀前半の資料『演經坐談』(1923)でもみられる。

狐 여으 호 <1576 新增類合 上 13b>

여호와 습 <1797 五倫行実図 孝 48a>

여호도 굴이 잇고 <1923 演經坐談 마태 8:19-27>

現代の標準語とされる 여우 の語形は 19 世紀末頃から出現しており、類似語形の 여이

² 歴史コーパス『21 世紀世宗計画』で検索した結果による。

も辞典類の『韓仏字典』(1880),『韓英字典』(1897)に掲載されている。また, 여위 は20世紀の資料で確認されるが, その他の語形は管見の限り見当たらない。

여이 狐 <1880 韓仏字典 26>

여우도 궁기 잇고 <1887 예수성교전서 마태 8:20>

여위는 굴이 잇고 <1903 신학월보 3:332>

4 考察

「狐」をあらわす26種の語形は, 第1音節が jo- とその変種 (ja-, jε-, je-) から始まることからそれらが一つの語根から派生してできたものと考えられ, 基となる語根は15世紀の文献でみられる「열〇 (jozɦ または jozy)」が関わっていると推定される。そして音節末の子音が, 変化や他形式との接続などを経た形で残っているものが, 以上の語形であると考えられる。

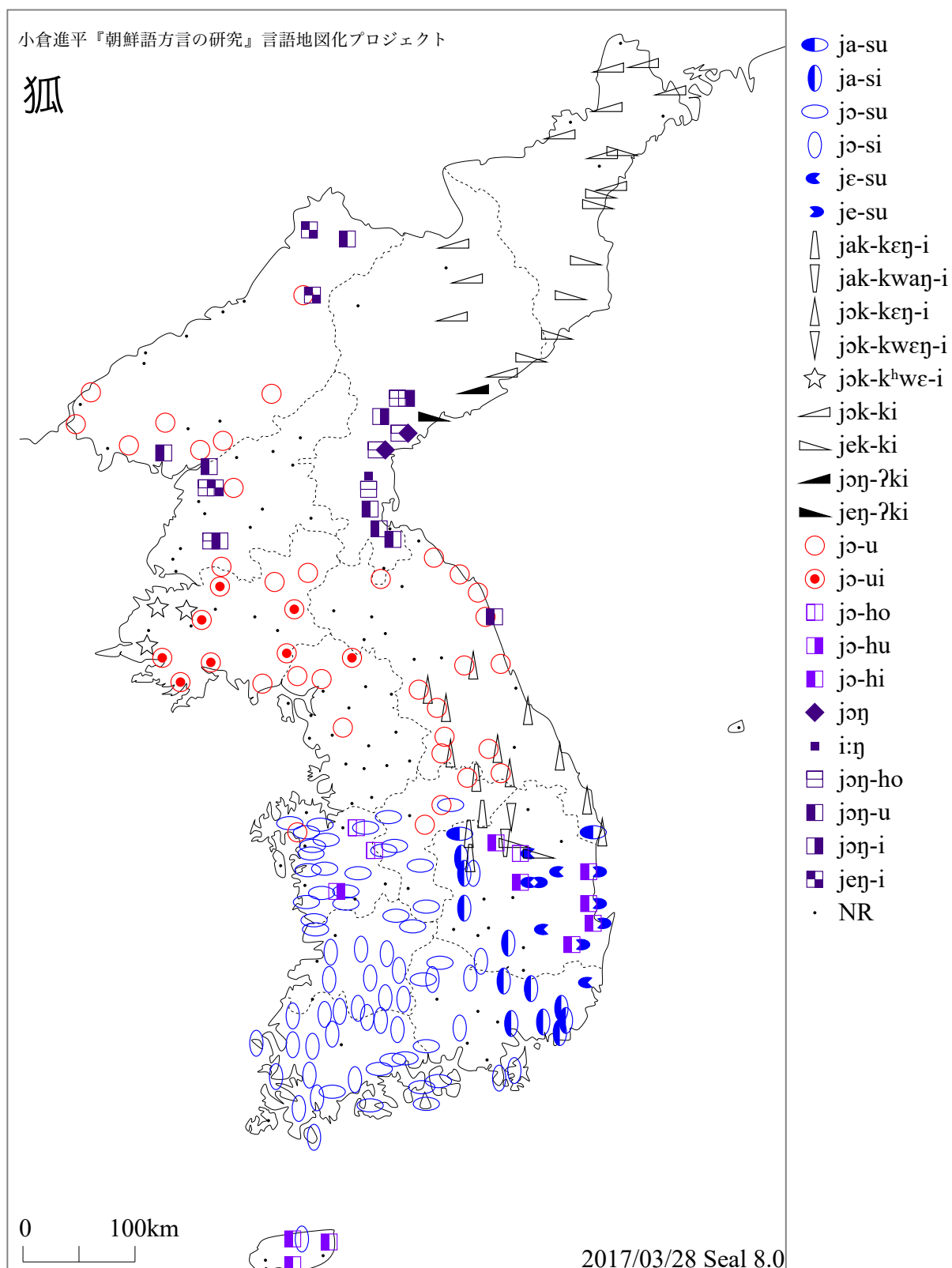
そして, 第2音節が k 音から始まる語形は, 前述したように音節末に存在していた有声軟口蓋摩擦音(y), または有声声門摩擦音(h)が方言形において無声軟口蓋破裂音(k)として残存するものと解釈できる。

参考文献

劉昌惇 (1997) 『李朝語辞典』 ソウル: 延世大学校出版部.

李基文 (2008) 『新訂版 国語史概説』 ソウル: 太学社.

狐



蛭

林 静

1 はじめに

韓国の標準語は *kɔ-mɔ-ri* (거머리) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「水族」に「蛭」という項目では 19 種の語形が記録されている(上: 304–306)。

(1) *kɔm-* で始まるもの

(1a) *kɔ-mɔ-ri* / *kɔ-mɔl* / *kɔ-mɔl-dʒaŋ* / *kɔ-ma-ri*

(1b) *kɔ-mu* / *kɔ-mu-rak-tʃi* / *kɔ-mu-ri* / *kɔ-mi*

(1c) *kɔm-dʒa-ri* / *kɔm-dʒɔ-ri* / *kɔm-tʃʰɛ-ri* / *kɔm-tʃʰɛŋ-i* / *kɔm-tʃʰɔ-ri*

(2) *kim-* で始まるもの

(2a) *ki-mɔ-ri* / *ki-ma-ri* / *ki-mu-ri*

(2b) *kim-dʒa-ri* / *kim-dʒɔ-ri*

(3) その他

tʃʰi-gi

大部分の語形は *kɔm-* または *kim-* で始まるが、(3)の *tʃʰi-gi* だけはまったく由来の異なる語形である。

2 その他の語形

これ以外の語形として『韓国方言資料集』(1987–1995)には *kʰəməri* (全北長水), *ki:murEgi* (全北井邑), *kɔmal* (北済州)が見られる。*kʰəməri* と *kɔmal* は(1a)の変種, *ki:murEgi* は(2a)の変種と考えられる。

なお、小倉進平は *kɔm-* または *kim-* で始まる語形をすべて短母音として記録しているが、『韓国方言資料集』ではこれらは慶尚南道と済州島を除くほとんどの方言で *kɔ:m*- *ki:m-* という長母音として記録されている。

3 地理的分布

最も広く分布する語形は、(1a)の *kɔ-ma-ri* で、北は平安道、咸鏡道、黄海道、南は全羅道を中心に分布し、その周辺の江原道、慶尚南道の一部にも見られる。(1a)のうち、韓国の標準語の *kɔ-mɔ-ri* は、京畿道、黄海道、慶尚道、全羅北道などに見られ、*kɔ-ma-ri* に比べると中央よりに分布している。

その次に広く分布しているのは、(2a)の *ki-mɔ-ri* の語形で、慶尚北道、忠清道、京畿道、

黄海道などに分布している。(2a)の ki-ma-ri は江原道の一部に見られる。

(1b)の kɔ-mu と kɔ-mu-ri は慶尚南道, kɔ-mi は咸鏡道に分布している。

(1c)の kɔm-dʒa-ri, kɔm-dʒɔ-ri, kɔm-tʃɛ-ri などの語形は慶尚北道を中心に分布する。

(2b)の kim-dʒa-ri, kim-dʒɔ-ri は忠清道を中心に分布する。

最後に(3)の tʃi-gi は特別な語形で、咸鏡南道の最南端に位置する新高山の1地点でのみ見られる。

4 文献上の記録

文献記録によると、最も古い語形が거머리で、『救急方諺解』(1466), 『救急簡易方諺解』(1489), 『訓蒙字会』(1527), 『新增類合』(1576)などの文献に見られ、中世語及び近代語の代表的な語形である。また、거마리의語形はそれに比べるとずっと新しく、19世紀末の『国韓会語』(1895)に見られる。

거머리 설흔 나출 붓가 값간 노르게 호고 <1466 救急方諺解 上 85b>

蛭 거머리 딜 <1527 訓蒙字会上 12a>

거마리 蛭 水虫 馬蜞 吮血虫 <1895 国韓会語 17>

なお、中世語で傍点の付けられている文献では、거머리의第1音節は上声になっており、これが現代語の多くの方言の第1音節の長母音に対応する。

5 考察

거머리의語源については、いくつかの可能性がある。

まず、色とのつながりで、「黒」を表わす形容詞 검- の語根に接尾辞がついたものではないかという可能性が考えられる。次に、動物に付いて吸血をするところから、「巻き付く」という意味の動詞語幹 감- の母音交替形 검- に由来するのではないかという可能性もある。また、거머잡다「ぎゅっとつかむ」、거머쥐다「握り締める」など、接頭辞のようにして用いられる 거머- との関連も考えられる。なお、『東言攷略』では、「蛭을「거밀」이라 함은 居沒이니 蛭은 水에 居는 者이니라」として「居沒」(水に棲むこと)という由来を考えている。結論としては、いまだ確実なことは言いにくい。

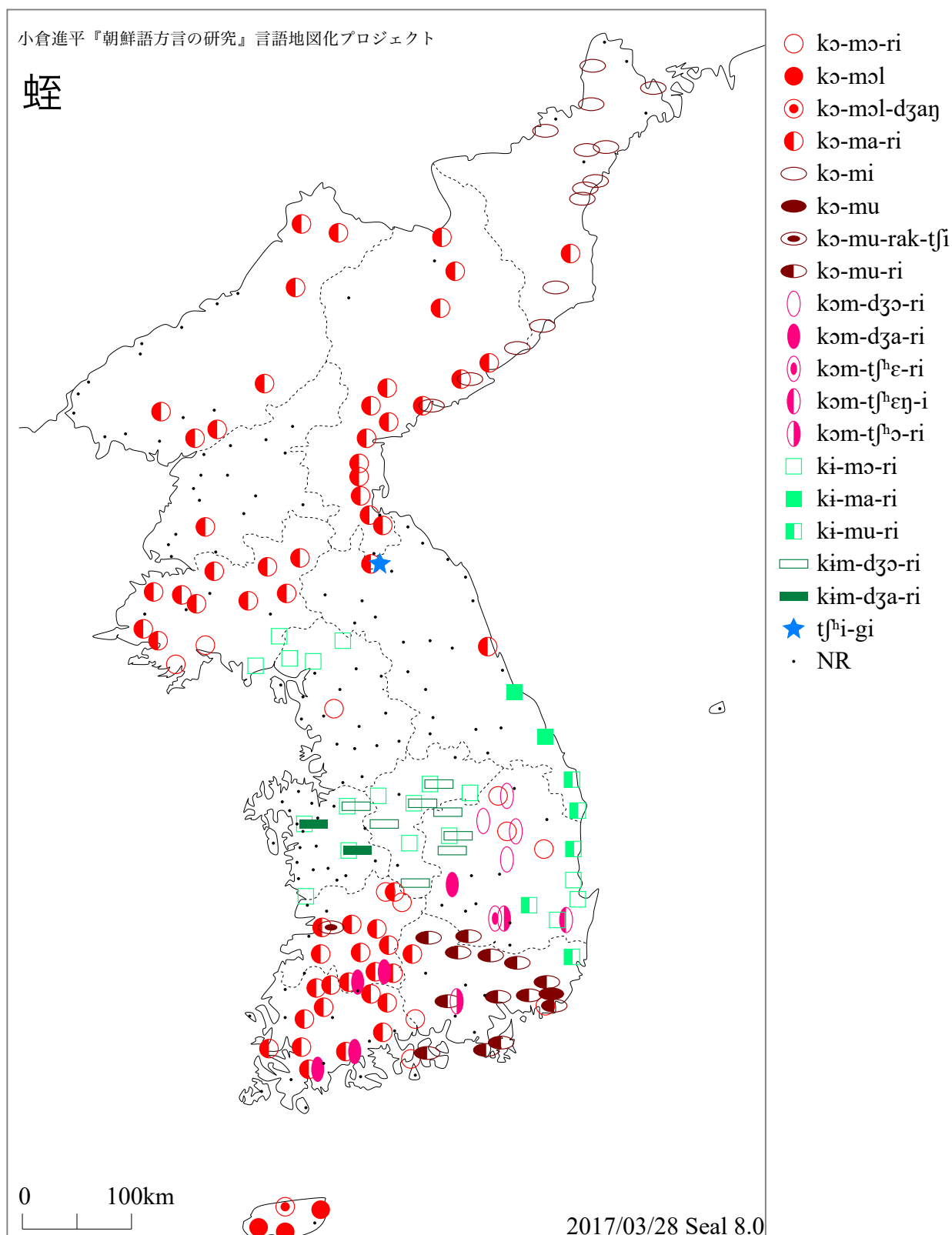
最後に、「蛭」を表すもう一つの語形 tʃi-gi については詳しいことは不明である。あるいは、岩田礼(1952)による『漢語方言解釈地図』で、漢語の方言の中に「蛭」を表すのに「蜞+X」という語形を用いる地域がみられるが、この「蜞」の字音に由来する借用語かもしれない。

参考文献

韓国精神文化研究院 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南: 韓国精神文化研究院.

- 姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』 ソウル：韓国文化社.
- 金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社.
- 劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部.
- 岩田礼 (1952) 『漢語方言解釈地図』 白帝社.

蛭



鰕(えび)

徐 叡 廷

1 語形の分類

韓国語の標準語は se-u (새우)であるが、『朝鮮語方言の研究』の「水族」に「鰕」という項目では 26 種の語形が記録されている(上: 305-306)。これらの語形は、大きく第 1 音節に se が含まれているもの(se-系)と、全く異なる形の語形(tʃin-ge-mi 系)に分類することができる。se-系はまた第 2 音節を基準に、第 2 音節が母音で始まるもの(se-u 系)、第 2 音節が両唇破裂音で始まるもの(se-bi 系)、第 2 音節がないもの(即ち 1 音節語、se 系)に分けられる。

(1) se-系

(1a) se-u 系

- ① se-u / se-u-dʒi / se-un-dʒi / se-un-ge / se-o / se-ui / sa-ui
- ② seŋ-u / seŋ-u-dʒi / seŋ-o / seŋ-i

(1b) se-bi 系

- ① se-bi / [?]se-bi / swe-bi / [?]swe-bi / swe-bi
- ② se-beŋ-i / se-bu-reŋ-i / se-buŋ-ge / se-p'a-u

(1c) se 系

- ① se, [?]se, swe

(2) tʃin-ge-mi 系

(2a) tʃin-ge-mi / [?]tʃin-gi-mi / tʃin-ge-mi

se-u 系はさらに第 1 音節に軟口蓋鼻音の終声/ŋ/が付いていないものと、付いているものに分けられるが、/ŋ/が付いていない形が本来の形だと考えられる。se-bi 系も第 2 音節の母音が/i/であるものとそれ以外のものに分けることができる。

2 地理的分布

se-u 系で最も広く分布している語形は se-u であり、全羅道、慶尚北道、忠清道、京畿道、江原道、黄海道、咸鏡南道の一部、平安北道、済州島にかけて分布している。他に se-u-dʒi が平安北道、se-un-dʒi が平安南道、se-un-ge が全羅北道、忠清南道、se-o が忠清南道、se-ui が全羅南道、sa-ui が済州島に分布しており、seŋ-u が平安南道、seŋ-u-dʒi 平安道、seŋ-o が江原道、seŋ-i が京畿道、江原道に分布している。

se-bi 系で最も広く分布している語形は se-bi であり、全羅道、慶尚道、江原道、咸鏡道に分布し、他の[?]se-bi, swe-bi, [?]swe-bi, swe-bi の語形が慶尚道のみ分布している。また se-beŋ-i,

se-bu-rɛŋ-i が忠清道に, se-buŋ-ge が全羅北道に, se-p'a-u が慶尚道の一部に分布しているが, 特にこれらの4つ語形は se-u 系と重なって分布している。

se 系と tʃiŋ-ge-mi 系の語形は一部の地域で局所的に分布している。se 系の se, [?]se は慶尚南道, swe は慶尚北道の海岸部に分布している特徴がある。また tʃiŋ-ge-mi 系の tʃiŋ-ge-mi は全羅北道, [?]tʃiŋ-gi-mi は慶尚南道, tʃin-ge-mi は忠清北道の一部に分布している。

以上のごとく, 全く形が異なる tʃiŋ-ge-mi 系を除き, 変種であると考えられる se-u 系と se-bi 系の分布を考えてみると, 中央部に se-u 系と se-bi 系の分布が重なっている地域があるものの, se-u 系が朝鮮半島の中央及び西北部を中心に分布し, se-bi 系がその周辺の南部と東北部及び中央部に分布しており, 周圏論的な分布を成すと見なしうるため, se-bi 系が古い形, se-u 系が新しい形だと推定することができる。

3 文献上の記録

『朝鮮語方言の研究』には『訓蒙字会』(1527), 『四声通解』(1517), 『訳語類解』(1690)にある sai-io と, 『東医宝鑑』(1613)にある sa-io が示されているが, これらの以外, 最も古い記録は『訓民正音解例 用字例』(1446)にある사·비である(左に付けた点「·」は去声を表す)。また사·이, 사유, 새오, 식오など se-u 系に類似した語形があるが, se-bi 系に近い語形は見当たらない。

사·비- 사·비 爲鰕 <1446訓民正音解例 用字>

사·이- 사이로 누늘 사마(以鰕爲目) <1461楞嚴經諺解 789>

사유- 사유 하(鰕) <1576新增類合上 15>

새오- 새오 하(鰕) <178- 倭語類解下 26>

식오- 식오 잔 것(鰕米) <1883華音啓蒙諺解 58>

4 考察

文献上の最も古い形は사·비である。ㅂは有声音間の環境で*b>βの変化によって現れたが, 15世紀以降消滅し, 現在の殆どの方言ではㅅ/wで, 慶尚道方言や咸鏡道方言ではㅅで対応していることがよく知られている。実際の『朝鮮語方言の研究』における鰕の分布もそれに該当している。このㅂと諸方言との対応に関する解釈は, ㅂの起源と変化についての解釈によって異なる。従来, ㅂは降殆どの方言ではㅂから w に, 慶尚道, 咸鏡道方言ではㅅに変化したと論じられていた。例えば, 崔明玉(1998, 2015)では, 古代の中央語(慶州語)である東南方言で*b>βの音韻変化は起こり, さらに15世紀以降殆どの方言ではㅂ>wの変化が, 尚道方言と咸鏡道方言ではㅂ>ㅅの変化が起こったと述べている。これに対し, 李基文(1972)では*b>βの変化が慶尚道方言と咸鏡道方言では起こらず, 慶尚道・咸鏡道方言では b/β の対立は存在しなかったと推定しており, さらに中期語の前身である西北方言では元々 b/β の対立の有していたと推定している。

「鰕」の語形変化に関しても, 古代語形*sa-bi を想定し, se-bi 系は*sa-bi から直接, 第1

音節の母音にウムラウトの変化が起こって分化したと説明することがより妥当だと考えられる。また、第1音節に半母音 w の挿入によって swɛ-bi, swe-bi が現れ、語頭音の濃音化によって¹se-bi, ²swe-bi が現れたと推定される。さらに語形 se-bi の後ろに接尾辞-ɛŋ-i, -u-rɛŋ-i などの接尾辞が付き、se-beŋ-i, se-bu-rɛŋ-i などの語形が現れたと推定できる。

se-u 系に関しては、*sa-bi が sa-βi に変化した後、sa-βi に音韻変化が起きたことが考えられる。李基文(1998)によると、βは一般的に w に変化するが、βi の場合は wi または i に変化し、wi に変化すると主に‘위(uy)’で表記したという¹。しかし実際の文献上の記録には、第2音節が i に変化した사이はあるものの、위で表記された記録はない。『朝鮮語方言の研究』の語形では、済州島で唯一 se-ui, sa-ui の語形が見られる。사·비に関しては、β>wi への変化はなく、βが円唇母音ɯ或いはɯに、母音ɯが半母音yに変化し、say(sa-yu), say(sa-yo)などが現れたのかもしれない。また、第1音節にも半母音yが挿入されsay(say-yo)が現れ、後に第2音節のyが脱落してsay-o, say-o(say-o)などの形が現れたのかもしれない。それが近代に入り、ɯの単母音化によって、se-u, se-o などの語形が定着されたと考えられる。さらに、文献で多く見られるsay, say, say, sayなど、第2音節が陽母音である語形が方言ではあまり現れず、陰母音であるse-uが最も広く分布している。sayの記録が18世紀の文献にも見られることから、ɯ/ɯの交代は19世紀に入ってから起きた変化であると考えられる。² 以上のことをまとめると、次のような歴史的な変化が想定される：

*sa-bi > se-bi > se-beŋ-i / se-bu-rɛŋ-i...
 > sa-βi > sa-yo / sa-yu > say-yo > say-o / say-o > se-o > se-u → se-u-dʒi / se-uŋ-dʒi...
 > sa-i

方言に現れる se-u-dʒi, se-uŋ-dʒi, seŋ-u, seŋ-u-dʒi などの語形は、ɯ/ɯの交代が起こる以前接尾辞が結合したものなのか、交代の後に結合したものなのか、判断し難い。

tʃiŋ-ge-mi は蜘蛛거미の古い形が거·미(四声通解 上 17), 거·미(兒学編 上 8)であることから、類推による変化など거·미と何らかの関係が考えられる。

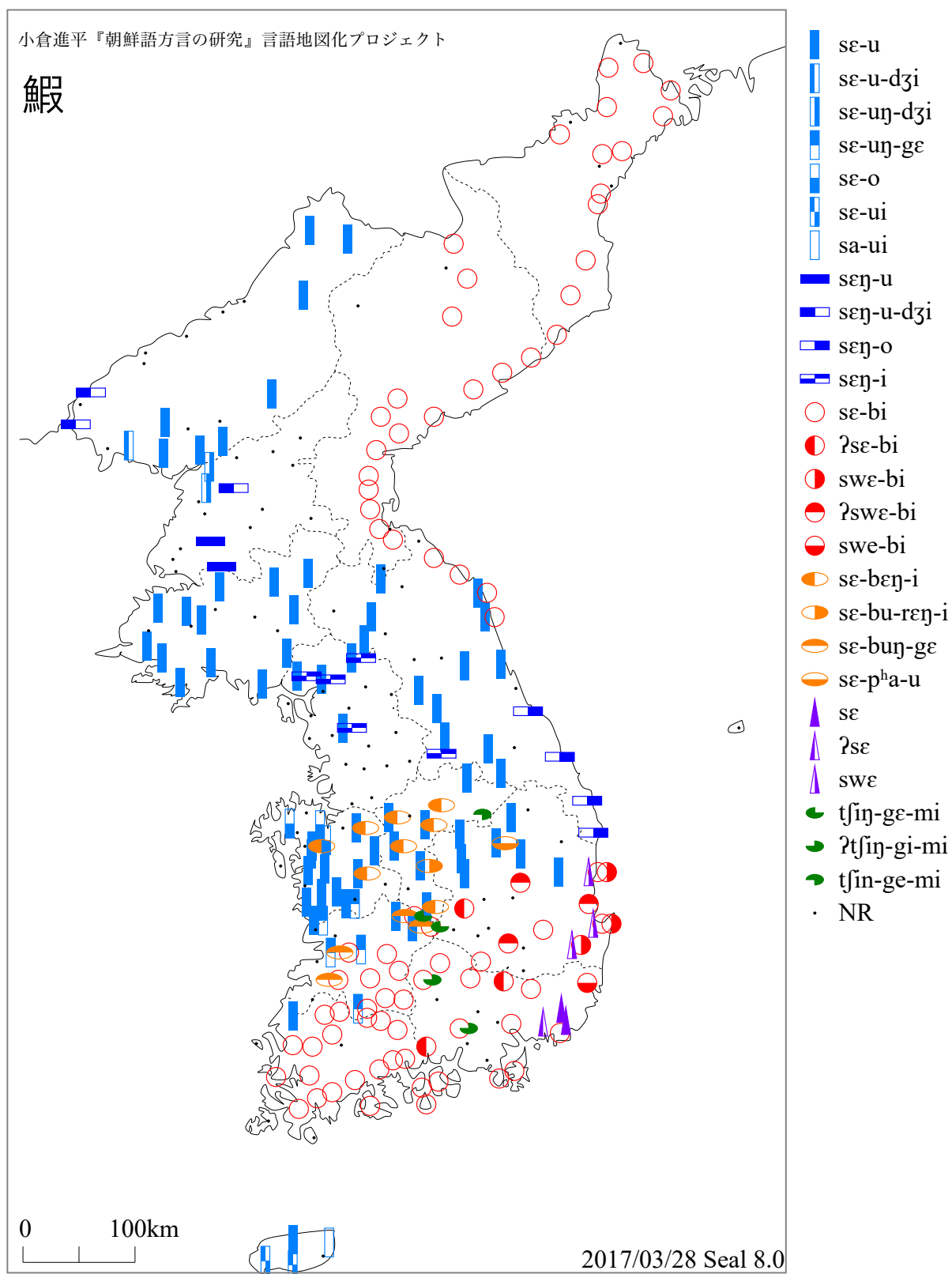
参考文献

- 李基文(1972)『国語音韻史研究』ソウル：塔出版社。
 李基文(1998)『国語史概説』ソウル：太学社。
 崔明玉(2004)『国語音韻論』ソウル：太学社。
 崔明玉(1998)『韓国語方言研究의 實際』ソウル：太学社。
 崔明玉(2015)『韓国語의 方言』ソウル：世昌出版社。

¹ 李基文(1998)の：치비>치위, 더비>더위, 갓가비>갓가이, 거여비>거여이。これは wi を表記する適切な方法がなかったためである。

² 崔明玉(2004)によると、18世紀初頭の以降、/아, ㅓ, 애(aj)/の後ろの母音/오/가/우/に変わり、/아, ㅓ, 애(aj)/の母音の後ろには/오/が来られず、形態素の内部での母音調和も壊されたという。蝦の方言にse-uなど第2音節がuである語形の分布が多いこともこの変化に当たる例だと考えられる。

鰾



蝸牛(かぎゅう)

福井 玲

1 はじめに

蝸牛という項目は、日本では柳田国男の『蝸牛考』(1930)によって、日本の言語地理学における「周圏論的分布」の典型的な例としてつとに有名になっていた。小倉進平もその影響を受けたのか、朝鮮語の蝸牛について「朝鮮語「蝸牛」名義考」(1939)という論文を発表し、さらにそれを『朝鮮語方言の研究』下巻に「蝸牛名義考」(pp. 166–178)として再録している。この項目は語源的に異なる多くの語形が用いられ、その中には語源が不明のものもある。小倉(1939)では、今日の標準語である talp^hɛŋi (달팽이)の語源について、「懸かっている独楽」という解釈を示しているが、その妥当性について他の語源解釈もあわせて検討する。

2 語形の分類

『朝鮮語方言の研究』には 27 種の語形が記録されている(上: 327–328)。これらは次の 5 つに大別できる(凡例に示した通り、小倉進平の o は ʌ で、ö は œ で、ü は i で転写する)。

(1) tal-p^hɛŋ-i 系

(1a) tal-bœŋ-i / tal-bɛŋ-i, (1b) tal-p^ʰa-ni

(1c) tal-p^ʰɛŋ-i / t^ʰal-p^ʰɛŋ-i / t^ʰol-p^ʰɛŋ-i / til-p^ʰɛŋ-i / t^ʰil-p^ʰɛŋ-i / nil-p^ʰɛŋ-i

(2) kol-bɛŋ-i 系

(2a) kol-bɛŋ-i, (2b) ko-rɛ, (2c) ol-bɛŋ-i

(3) hal-mi-go-don 系

(3a) hal-mi-go-don / hal-mi-go-diŋ-i / hal-mɛ-go-diŋ-i / hal-ma-go-diŋ-i / hal-man-go-don / ha-ma-go-diŋ-i, (3b) ha:-mɛ / ha:m

(4) kum-bɛŋ-i 系

(4a) kum-bɛŋ-i, (4b) kum-bi / kun-bi

(5) その他

(5a) mu-dan, (5b) mun-dii, (5c) ton-ba-ri, (5d) tʃal-lɛ-bi

(1)の tal-p^hɛŋ-i 系は現在の標準語およびそれに近い語形をもつものである。第 1 音節の母音、第 2 音節の子音などに関する変種がある。第 1 音節に激音をもつものは、第 2 音節の激音によって同化を起こしたものと考えられる。これらのうちで、済州島の tal-bœŋ-i (小倉進平自身の表記では tol-bœŋ-i) については特別な注意が必要である。中世語の・/ʌ/ に対応する済州島の母音を小倉進平は [o] (イタリックの o) で表し、また、中世語の二重母音-ɨ に対応する母音については他方言と異なり「애 ([ɛ]を以てあらはす) と ㅐ ([ø]を以てあらはす) との間にも明白な区別が行はれる」(小倉 1944:下 459) として、記号 [ø] (イタリック

のウムラウト o) で表し、その音価は、円唇の前舌母音で, ㅜ に対応する母音 ([ø]) よりも若干広い母音としているが、彼以降の研究者は意見が異なる (福井玲(2016: 48-49)参照)。

(2)の kol-beŋ-i 系は、現在の標準語では食用になる巻貝を指すのが普通。(2b) ko-re と(2c) ol-beŋ-i についてはここに入れるべきか不明だが、一応この系列の下位分類としておく。

(3)については、現在の標準語では ko-duŋ だけで巻貝の総称として用いられるが、蝸牛を表わす語形はそれに hal-mi (老婆) が接頭した形が多く用いられている。hal-mi (の変種) だけで用いられる場合もある。

(4)の kum-beŋ-i 系は、普通はセミ、コガネムシ類の幼虫を指すのが普通である。(b) kum-bi などは不明ながら、一応その下位分類とする。

(5)のその他には、(5a) mu-daŋ (巫女), (5b) mun-dii (> munduŋi ハンセン病患者) などがある。(5c) toŋ-ba-ri は建築用語で「支柱」を意味する。蝸牛の「角」か「家」を例えたものらしい。(5d) tʃal-lɛ-bi の由来は不明。「猿」を意味する 잔나비(tʃan-na-bi)の慶尚南道における方言形と関係があるだろうか。

3 その他の語形

玄平孝 (1962, 1985)『済州島方言研究 資料篇』では「蝸牛」は地点によって, tolbeŋi, tolbeŋi, tolbwai という3つの語形が見られる。これらに相当する小倉のデータは上の(1a) tal-beŋ-i (彼自身の表記で tol-böŋ-i) であるが、第2音節の母音がいずれも異なっている。しかし、かれが [ø] で表した母音が、上で述べたように円唇母音であるという点に関しては、この3つのうちの最後のものの第2音節の母音が wa である点と関係があるのかもしれない。

また、小倉進平の資料では、(3b) ha:-mɛ, ha:m を除くと長母音が見られないが、『韓国方言資料集』には第1音節に長母音を持つ地域が存在する。京畿道の一部、忠清南北道、全羅北道のほとんど全域、全羅南道の2地点、慶尚北道の一部 (ta:lpʰɛŋi など、ただし長母音をもつ地点は、第1音節の母音が ti:l-, tɕ:l-のことが多い) などである。慶尚南道には見られない (tálpʰɛŋi と音調表記される地点が多い)。また、江原道は第1音節に長母音が出る場合もあるが、それは語形が ti:lpʰɛŋi などの場合のみで、第1音節が tal- の場合には長母音は見られない。あとで述べるように、中世語でこれにあたる語は (들파니) は去声で始まる。その点では長母音が現れるのは例外であるが、ti:l- の場合に長母音が多いことを考え合わせると、第1音節が ti:l 「野」と再分析された結果、長母音をもつ語形が生じたのかもしれない。また全羅道では、中世語の上声には対応しない長母音が見れることがあるので、こうした長母音の由来にもさまざまなものがある可能性がある。

4 地理的分布

標準語形と同じ tal-pʰɛŋ-i は半島中部を中心に比較的広く分布する。それに対して, tal-pʰa-ni は、平安道、黄海道、全羅南道を中心に分布し、この2つは ABA 型の分布をなす。この点で, tal-pʰa-ni の方が古い語形と考えられる。それ以外の語形は特定の地域に分布するもの

が多い。kol-beŋ-i 系は咸鏡北道に、hal-mi-go-don 系は慶尚南道を中心に分布する。

5 文献上の語形

最も古い用例は『郷藥集成方』(1433)に「蝸牛 郷名有殼月乙板伊 蛞蝓 郷名無殼月乙板伊」と記録されているものである。中世語では돌파니, 돌팡이という2つの形が見られる。

또 돌파니를 놀러 汁 내야 <1466 救急方下 77a>

蝸 돌팡이 와 <1576 類合上 16a>

브은 싸해 돌팡이와 가는 밋 마르와를 마라 <1489 救急簡易方 3:9b>

蝸 돌팡이 과 <1527 訓蒙上 11b>

17世紀以降の近代語では돌팡이가普通であり、19世紀に入ると돌핑이, 달핑이などが見られ、現代語に近くなる。

蝸牛 돌팡이 <1690 譯語類解下 34b>, <1790 蒙語類解下 35b>

돌핑이는 몸이 지렁이 모양으로 보드랍고 <1896 獨立新聞>

蝸牛 달핑이 <18--広才物譜>

6 考察

以上のように、돌파니が文献上の最も古い語形であるが、(1b) tal-p'a-ni はそれに最も近い古形と考えられ、文献上の記録と方言における圏論的分布の解釈が一致する。なお、冒頭で見たように小倉進平(1939)は tal- (中世語 tal- (H) 懸) + p'ɛŋ-i (独楽) という語源を想定するが、これについては李基文(2013)で、p'ɛŋ-i の古形、および中世語の돌파니の方が古いことが考慮されていないという批判がある。また『韓国言語地図』の解説では、돌ㅎ+방(ー이) という解釈が提唱されているが、돌ㅎという語形は文献上例証されておらず、その意味も不明である。あるいは、돌の母音(および済州島に残存する母音)、中世語の声調(去声)から考えて、この部分は「月」の意味の돌が含まれているのかもしれない¹。

参考文献

小倉進平(1939) 朝鮮語「蝸牛」名義考、『言語研究』2. 日本言語学会(小倉進平(1944)『朝鮮語方言の研究』下: 166-178 所収)。

玄平孝(1962, 修正版1985)『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル: 二友出版社。

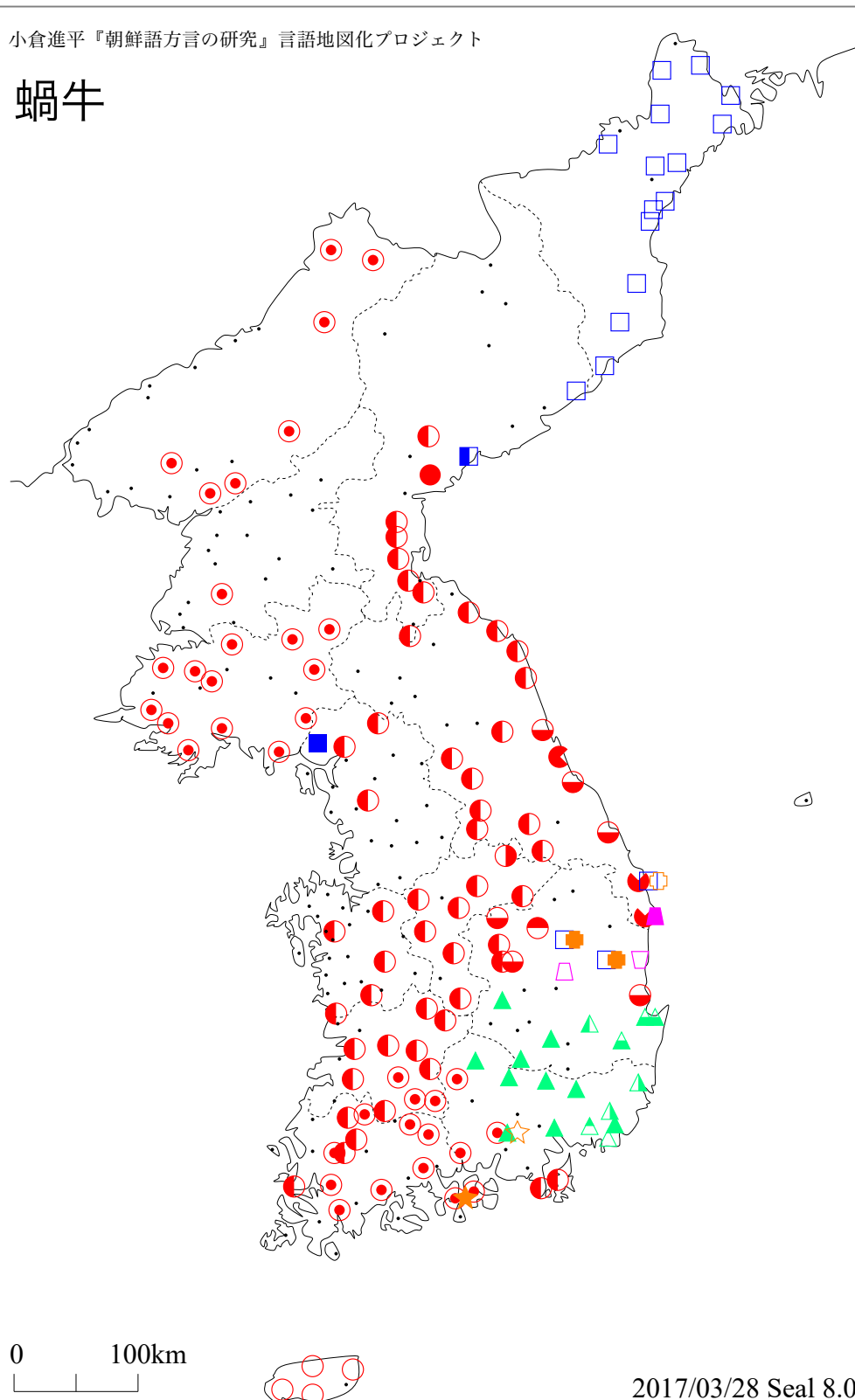
福井玲(2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—『東京大学言語学論集』37: 41-0. 東京大学言語学研究室。

柳田国男(1930)『蝸牛考』刀江書院。(改訂版 創元社1943, 岩波文庫1980)

李基文(2013) 語源 研究의 뒤안길(2). 『韓国語研究』10. 韓国語研究会。

¹ 直接は関係ないが、英語で moon snail と呼ばれる巻貝(日本名タマガイ)がある。似た発想により形を喩えたものかもしれない。

蝸牛



- tal-bœŋ-i
- tal-bœŋ-i
- ◉ tal-pʰa-ni
- ◐ tal-pʰœŋ-i
- ◑ tʰal-pʰœŋ-i
- ◒ tʰɔl-pʰœŋ-i
- ◓ til-pʰœŋ-i
- ◔ tʰil-pʰœŋ-i
- ◕ nil-pʰœŋ-i
- kol-bœŋ-i
- ko-rɛ
- ◼ ol-bœŋ-i
- △ hal-mi-go-don
- ▲ hal-mi-go-diŋ-i
- ▲ hal-mɛ-go-diŋ-i
- ▲ ha-lma-go-diŋ-i
- ▲ hal-man-go-don
- ▲ ha-ma-go-diŋ-i
- ▲ ha:-mɛ
- ▲ ha:m
- ◻ kum-bœŋ-i
- ◼ kum-bi
- ◻ kun-bi
- ◻ mu-dan
- ◼ mun-di
- ☆ ton-ba-ri
- ★ tʃal-lɛ-bi
- NR

蚯蚓 (みみず)*

朱 林 彬・福 井 玲

1 語形の分類

蚯蚓を表わす語は現在の韓国の標準語では지렁이(tʃi-rɔŋ-i)である。小倉進平の『朝鮮語方言の研究』には「昆虫・爬虫等」の中の「蚯蚓」という項目で合計 36 種の語形が記録されている(上: 328-330)。これらは次に示すように 3 系統に大別できるが、その中には漢字語と固有語が併存している点がこの項目の面白い点である(凡例にも示した通り、小倉進平の o は ʌ で、u は i で転写する)。

(1) kɔ-si 系

(1a) kʌ-u-ri

(1b) kɔ-si / kɔ-siŋ-i / ʔkɔ-siŋ-i / kɔ-si-raŋ / ki-si-raŋ / kɔ-si-rɛŋ-i / kɔ-si-raŋ-tʃi / kɔ-sɛŋ-i / ʔkɔ-sɛŋ-i / kɔ-sɔŋ-gɔ-ri

(1c) kɔt-ʔkɛŋ-i / ʔkɔt-kɔŋ-i / ʔkɔt-ku-ri / ʔkɔ-ʔkɛŋ-i

(1d) kɔl-ʔkɔŋ-i / kɔl-gɛŋ-i / kɔl-ʔkwɛŋ-i / ʔkɔl-ʔkɛŋ-i / ʔkin-ʔkɛŋ-i

(2) tat-tʃi-ne 系

tat-tʃi-ne / tat-tʃi-re / tɛt-tʃi-ne / tɛt-tʃi-re / tɛ-ʔtʃi:n

(3) tʃi-rɛŋ-i 系

(3a) ti-rɛŋ-i / tʃi-rɛŋ-i / tʃi-rɛŋ / tʃi-re-i / tʃi-re / tʃi-re-dʒi / tʃi-rɛŋ-i / tʃi-rin-i / ʔtʃi-rin-i

(3b) ʔtʃil-ʔkɛŋ-i / ʔtʃil-ʔkɔŋ-i

(1)の kɔ-si 系と、(2)の tat-tʃi-ne 系は固有語とみられるが、あとで述べるように(3)の tʃi-rɛŋ-i 系は漢字語に由来すると考えられる。なお、現在の標準語の tʃi-rɔŋ-i と同じ語形は見られず、それに最も近い語形が tʃi-rɛŋ-i である。

2 地理的分布

(1)の kɔ-si 系は全羅道、慶尚道、済州島を中心に分布し、忠清北道の一部にも見られる。(2)の tat-tʃi-ne 系は咸鏡北道にのみ見られる。(3)の tʃi-rɛŋ-i 系は最も分布範囲が広く、忠清道、京畿道、江原道、黄海道、平安道と咸鏡南道のほぼ全域に見られる。大きく見ると中央部に(3) tʃi-rɛŋ-i 系が分布し、その南に(1) kɔ-si 系、そして北東端に(2) tat-tʃi-ne 系が分布していることになる。

* 本稿は朱林彬(2015)の本論の一部(3.1 節)に基づき、本書の体裁に合わせて福井玲が加筆修正を行なったものである。

3 文献上の語形

これら3系統のうちで、最も古い用例は(1) kə-si 系に対応すると思われる用例が見られる。その中でも것위와 것위가15世紀後半の文献に見られるが、この2つは終声の表記法の違いによるもので、実際の発音は同じ [kəzyuj] だったと考えられる。

또 것위를 팻 님 소배 녀허 브리 드외어든 (又方取蚯蚓内葱管中候化為水)

<1466 救急方諺解 下 43b>

것위 물어니 <1489 救急簡易方諺解目錄 6b>

16世紀以降の文献では、半齒音の消失により거위という形が登場する。この거위는蚯蚓だけでなく「饞虫」「蛔虫」さらには「蛇」も表わしたことが次のような『訳語類解』『同文類解』などの用例から分かる。

下蚯蚓 거위 나다 <1690 訳語類解 上 62a>

饞虫 거위 蛔虫 上同 <1690 訳語類解 下 35a>

打草驚蛇 거위 덧내단 말 <1690 訳語類解 補 61a>

蛔虫 거위 地龍 地龍 <1748 同文類解 下 43a>

なお、(1) kə-si 系のうちで済州島に見られる(1a) kΛ-u-ri という語形は第1音節に母音‘Λ’を含んでいるが、文献上ではそれに対応する母音を含む語形は見られないようである。

次に、(3) tʃi-reŋ-i 系に対応すると思われる用例は17世紀以降に見られ、最も古い語形は디룡이で、これは『訳語類解』の記録からも分かるように漢字語「地龍」に由来するものである。

오계알 혼 낫과 디룡이 마늘고 작고 사니를 어더 (烏鷄卵一枚 地龍活而細小者一條)

<1608 痘瘡集要 上 8b>

蚯蚓 디룡이 <1613 東医宝鑑 2:13b>

蚯蚓 디룡이 地龍 上同 <1690 訳語類解 下 35a>

蚯蚓 지룡이 <1790 蒙語類解 下 35b>

上の2つの用例のように、しばしば医学書に登場し、薬として用いられていたことが分かる。18世紀後半の文献からは語頭子音が口蓋音化した用例が見られる。

現代語と同じ지렁이という語形は、19世紀末の『独立新聞』の記事に見られる。

지렁이와 검어리가 다 썩 업는 즘승 밋히 드러 <1896 独立新聞 02>

この語形は 디렁이 > 지렁이 > 지렁이 という変遷を経たことになる。このうちで第2音節の母音は jo > ㅝ と変化したことになるが、これは一般的な音変化とは言えず、意味的に近接した他の語（例えば 구렁이 「アオダイショウ」）への類推による変化かもしれない。

なお、中国語では「地龍」は「陸上の龍」と「蚯蚓」の2つの意味があるが、蚯蚓の意味で用いられたものは漢薬に関するものが多い。

地龍散 治腰脊痛，或打撲損傷，… <1276 頃 蘭室秘藏>

蚯蚓即地龍也，一名曲蟺。 <13～14 世紀 月令七十二候集解>

蚯蚓即地龍也。 <16 世紀前半 七修類稿・天地・氣候集解>

朱林彬 (2015: 9)の調査結果によれば、ミミズに対して「地龍」が使われるのは漢薬に関する記録が大部分で、そのほかの文献では「蚯蚓」が使われている。

最後に、(2) tat-tʃi-ne 系については、文献上の記録は見いだせなかった。

4 考察

以上で見た3系統の語形について、それぞれの特徴をまとめておく。

まず、(1) ko-si 系は、固有語であり、古くから使われた語形であった。しかし、蚯蚓だけを表わすのではなく、蛔虫（回虫）や蛇など、体が細長く蠕動により移動する虫（小動物）の総称であったと考えられる。これは英語の worm, ドイツ語 Wurm などとも類似している。

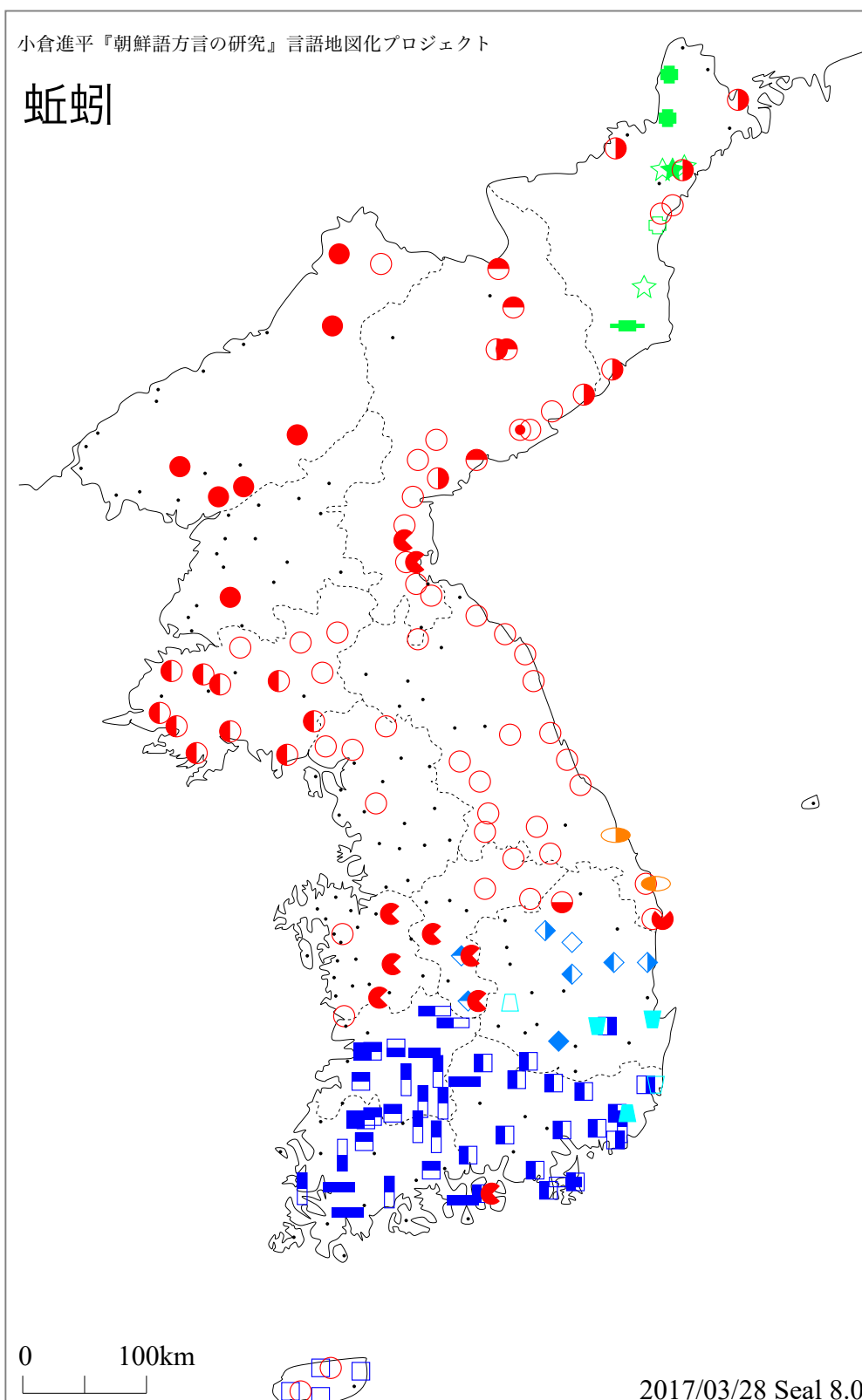
次に、咸鏡北道に見られる(2) tat-tʃi-ne 系は、百足（むかで）を意味する 지네 に 닻-が接頭してできた語形かもしれない。

最後に、(3) tʃi-reŋ-i 系は、語源は上で見たように漢語の「地龍」であったと考えられる。もともと固有語が存在したのに、新たに借用語が用いられるようになった理由は、上の用例でみたように、韓国語の側でも中国語の側でも「地龍」が中央で漢薬名として用いられたためであろう。このことは、この語形が半島の中央部を中心に分布していることから支持される。

参考文献

朱林彬 (2015) 『韓国語語彙史研究—小倉進平の方言調査に基づいて—』2015 年度東京大学人文社会系研究科修士学位論文。

蚯蚓



- kA-u-ri
- kə-si
- ▣ kə-siŋ-i
- ▤ ʔkə-siŋ-i
- ▥ kə-si-raŋ
- ▦ ki-si-raŋ
- ▧ kə-si-reŋ-i
- ▨ kə-si-raŋ-tʃʰi
- ▩ kə-seŋ-i
- ʔkə-seŋ-i
- ▬ kə-səŋ-gə-ri
- ▮ kət-ʔkeŋ-i
- ▯ ʔkət-kəŋ-i
- ▰ ʔkət-ku-ri
- ▱ ʔkə-ʔkeŋ-i
- ◊ kəl-ʔkəŋ-i
- ◈ kəl-geŋ-i
- ◉ kəl-ʔkweŋ-i
- ◊ ʔkəl-ʔkeŋ-i
- ◈ ʔkin-ʔkeŋ-i
- ◉ tat-tʃi-ne
- ◊ tat-tʃi-re
- ◈ tet-tʃi-ne
- ◉ tet-tʃi-re
- ◊ tɛ-ʔtʃi:n
- ti-reŋ-i
- tʃi-reŋ-i
- ◐ tʃi-reŋ
- ◑ tʃi-re-i
- ◒ tʃi-re
- ◓ tʃi-re-dʒi
- ◔ tʃi-reŋ-i
- ◕ tʃi-riŋ-i
- ◖ ʔtʃi-riŋ-i
- ◗ ʔtʃil-ʔkeŋ-i
- ◘ ʔtʃil-ʔkoŋ-i
- NR

煙

澁谷 秋

1 はじめに

韓国の標準語は *jon-gi* (연기) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「雑」に「煙」という項目名で 17 種記録されている(上: 505–506)。

これらの語形は、固有語の *nɛ* 系統と漢字語の *jon-gi* 系統に大きく分けることができる。

(1) *nɛ* 系

- (1a) *nɛ* / *nɛ-gul* / *nɛ-gu-ri*
- (1b) *nɛŋ-gal* / *nɛŋ-gwa-ri* / *nɛŋ-gi*
- (1c) *nɛn-nɛ*
- (1d) *nœ* / *nœŋ-gi*

(2) *jon-gi* 系

- (2a) *jon-gi* / *jon-ge* / *jon-gii*
- (2b) *joŋ-ge* / *joŋ-gii*
- (2c) *jen-gi* / *jeŋ-gii*
- (2d) *en-gi*

(2)の *jon-gi* 系は第一音節の中声が ‘ɔ’ のものと ‘e’ のものがあり、さらに終声が ‘n’ のものと ‘ŋ’ のものがある。

2 その他の語形

「煙」にあたる語は『韓国言語地図』(2008)および『韓国方言資料集』(1987–1995)の調査項目に含まれていない。『우리말 큰사전』(1991)と『標準国語大辞典』(1999)によると上記の語形以外に 내구래기, 냉내, 냉거리, 냉걸, 냉귀, 냉구리, 냉글, 연게, 연구내이, 영구, 영기, 영기が見られる。내구래기는(1a)の変種, 냉내, 냉거리, 냉걸, 냉귀, 냉구리, 냉글は(2b)の変種, 연게, 연구내いは(2a)の変種, 영구, 영기는(2b)の変種, 영기는(2c)の変種と考えられる。

3 地理的分布

(1a)は咸鏡道, 平安道, 黄海道, 忠清南道, 全羅道, 慶尚南道および京畿道と江原道の一

部でみられる。(1b)は平安北道, 全羅道と慶尚南道の一部地域に見られる。(1c)は平安道と黄海道の一部で見られる。(1d)は済州島だけで見られる語形である。

(2a)は忠清道, 慶尚道および京畿道, 江原道, 全羅道の一部で見られる。(2b)と(2c)は全羅道と慶尚南道に固まって分布している。

現在の標準語である(2a) jon-gi は慶尚道でのみ見られる。(1) ne 系は北部地域及び南西部に, (2) jon-gi 系は慶尚道を中心とした南東部に分布していて, 固有語系と漢字語系を使用する地域に比較的是っきりと分かれているといえる。

4 文献上の記録

文献上もっとも古い語形はㄴᆞᆫで『月印釈譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1461), 『訓蒙字會』(1527)などに見られる。

이 烟烟火황 | 잇느니잇고 { 烟烟은 ㄴᆞᆫ라 } <1459 月印釈譜 25:105b>
煩惱濁을 부출씩 이런드르 그 야이 ㄴᆞᆫ 곧느니라 <1461 楞嚴經諺解 5:57b>

(1)ne 系のㄴᆞᆫ以外の語形は小倉進平の表記とは異なるが, (1c) nen-ne にあたる¹⁾넛내, (1b) nen-gwa-ri にあたる²⁾넛과리가 17 世紀以降の文献で見られる。

스로운 내 굽지지는 내 힐름의 초흔는 내 넛내 초쓰는 내 <16--痘瘡經驗方 14b>
가마괴 진 굽트니는 살고 순 넛과리 굽트니는 죽느니라 <16--馬經抄集諺解上 28b>

しかし, 例からもわかるようにこれらは「におい」や「煤」という意味で用いられ「煙」の意味で用いられる用例はなかった。なお, 『우리말 큰사전』(1991)による語義は以下の通り。

냉갈 : ①→냉과리. ②→내. (전라) ③연기. (전남)
냉과리 : ①채 다 피지 못하여 연기와 냄새가 나는 솥. ②→내. (평북)
넛내 : ①연기의 냄새 또는 음식에 땀 연기의 냄새. ②→내. (평안, 황해) ③연기. (평북)

これらの語が「煙」の意味を持つようになった経緯に関してはよくわからない。

(2) jon-gi 系は jon-gii が 19 世紀から, jon-gi が 20 世紀からみられるようになる。

검은 연기 들으고 희미히 흐 미 쫓를 뺏느니라 <1852 太上感應篇圖說諺解 1:42a>
연고 緣故 연골 軟骨 연기 煙氣 연두 軟黃色 연란 <1895 国韓會語 216>
등잔이나 초불 연기를 쏘이거나 먹을 가야 칠흔 후에 <1906 京鄉新聞>

5 考察

(1a) *ne* に関して、小倉進平は [*ne*] と [*neː*] の区別をしていないが『韓国方言辞典』(1978)によれば、長母音で実現する地域の方が多い。[*ne*] で現れるのは慶尚南道(忠武¹、巨濟、河東)、全羅南道(光陽)の計4地点である。長母音で現れるのは以下の地域である。

忠清北道(黄間、陰城)、忠清南道全域、全羅北道全域、全羅南道の靈巖、光州を除いた全域、江原道(伊川)、済州島全域、黄海道全域、京畿道(仁川、江華、議政府、加平、広州、長湍、開城)、平安北道(龍岩浦、鉄山、宣川、定州、亀城、龍川、博川、雲山、義州)、平安南道(平壤、大同、江西、中和、祥原、龍岡、漢川、永柔、寧遠、順川、成川、江東)。

また上述したように、(1) *ne* 系のうち、(1b) *neŋ-gwa-ri* と(1c) *nen-ne* にあたる 닳내, 닳과 리は17世紀ごろから使用されているが、これらは「におい」や「煤」の意味で用いられていて、「煙」の意味で用いられる用例はなく、これらの語形が「煙」の意味で用いられるのは現代語の方言形に限ったことであるようだ。これは中世語において 닳が煙を、내がにおいを意味する語であったことが関係するのかもしれない。(1)の *ne* 系は固有語であるが、語源は未詳である。

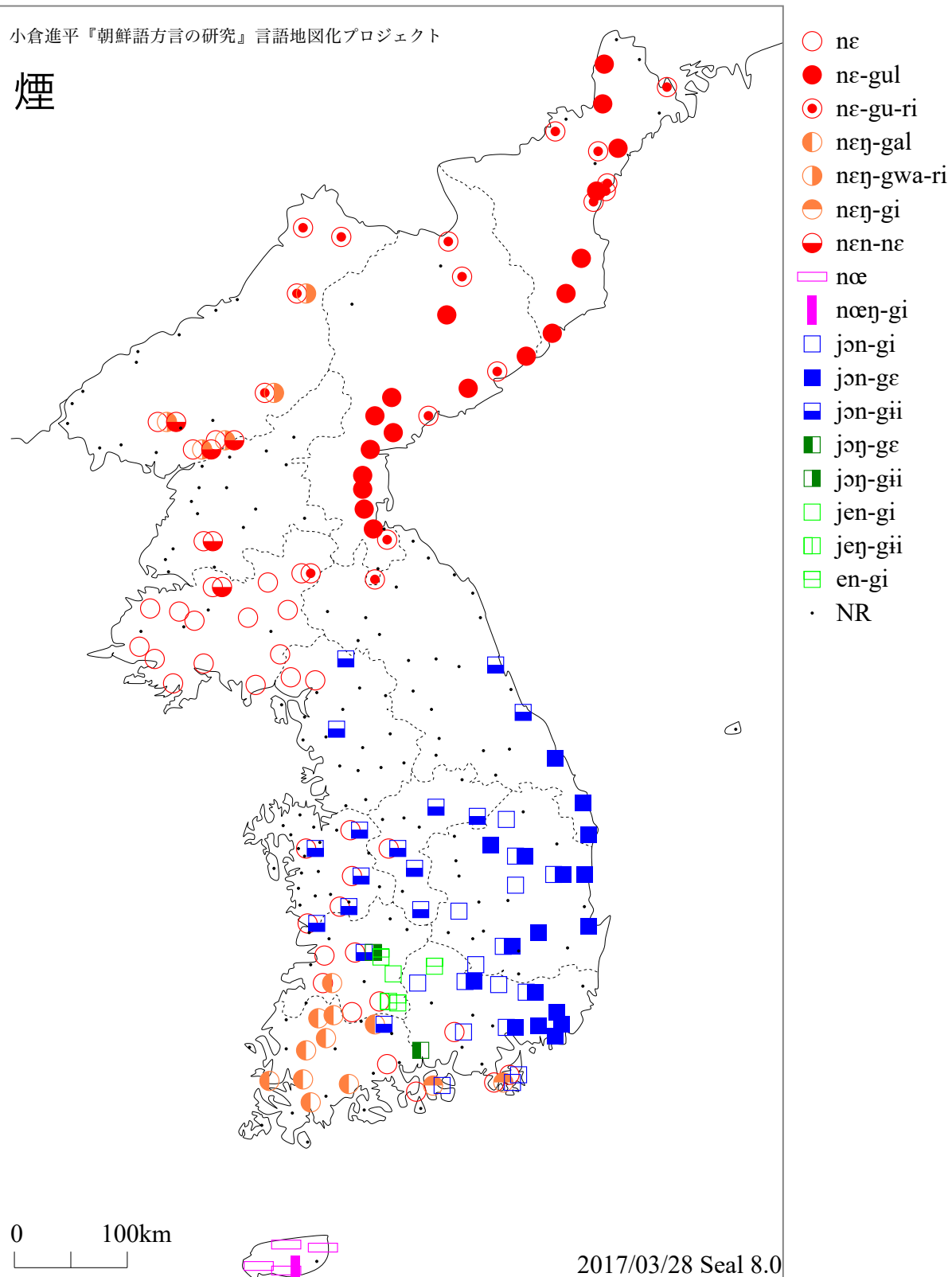
(2)の *jən-gi* 系は「煙氣」の漢字語で該当する朝鮮漢字音は ‘연기’ であるから、(2)のなかでより古い語形は(2a)の *jən-gii* であり、*jən-gii* や *jeŋ-gii* へ変化したものがそれぞれ(2a) *jən-gi*, *jən-gɛ*, (2b) *jən-gɛ*, (2c) *jen-gi*, (2d) *en-gi* に変化したものと考えられる。

参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.
金敏洙(1997)『우리말語源辞典』ソウル：太学社.
崔鶴根(1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.
劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.
韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集 1-8』ソウル：韓國精神文化研究院.
한글학회(1991)『우리말 큰사전』ソウル：語文閣.

¹ 下線が付された地域は小倉の調査地点に含まれていない地点である。

煙



炭

澁谷 秋

1 はじめに

韓国の標準語は sut (矣)であるが, これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「雑」に「炭」という項目名で8種記録されている(上: 509)。

これらの語形は標準語形と同じ一音節語の系列と二音節語の二つのグループに大きく分けることができる。

(1) sut 系

(1a) sut

(1b) ?suk

(2) sut-ki 系

(2a) sut-ki / sut-ku

(2b) sut-tʰi / sut-tʰu

(3) sut-kəŋ 系

(3a) sut-kəŋ

(3b) sut-tiŋ-i

(1)には‘sut’と語頭が濃音化した‘?suk’がある。(2)と(3)は第二音節がkのもの((2a), (3a))とtのもの((2b), (3b))がある。(2b) sut-tʰu は咸鏡道會寧で¹, (3b) sut-tiŋ-i は慶尚北道大邱のみで見られる語形である。

2 その他の語形

これ以外の語形として『韓国方言資料集』(1989)と『韓国言語地図』(2008)には수꺼멍, 수꾸, 수꿍, 수꾸が見られる。いずれも慶尚北道で見られるもので, 수꺼멍は(3)の変種, 수꾸と수꿍は(3a)の変種, 수꾸は(2a)の変種と考えられる。

また、『韓国方言資料集』には(1a) sut の長母音の‘su:t’も全国の数地点で記録されている。‘su:t’が記録されているのは江原道固城, 寧越, 京畿道龍仁, 利川, 驪州, 忠清南道扶餘, 論山, 全羅北道井邑, 慶尚南道統營の計9地点である。

また, 小倉進平の調査で未調査地点の多い慶尚南道と江原道に関しては矣, 矣の語形が

¹ 『韓国言語地図』によると江原道三陟の1箇所でも見られる。なお小倉進平の調査で江原道三陟には(1a)の語形だけが記録されている。

記録されている。ただし、小倉進平の調査では(1a) sut の終声の音が入, ㅌ, ㅍのうち何で実現するかによる区別はなされていない点に注意する必要がある。

その他『標準国語大辞典』や『우리말큰사전』には수깅이, 수뽕이의ほか, 수끼, 수꾸, 수티, 수뽕, といった小倉進平の調査結果とは異なる正書法で記載がなされている。

3 地理的分布

(1a)の sut は黄海道, 京畿道, 忠清道, 全羅道, 済州島といった朝鮮半島西部地域を中心に幅広く分布するほか, 平安道, 咸鏡南道, 江原道にも数地点見られる。また, 2 で見たように小倉進平以外のデータによれば, 慶尚南道全域及び江原道のなかで小倉進平による調査が行われなかった地点にも分布する。

(1b)の?suk は平安道のみで見られる。

(2)は咸鏡道だけでみられる語形である。特に(2a)の sut-ku は咸鏡南道の文川, 高原, 永興の3箇所だけでみられる。(2b)は咸鏡北道の北部地域に数地点だけ分布する。

(3)は慶尚道だけでみられる語形である。(3a) sut-kɔŋ は慶尚北道全域及び慶尚南道蔚山で見られ, (3b) sut-tiŋ-i は慶尚北道大邱の一箇所のみで見られる。

4 文献上の記録

最も古い語形はㅅ(これは単独形としてはㅅで実現する)で『月印釈譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1462), 『心經諺解』(1464), 『救急簡易方』(1489), 『訓蒙字會』(1527), 『新增類合』(1576)など数多くの文献に見られる。

날 爲鎌 이아 爲綜 사슴 爲鹿 ㅌ 如 ㅅ 爲炭 울 爲籬 누에 <1446 訓民正音諺解 57>
火炭이 ㅌ외야 목 머거늘 炭은 ㅅ기라 目連이 마장 소리 ㅎ야 <1459 月印釈譜 23:92b>

このほか, ㅅㅌは最も早い用例としては『癸丑日記(16--)』に1例見られ, それ以外には18世紀の文献に2例, 20世紀には1例ずつ見られた。

불이 나느니라 모다 ㅌ답 ㅎㅌ ㅅ친 불이 나면 <16--癸丑日記>
도탄은 ㄷ흙과 ㅅ치라 ㅎ니 <1777 明義録卷首下御製綸音:1b>
炭 ㅅ치라 銀釵 銀 빈혜 <1792 增修無冤録 1:20a>
불이 ㅌ느ㅌ 나무와 ㅅ출 ㄷㅎ니 <1904 大韓毎日新報>

ほかの語形の用例は見当たらず, ㅅが中心的に用いられてきたといえる。また, 中期朝鮮語では激音であることを示すために前の語の終声に入をつける場合が多くみられることを鑑みると, 結局ㅅㅌとㅅは表記上の違いであり, 現代語の標準語形ㅅはㅅㅌから成った語であるといえる。

5 考察

小倉進平の調査では(1a) sut の終声の音が入, ㅌ, ㅍのうち何で実現するかによる区別はなされていないが、『韓国方言資料集』と『韓国方言地図』はそれぞれ助詞が結びついた形態での調査を行い、実現する終声の音によってㄷ, ㅌ, ㅍの三つに分けて記述している。それらの結果はほぼ一致していて、ㄷは忠清南道, 全羅道, 済州島といった朝鮮半島西南部を中心に分布し、ㅌは京畿道を中心に江原道, 忠清北道, 慶尚北道, 全羅南道の一部に分布する。さらに、ㅍは江原道と慶尚道の朝鮮半島の南東部に分布している。なお、ㅍ形は을, 에が結びつく場合, [수틀], [수테]で現れるが, 이が結びつく場合は[수치]で実現する。

(1a) sut の終声は形態音韻論的に入, ㅌ, ㅍの形態があり得るがこれら三形態がどのように成立したのかに関しては今回の調査では資料の関係上わからなかった。(1b)の?suk はㅍが縮約し、語頭が濃音化した語形と考えられる。

(2)はㅍㅌやㅍㅌㅌに助詞이が接続した sut-ki, sut-tʰi が何らかの形で基本形となり、さらに第二音節の母音が円唇化して sut-ku, sut-tʰu になったと考えられる。

(3a)の sut-kɔŋ はㅍㅌに名詞形転成語尾-영が結びついた語形と考えられる。大邱だけに見られる(3b) sut-tiŋ-i に関しては『標準国語大辞典』に記載のある수쟁이(黄海道・平安道方言)、や수쟁이(慶尚北道方言)が何か関係するのかもしれないが、詳細はよくわからない。

語源はいずれの語形に関しても未詳である。

参考文献

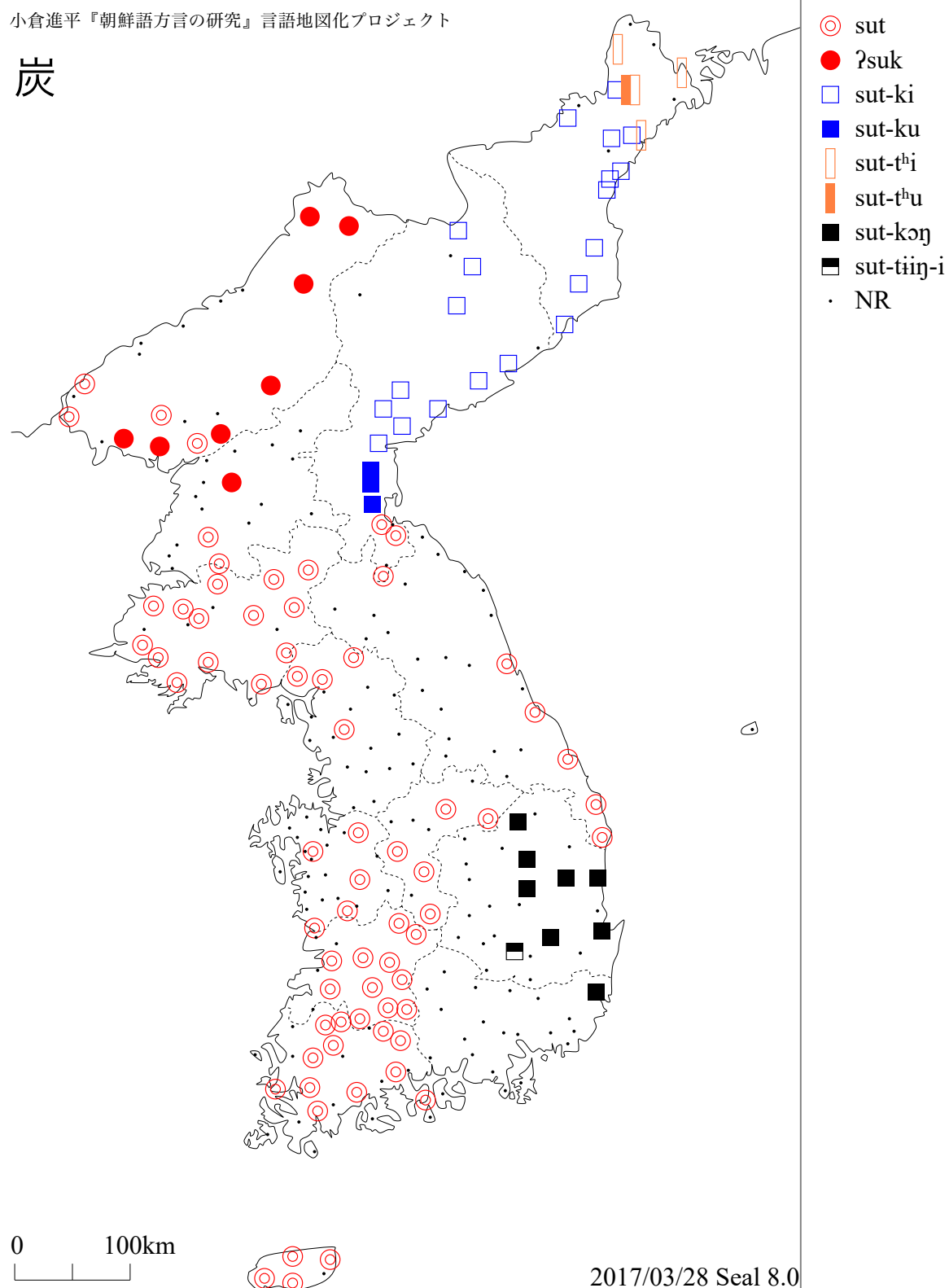
国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.

劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.

韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集 1-8』韓国精神文化研究院.

한글학회(1991)『우리말 큰사전』ソウル：語文閣.

炭



執筆者一覧（五十音順）

岩井亮雄	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
岡村佳奈	東京大学大学院総合文化研究科博士課程
金玉雪	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
澁谷秋	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
朱林彬	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了
徐攸廷	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
張河林	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
鮑潤叙	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
福井玲	東京大学大学院人文社会系研究科
山崎玲美奈	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
李在鎬	東京大学大学院総合文化研究科博士課程
李美姬	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
梁紅梅	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
林 静	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
林茶英	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程